広島市の文化財　第27集

広島市安佐北区白木町所在

佐久良遺跡発掘調査報告

1984. 3

広島市教育委員会

はしがき

広島市の北部に位置する白木町は，これまで比較的開発がゆるやかで，自然がよく残されている地域でした。近年，農道の新設，ほ場整備など，地域の活性化に向けての工事が徐々にすすんでおりますが，今回調査を行った遺跡は，農道の建設工事中に発見されたものであります。幸い，工事関係者の全面的なご協力により，発掘調査を終えることができました。

調査の結果，人骨をともなった石棺等が出土しました。その中の一基は，志屋小学校に移設，復元し，ご活用いただくこととしました。白木町で開発等にともなって発掘調査が行われたのは初めてであり，地域の方々の関心が高く，発掘調査や現地説明会にはたいへん多くの方がおいでくださいました。

この調査にあたり，ご指導，ご援助いただきました多くの方々に，厚くお礼申し上げるとともに，この報告書が歴史研究や郷土理解のために役立つことを願らて止みません。

昭和59年3月

広島市教育長　藤　井　　尚

例　　言

1．本書は，広島市安佐北区白木町志路における農道建設工事に伴い，昭和57年9月16日，17日及び，昭和58年5月9日から7月8日までの間，実施した佐久良遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，広島市経済局農林水産部耕地課から依頼を受けて，広島市教育委員会が実施した。

3．本書は，Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴを阿部　滋，Ⅵを松下孝幸，分部哲秋が執筆し，阿部が編集した。

4．出土遺物，遺構の実測・製図・写真撮影は，阿部が行った。

5．発掘調査において出土した人骨の鑑定は，長崎大学医学部解剖学第２教室に委託した。

6．本書掲載の航空写真撮影は，スタジオ・ユニに委託した。

7．第１図は，建設局国土地理院発行の50,000分の1，可部の地形図を複製したものである。

目　　次

Ⅰ　はじめに　1
Ⅱ　位置と環境　3
Ⅲ　遺　　構　6
Ⅳ　遺　　物　18
Ⅴ　ま　と　め　23
Ⅵ　付　　編　25

挿図目次

第１図　佐久良遺跡の位置と周辺の主要な遺跡
第２図　佐久良遺跡遺構配置図
第３図　第１号石棺実測図
第４図　第２号石棺（上），第３号石棺（下）実測図
第５図　第４号石棺実測図
第６図　第５号石棺実測図
第７図　第６号石棺実測図
第８図　第７号石棺（上），第８号石棺（下）実測図
第９図　第９号石棺（上），第10号石棺（下）実測図
第10図　石蓋土壙実測図
第11図　第１号土壙（上），第２号土壙（下）実　　測図
第12図　弥生土器実測図
第13図　須恵器実測図
第14図　須恵器出土状態実測図
第15図　鼓形器台，長頸壺実測図

図版目次

PL.　１佐久良遺跡全景（航空写真）
PL.　２ a. 佐久良遺跡近景（調査前）
　b. 同上（調査後）
PL.　３ a. 第１号石棺（検出時）
　b. 同上（開棺後）
PL.　４ a. 第１号石棺（調査後）
　b. 第２号石棺（検出時）
PL.　５ a. 第３号石棺（検出時）
　b. 同上（調査後）
PL.　６ a. 第４号石棺（検出時）
　b. 同上（開棺後）
PL.　７ a. 第5，6，7号石棺（検出時）
　b. 同上（調査後）
PL.　８ a. 第５号石棺（検出時）
　b. 第８号石棺，石蓋土壙（検出時）
PL.　９ a. 第８号石棺（検出時）
　b. 同，上（調査後）
PL.　10a. 石蓋土壙（検出時）
　b. 同上（調査後）
PL.　11a. 第９号石棺（検出時）
　b. 同上（開棺後）
PL.　12a. 第10号石棺（調査後）
　b. 溝状遺構（調査後）
PL.　13a. 第１号土壙（検出時）
　b. 第２号土壙（検出時）
PL.　14a. 高杯形土器出土状態
　b. 須恵器出土状態
PL.　15　佐久良遺跡出土土器，遺跡周辺出土土器
PL.　16　佐久良遺跡出土土器

Ⅰ　は　じ　め　に

昭和57年９月14日，広島市安佐北区白木町大字志路字佐久良・橋谷で，農道建設工事中に人骨が発見されたため，当該工事の原因者である広島市経済局農林水産部耕地課から，広島市教育委員会あて，その取り扱いについて指導を受けたい旨通報があった。これを受けて，市教育委員会は，16，17日の両日，社会教育課文化財係職員を現地へ派遣し，人骨が発見された箱式石棺３基の緊急調査を行った。さらに．周囲を探査した結果，工事区域内に他にも埋蔵文化財が存在することを確認した。このため，市教育委員会は，原因者に対して工事の中断と，文化庁あて遺跡の発見届の提出を求めるとともに，この遺跡の取り扱いについて両者間で協議を重ねたが，地形的条件から路線変更は困難であるほか，遺跡の遺存状態からみてやむを得ず記録保存をはかることとし，昭和58年度に発掘調査を実施することになった。

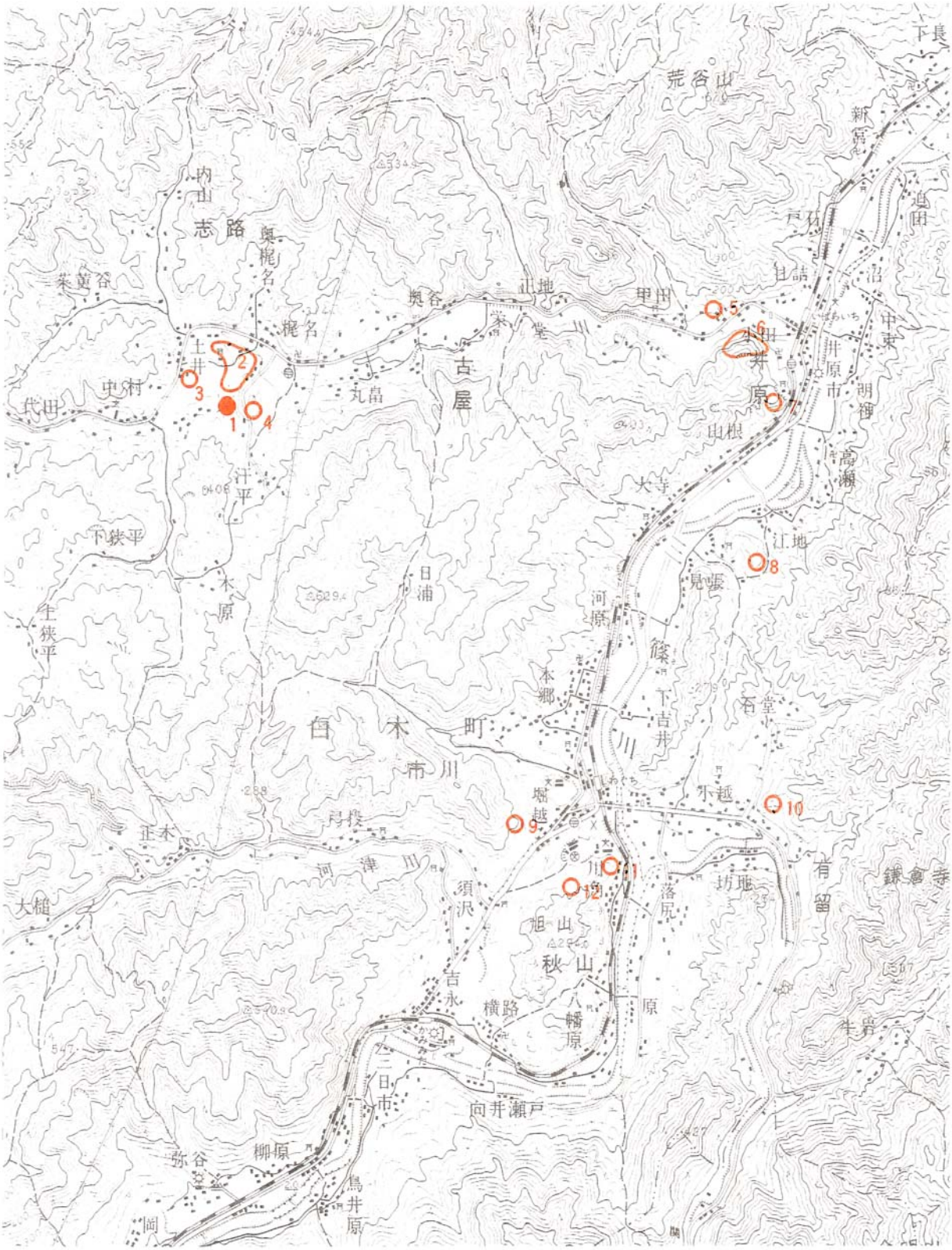
昭和58年４月より発掘調査の準備にかかり，５月９日から調査を開始し，７月８日に終了した。

なお，調査の関係者は下記のとおりである。

調査依頼者　　広島市経済局農林水産部耕地課
調査主体　　広島市教育委員会
調査担当係　　広島市教育委員会社会教育部社会教育課文化財係
調査関係者　　森脇　昭之（社会教育部長）
上川　孝明（　〃　課長）
佐藤　普門（　〃　主監）
木原　　亮（　〃　課長補佐兼文化財係長）
桧垣　栄次（　〃　文化財係主事）
池本　公二（　〃　〃　〃　）
橋本　義和（　〃　〃　〃）
石田　　実（　〃　〃　〃，退職，現福山市役所勤務）
吉本　由紀（　〃　〃　嘱託）
調　査　者　　石田　彰紀（　〃　〃　主事）
幸田　　淳（　〃　〃　〃　）
中村　眞哉（　〃　〃　〃　）
阿部　　滋（　〃　〃　〃　）
調査補助員（順不同）
平林麗子，芥川ツヤ子，松重信子，隅田フデミ，久保田アサ子，大崎初子，中矢珠恵，山本ケサ子，水野八重子，芥川武子，佐伯清乃，一本木フミエ，大崎ミサオ，瀬戸弘江，．横田好江，住川香代子

また，広島市経済局農林水産部耕地課及び農政課，白木公民館，白木建設の関係者の方々には，調査を円滑に進めるために多大なご配慮，ご援助を頂いた。さらに，長崎大学医学部解剖学第２教室の松下孝幸先生，分部哲秋先生には，出土人骨を鑑定していただき玉稿を得た。ここに記して謝意を表したい。

なお，今回の調査では，人骨が発見されたためか終始多くの見学者があり，市民の関心が高かったことを付記しておきたい。



1．佐久良遺跡　2．宮崎古墳群　3．マル山遺跡　4．佐久良東遺跡
5．小田古墳群　6．市古墳群　7．ロクセン古墳群　8．塚ヶ原古墳群
9．塔の岡古墳群　10．実相寺古墳群　11．旭山古墳　12．旭山遺跡

第１図　佐久良遺跡の位置と周辺の主要な遺跡

Ⅱ　位　置　と　環　境

佐久良遺跡は，広島市安佐北区白木町大字志路字佐久良・橋谷に所在する。

本遺跡は，白木山山系のひとつである市川村山（標高629.4m）から北へ派生した丘陵上に位置しており，標高は260m～265m，付近の平地面からの比高は約30mを測る。本遺跡の北側には，三篠川の一支流である栄堂川が東流し，この丘陵先端部付近で大きく屈曲している。また，この丘陵をはさんで西側は平地が小さく谷あいが続いているが，東側には比較的開かれた平地がよこたわっている。

本遺跡が所在する白木町は，広島市の北東に位置している。標高889.7mの白木山を最高峰に，500m以上の山々が12を数え，これらは，ほとんど北東から南西に向かって三列に連なり，全体的に南部の山が高く，北部の山は低い。町域の東寄りには，太田川の一支流である三篠川が南流しており，これが白木町の主水系である。その流路はほぼ直線的であるが，一か所秋山付近で大きく湾曲している。平地は，この三篠川流域と，その支流の栄堂川，河津川，関川流域にみられるが，全体的に狭小である。ただし，三篠川流域のうち，河津川，関川が合流する秋山付近から上流にかけては比較的広い平地が開けており，町内で確認されている遺跡の多くがこの平地を望む丘陵上に数多く分布している。

次に，白木町の歴史的環境についてみると，縄文時代及びそれ以前の遺跡は現在のところ確認されていない。

弥生時代の遺跡としては，旭山遺跡があげられる。この遺跡からは，磨石，敲石，土器片が発見されており，弥生時代後期のものと考えられる。（注1）

古墳時代に入ると，前半期の遺跡は弥生時代同様にほとんどみられず，後半期のものがその大部分を占める。この時期の遺跡としては，実相寺古墳群，小田古墳群，市古墳群，塔の岡古墳群，塚ケ原古墳群，宮崎古墳群などがある。（注2）これらは，ほとんどが横穴式石室を主体部にもつ古墳であるが，塔の岡古墳群，塚ケ原古墳群の中には箱式石棺（後者は竪穴式石室とも考えられる）を主体部にもつものがあり，ある程度時期が遡るものと推測される。

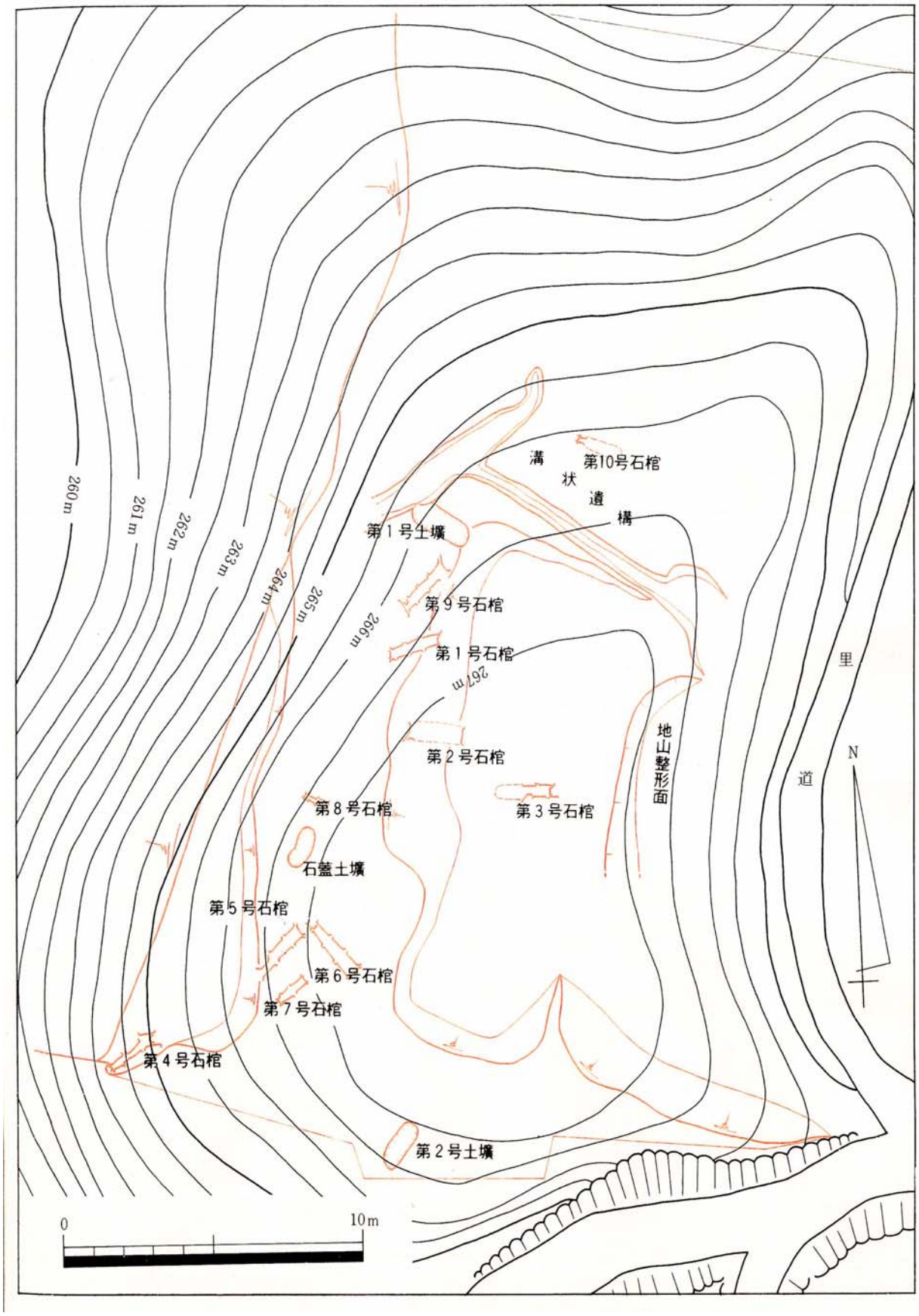
今回調査を行った佐久良遺跡の周辺では，これまでに本格的な遺跡分布調査は実施されたことがなく，いままでに知られている遺跡は，わずかに宮崎古墳群のみである。この古墳群は4基の古墳から成るもので，横穴式石室又は箱式石棺を主体部にもつ。このうち，第1号古墳（箱式石棺）からは，人骨，鉄刀が出土したらしいが，現在では4基とも全壊又は消滅している。（注3）

また，この調査に関連して，本遺跡周辺の分布調査を行ったところ，新たな遺跡を若干追加することができた。まず，本遺跡が立地している丘陵上の前方で，ボーリング探査により石棺4基を確認したほか，弥生土器，土師器，須恵器を表採し，同丘陵の先端部では，全壊に近い横穴式石室1基を発見した（この石室は，宮崎古墳群のものかもしれない）。さらに，この東側に隣接している丘陵上にも石棺2基の存在を予想し，西側の栄堂川対岸にある通称マル山と呼ばれる丘陵では，切土面から箱式石棺の小口部分が露呈しており，付近に崩れ落ちていた棺材などからみて，以前は数基の石棺が存在していたことが推測される。

このように，白木町において現在確認されている遺跡は，その大部分が古墳時代後半期のものと考えられ，それ以前の遺跡はほとんど明らかにされていない。さらに，町内ではこれまでに本格的な発掘調査が行われたことがなく，当地域の原始，古代の様相は十分把握されていない。今回の調査は，それを知る上

で良好な一資料を提供したものと思われる。

（注1）菊山　肇『白木町史』（1980）
（注2）注１に同じ
（注3）注１に同じ



第２図　佐久良遺跡遺構配置図

Ⅲ　遺　　構

本遺跡は，農道建設工事に伴って発見されたため，遺構の多くが撹乱を受けており，その遺存状態はあまり良くない。調査の結果，昭和57年度調査分を合わせて，箱式石棺10基，石蓋土壙１基，土壙２基及び溝状遺構を検出した。以下，それぞれについて概略を述べたい。

なお，石棺及び土壙の呼称については，検出の順次によった。

第１号石棺（第３図）

本石棺は，発掘区域の中央部からやや西寄りに位置し，後述する第２，第３号石棺と伺じく本遺跡発見の契機となった箱式石棺である。石棺を埋置している墓壙は，長さ210㎝，幅88㎝，深さ45㎝を測るが，その上部は工事により掘削されており，周囲の地形からみると旧態は100㎝以上とかなり深く掘り下げられていたと推測される。石棺の規模は，内法で長さ167㎝，幅42㎝，高さ34㎝を測り，主軸はN73°Eと東西に近い向きを指す。石棺は，墓壙を棺材の形状に合わせて調整した後に設置され，側壁は，東西に各１枚・北に３枚・南に４枚の板石が概ね横長に用いられてい乱蓋石は５枚の板石を横長に配置し，特に東端に大型の石材を使用して'いる。蓋石の間には，緑灰色の粘土を詰めて目張りを施し，棺の密閉を図っている。石棺の内部からは，頭を東側に向け成人の人骨、体分が仰臥伸展の状態さ検出された。人骨の遺存状態は比較的良好で，頭蓋骨，大腿骨などはほぼ完全に残っており，頭部には赤色顔料の付着が著しい。なお，本石棺に伴う遺物は，この人骨の他何ら存在しなかった。

第２号石棺（第４図）

本石棺は，第１号石棺から南へ約３ｍのところに近接している。工事による撹乱が著しいため，棺材の大部分が抜き取られ，墓壙の形状さえはっきりしない状態である。この石棺からも人骨が検出されているが，出土状態は全くわからず，その他の遺物は全く検出されなかった。主軸がN79°Wと東西に近い向きをもつこの石棺は，両小口石と側石１枚だけがわずかに残っており，内法の長さは173㎝である。本来の墓壙の深さは，周囲の地形からみて少なくとも70㎝以上と推測される。本石棺の被葬者は，出土人骨の鑑定結果から，成人２体，小児１体と考えられ，頭位は他の石棺の例から東側と考えられる。

第３号石棺（第４図）

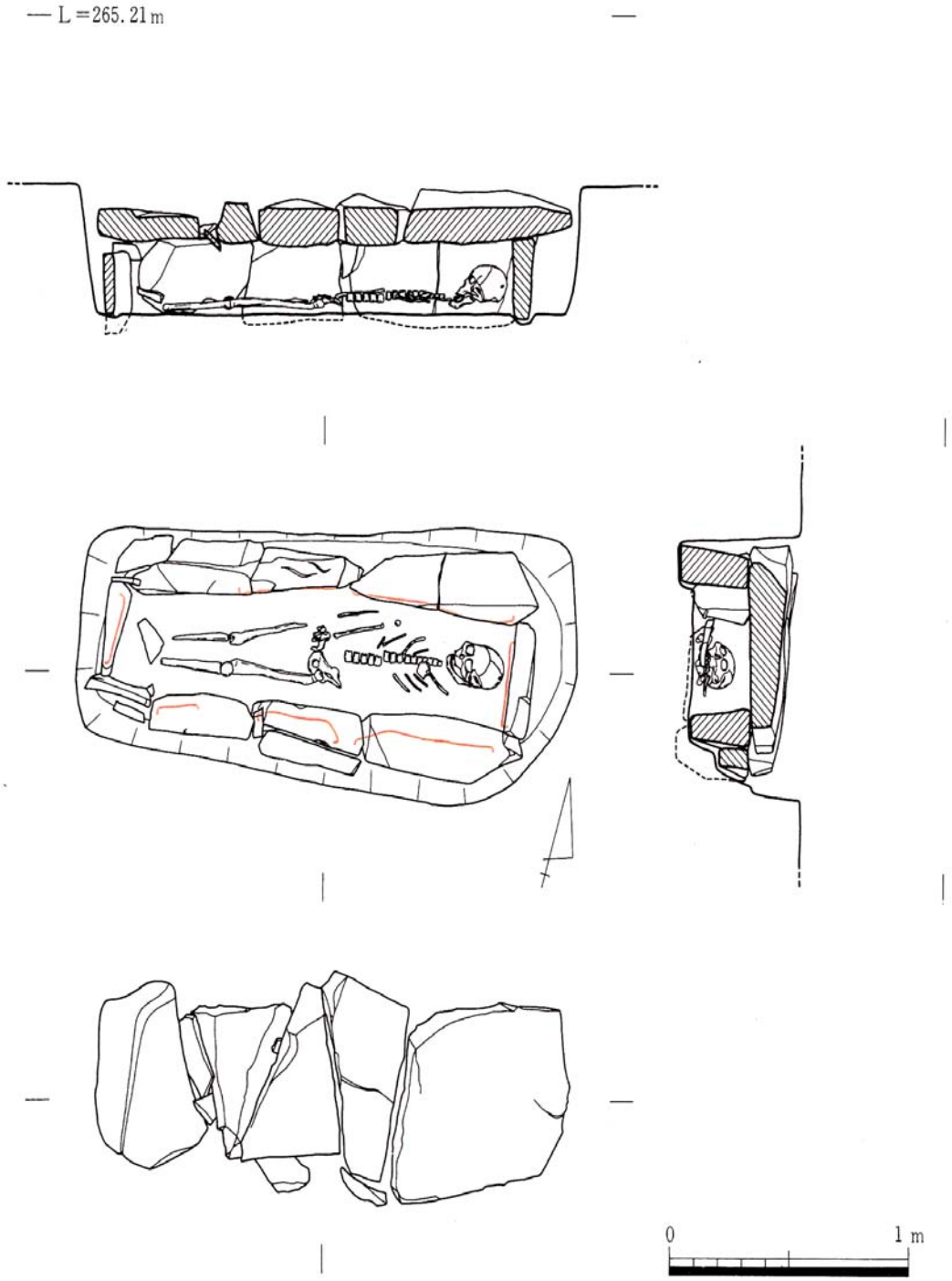
本石棺は，第１号石棺から南東へ約６ｍのところに位置している箱式石棺である。工事による撹乱を受けているため，蓋石は全て取りはずされ，側壁も西半分を欠いている。石棺を納めている墓壙は，現状では長さ200㎝，幅74㎝，深さ25㎝を測るが，その上部は削り取られており，周囲の地形からみて以前は70㎝以上掘り下げられていたと推測される。石棺は，主軸がS72°Eと東西に近い向きを指し，東寄りの小口石と，北に２枚，南に３枚の側石が残っており，内法は幅43㎝，高さ30㎝を測る。破壊をまぬがれた側壁の内側からば，頭蓋骨などの入骨２体分が検出された。共に頭を東側に向けた成人と考えられ，頭部には赤色顔料の付着が認められた。その他の遺物は皆無である。

第４号石棺（第５図）

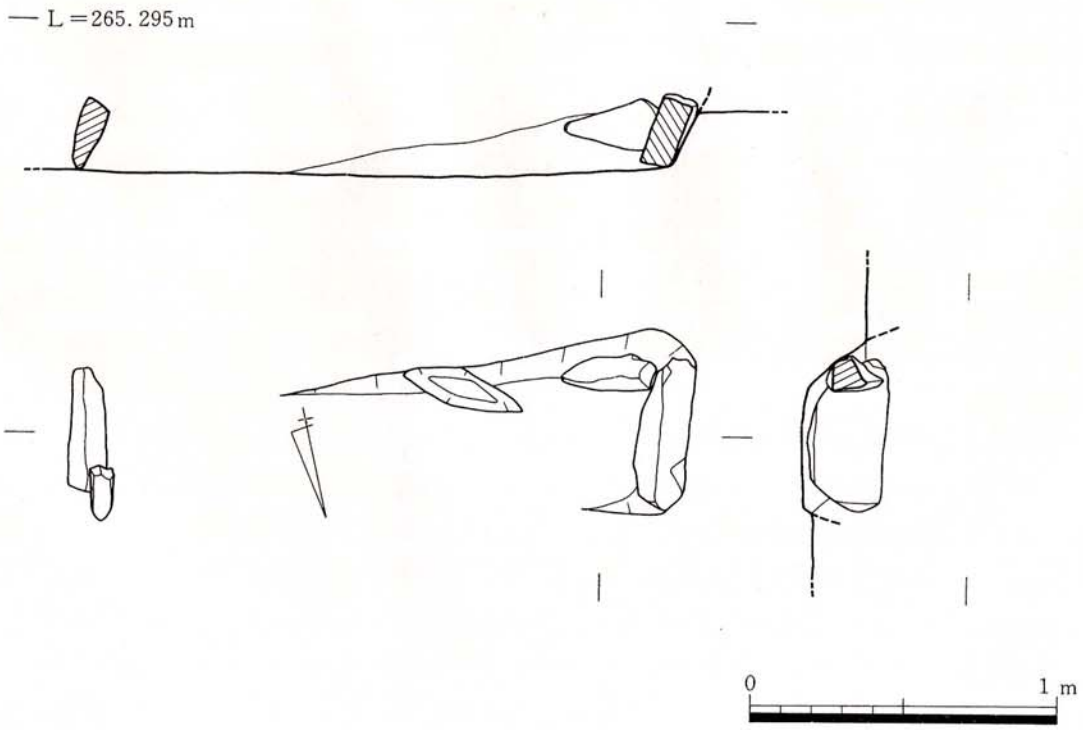
本石棺は，発掘区域の南西寄りの法面に位置している箱式石棺である。工事による撹乱のため，墓壙の北半分が失なわれているが，幅68㎝，深さ80㎝前後を測る。石棺も東半分の棺材が倒壊しており，その規模は，内法で長さ140㎝前後，幅27㎝，高さ19㎝を測り，主軸はN62°Eを指向する。側壁は，小口石に各１枚，側石に各３枚の板石を横長に使用している。蓋石は，５枚の板石から成り，石材の隙間には目張り

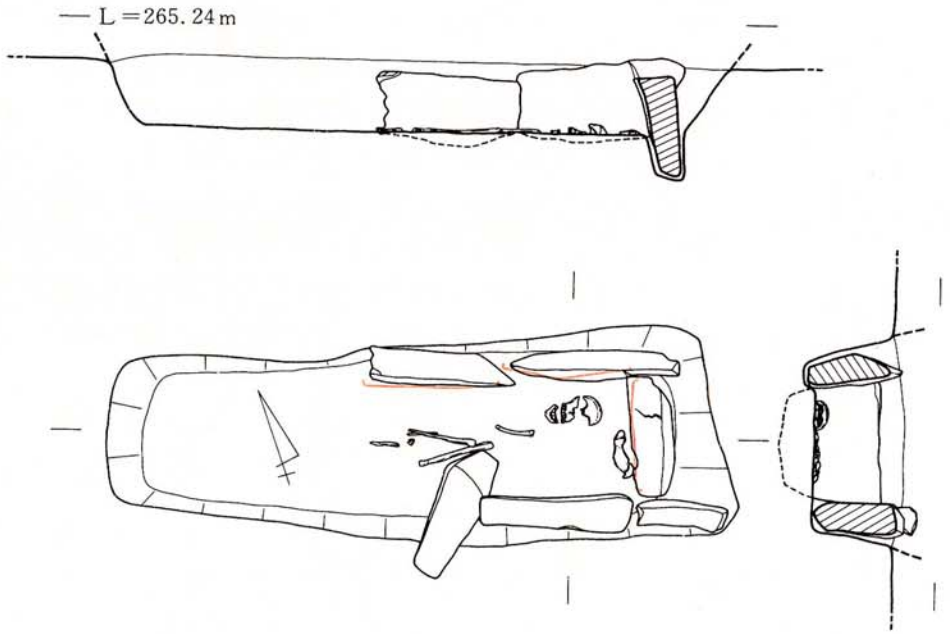
のため緑灰色の粘土を詰めている。倒壊した棺内からは，頭を東側に向けた頭蓋骨などの人骨１体分が検出されており，出土人骨の鑑定結果から小児と考えられる。頭部には赤色顔料の付着が認められた。

なお，本石棺からは，この人骨の他何ら遺物は出土しなかった。

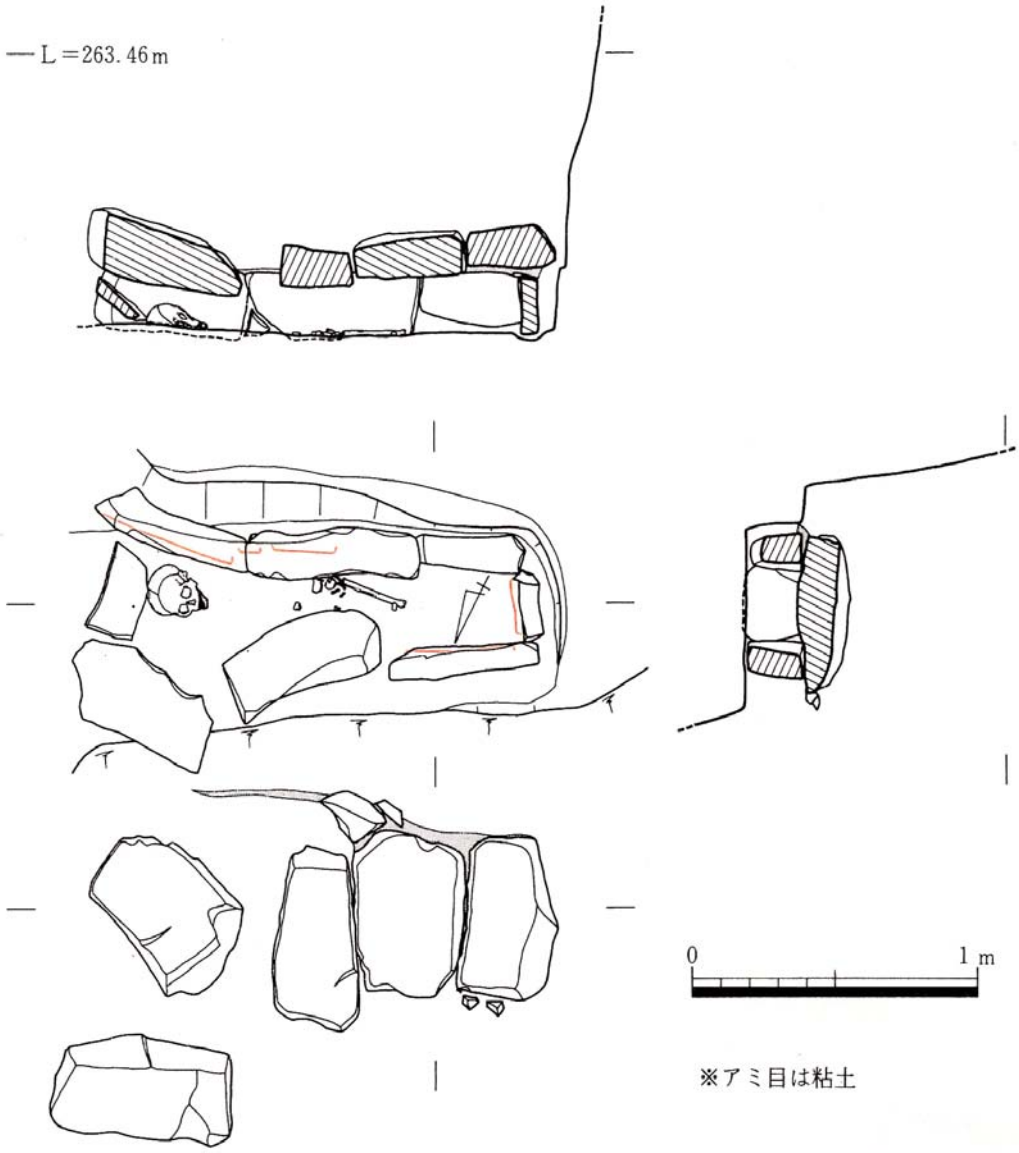


第３図　第１号石棺実測図





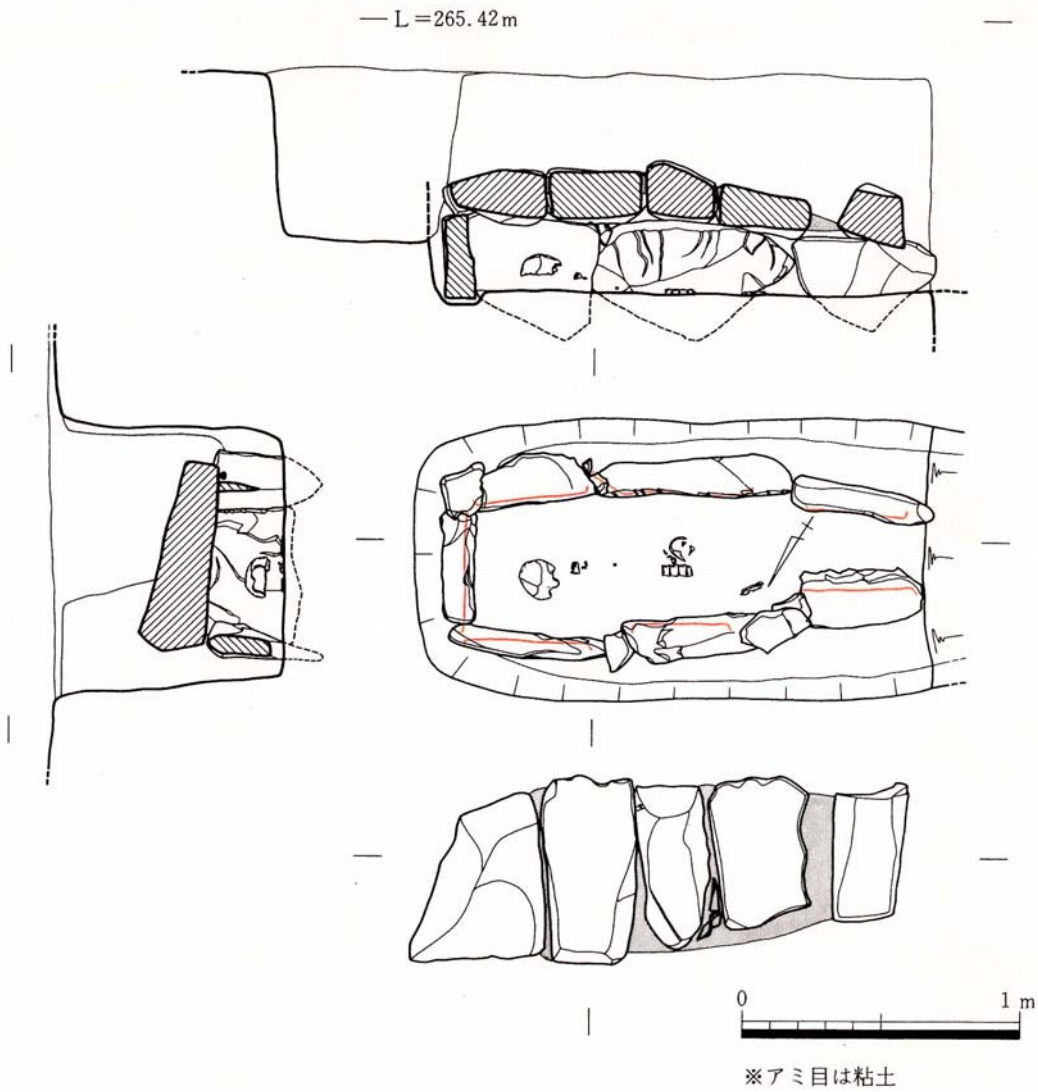
第４図　第２号石棺（上），第３号石棺（下）実測図



第５図　第４号石棺実測図

第５号石棺（第６図）

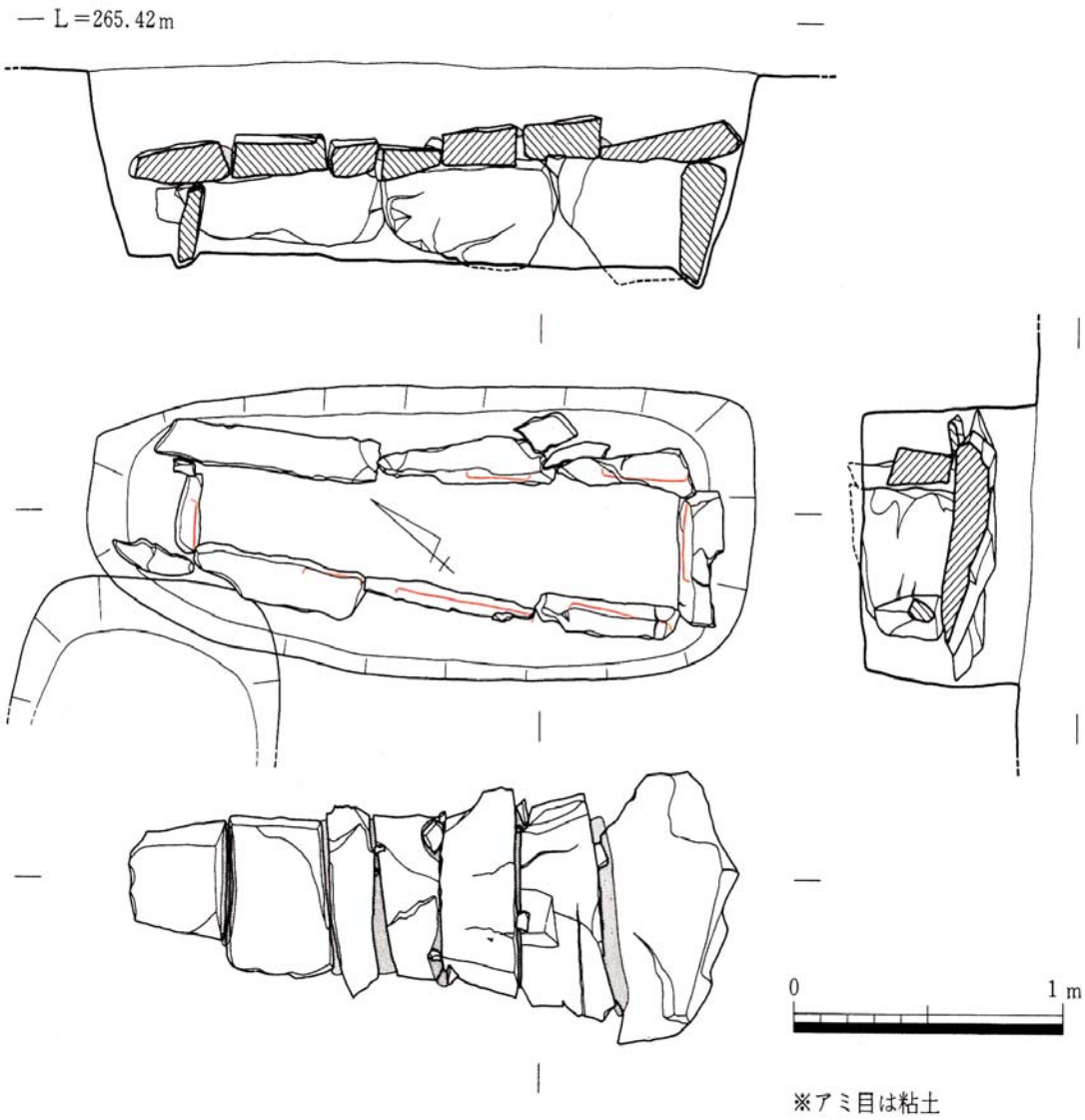
本石棺は，第４号石棺から北東へ約６mのところに位置している箱式石棺で，崖面にその小口部分が露呈しており，調査前から棺の存在を確認していた。墓壙は，南西寄りが失なわれており，その規模は，幅100㎝，深さ80㎝を測る。石棺はこの中に築造され，主軸はN58°Eと北東－南西に近い向きを指す。石棺も南西寄りの小口石を欠いており，内法は，幅45㎝，高さ28㎝である。側壁の棺材は，北東寄りの小口石と側石に各３枚の板石が横長に立てられている。蓋石は，板石が５枚置かれているが，本来は南西寄りにもう一枚あったようである。蓋石の間には，緑灰色の粘土を詰めて目張りを施している。石棺内には，頭を東側に向けた頭蓋骨などの人骨１体分が遺存しており，出土人骨の鑑定結果から成人と考えられる。赤色顔料の付着は認められず，遺物は他に何ら検出されなかった。



第６図　第５号石棺実測図

第６号石棺（第７図）

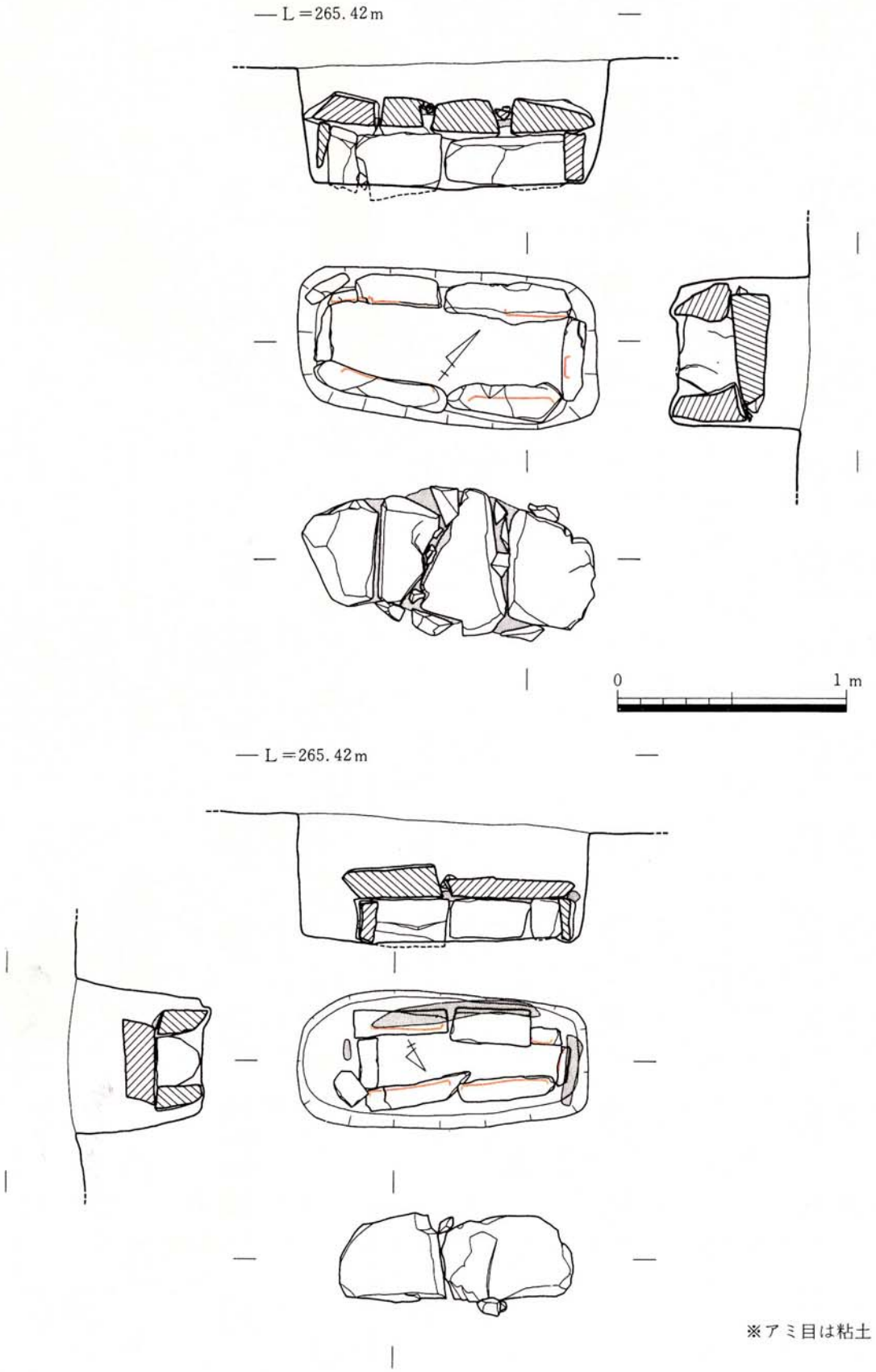
本石棺は，第５号石棺の南東に直交した形で隣接している箱式石棺で，墓壙の一部が第５号石棺と重複しており，築造順序は，切り合い関係からみると第５号石棺→第６号石棺である。石棺の規模は，内法で長さ178㎝，幅35㎝，高さ34㎝を測り，主軸はS53°Eと北西一南東に近い向きを指す。本遺跡に現存する石棺の中では最も大型のものである。石棺を埋置している墓壙は，内法で長さ249㎝，幅95㎝，深さ65㎝の規模を有している。側壁の棺材は，概ね横長に立てられ，小口部分は各１枚，側石は北東に３枚，南西に４枚の板石が使用されている。側壁の形状は，南東に向かって幅広になる傾向をもつ。蓋石は７枚の板石から成り，北東側に大型の石材を配し，中央寄りに比較的細身の石を用いている。蓋石の間には，緑灰色の粘土を詰めて棺を密閉しているが，内部には土砂がかなり流入しており，遺物は一切出土しなかった。本石棺の被葬者は，その規模・形状からみて東寄りに頭を向けた成人と思われる。



第７図　第６号石棺実測図

第７号石棺（第８図）

本石棺は，第５号石棺の南東に並んで隣接している箱式石棺で，内法は長さ102㎝，幅33㎝，高さ25㎝を測り，小児用と考えられる。この石棺は，長さ131㎝，幅70㎝，深さ55㎝の規模をもつ墓壙内に築造され，主軸はN52°Eと北東－南西に近い向きを指す。側壁の棺材は，概ね横長に配置され，小口部分に各１枚，北西に３枚，南西に２枚の板石が用いられている。蓋石には４枚の板石を使用し，北東側に小児用の石棺としては比較的大ぶりな石材を配している。蓋石の隙間には，小石や緑灰色の粘土を詰めて目張りを施しているが，棺内いっぱいに土砂が流入しており，出土遺物は皆無であった。頭位は，棺材の配置及び形状から東寄りに向けられていたと思われる。



第8図　第7号石棺（上），第8号石棺（下）実測図

第８号石棺（第８図）

本石棺は，第１号石棺の南西約６ｍのところに位置している小児用の箱式石棺である。石棺を埋置している墓壙は，長さ127㎝，幅62㎝，深さ57㎝の規模を有する。石棺は墓壙のやや西寄りに位置し，主軸はS62°Ｅを指向する。棺の大きさは，内法で長さ79㎝，幅15㎝，高さ20㎝を測り，今回調査した内では最も小型な石棺である。側壁の棺材は，概ね横長に配置され，小口部分に各１枚，北東に各２枚，南西に３枚の板石から構成される。蓋石は２枚の板石が用いられ，他の石棺と異なり縦長に並らべられている。蓋石と側壁の間には緑灰色の粘土を詰めて目張りを施しているが，棺内には土砂が充満しており，遺物は何ら検出されなかった。頭部は，棺材の配置及び形状から東寄りに向けられていたと思われる。

第９号石棺（第９図）

本石棺は，第１号石棺の北に隣接する箱式石棺で，工事によって墓壙の南西寄りが掘削され，石棺自体も，北東寄りの蓋石及び側石の一部が抜き取られており半壊の状態である。墓壙は，長さ200㎝，幅94㎝，深さ77㎝前後を測り，北東寄りは２段に掘り込まれている。棺内から検出された鼓蓋骨の位置からみて頭が向けられている北東寄りは，小口石をあてる隙間がないことから，地山を整形して，小口石を代用したものと考えられる。石棺は，主軸をN53°Ｅと北東－南西に近い向きを指し，規模は内法で長さ162㎝，幅39㎝，高さ20㎝を測る。側壁の棺材は，横長に立てられ，南西寄りの小口石と，北西に４枚，南東に３枚の板石が残存しているが，南東側にはもう１枚あったと思われる。蓋石は南西寄りに３枚だけ残っている。蓋石の間には，小ぶりな割石や緑灰色の粘土を詰め，土砂が流れ込むのを防いでいる。棺内からの遺物は，赤色顔料の付着した頭蓋骨の他何ら検出されなかった。

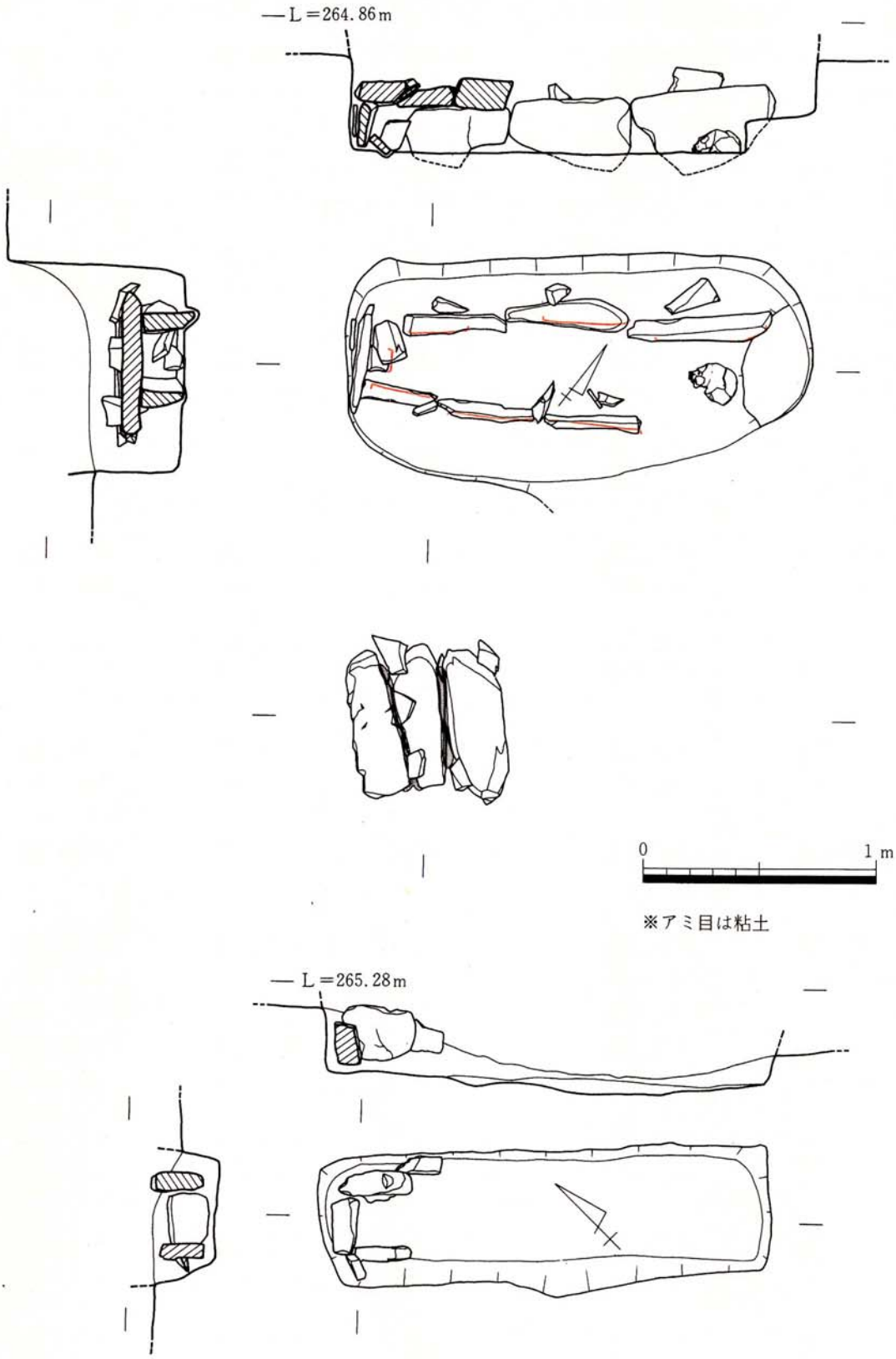
第10号石棺（第９図）

本石棺は，発掘区域の中央部を横切っている溝状遺構の北側に位置しており，他の埋葬遺構とはその立地を異にしている。墓壙の上部をかなり削り取られ，棺材も北西寄りの側壁の一部がわずかに３枚残っているだけであり，後世に何らかの撹乱を受けたものと推測される。石棺の主軸はN44°Ｗとほぼ北西－南東の向きを指し，内法は現存の幅22㎝，高さ28㎝を測る。この石棺を埋置している墓壙は，現状では長さ195㎝，幅55㎝，深さ27㎝を測り，被葬者は，棺の規模，形状からみて頭位を南東寄りにもつ成人と考えられ，出土遺物は皆無であった。

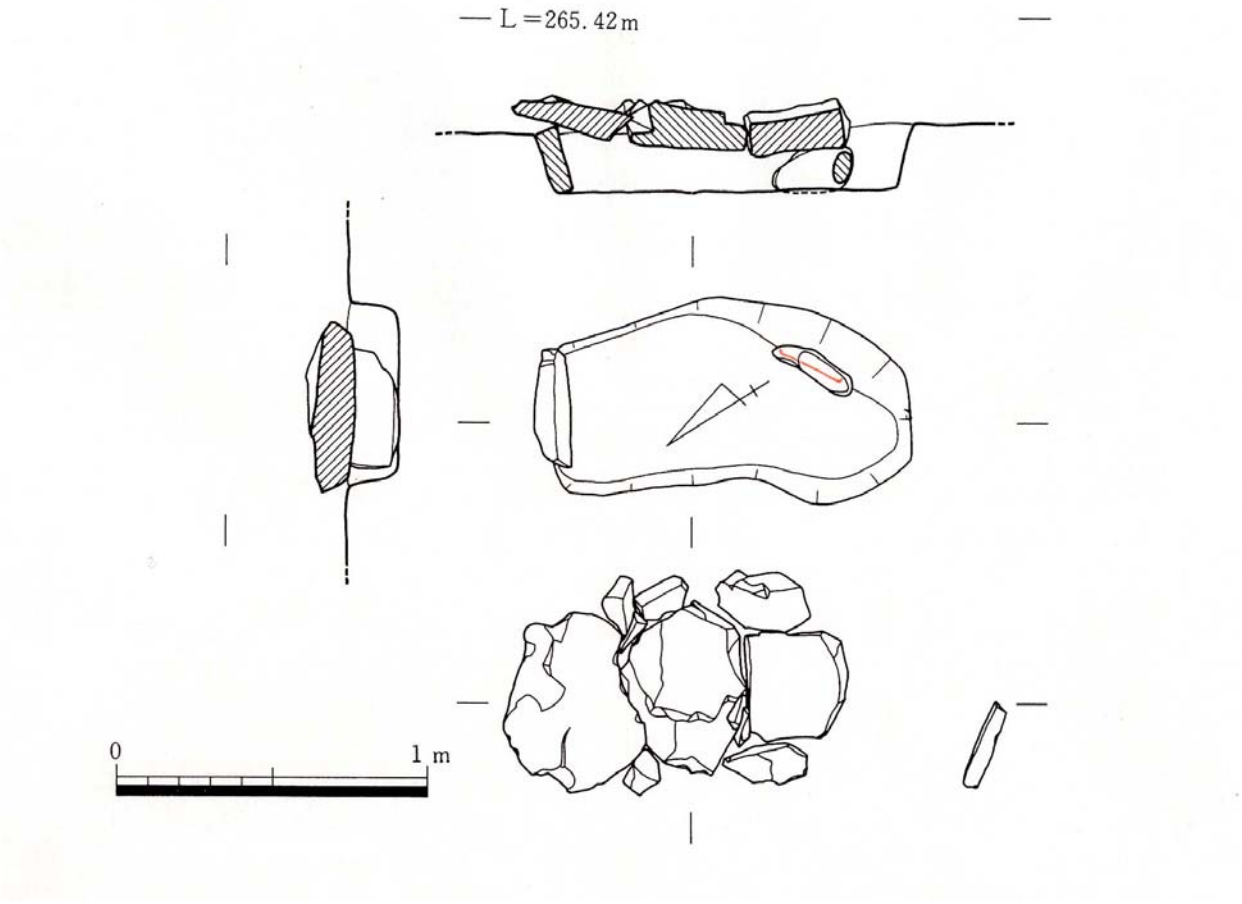
石蓋土壙（第10図）

この石蓋土壙は，第８号石棺の南に直交する形で隣接しており，主軸はN32°Ｅと北東－南西に近い向きを指す。土壙の平面は，いびつな形状を呈し，その規模は長さ122㎝，幅58㎝，深さ19㎝を測る。蓋石は３枚の板石から構成され，北東側に比較的大ぶりな石をあて補強している。土壙内の東寄りには板石を横長に立て，反対側にもずれ動いたとみられる板石がある。これらは，共に蓋の支えとして用いられたものと推定される。土壙内には土砂が充満しており，戸物は全く検出されなかった。頭位は，蓋石の大きさからみて東寄りと考えられ，土壙の規模から小児を埋葬したものと思われる。

なお，この石蓋土壙の南西に近接して板石が立てられた状態で見つかっているが，その性格は不明である。



第９図　第９号石棺（上），第10号石棺（下）実測図



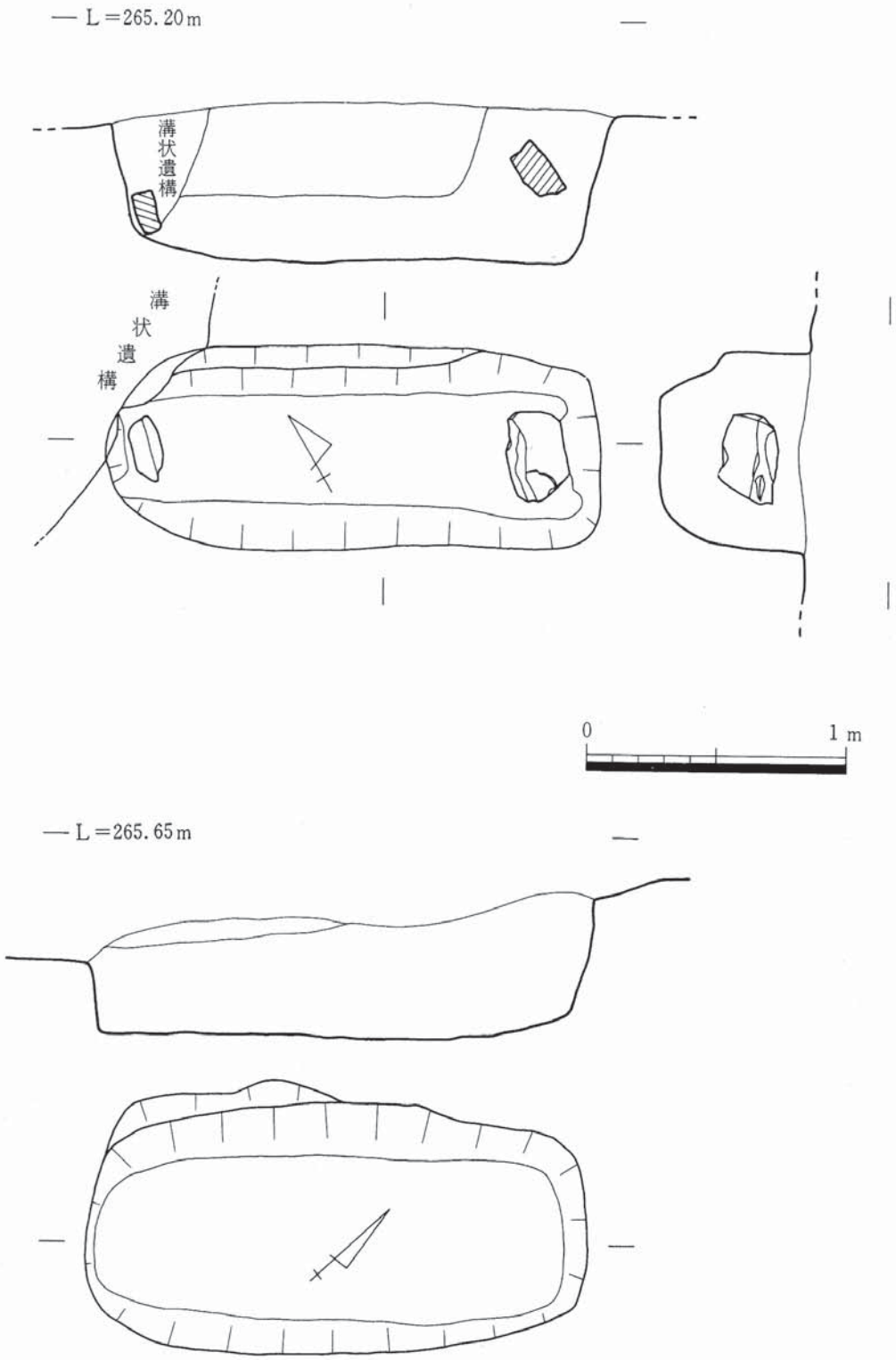
第10図　石蓋土壙実測図

第１号土壙（第11図）

本土壙は，第９号石棺の北に隣接しており，その大きさは長さ190㎝，幅74㎝，深さ53㎝を測る。主軸はS59°Eを指向し，北東側の一部が２段に掘り込まれている。底部の形状からみて，小口板を側板ではさんだ木棺を納めていたと想定される。小口部分には，共に板石が立てられた状態で検出され，南東寄りの石は底からかなり浮いた状態である。このことから，これらの石材は両方とも小口板を支えたものと推定される。被葬者は，その大きさからみで成人と考えられ，頭位は不明であるが，土壙の形状から南東寄りの可能性が高い。土壙内からは，遺物は一切検出されていないが，その一部が溝状遺構と重複しており，切り合い関係からみると，溝状遺構の埋没後に築かれたものであることを示している。

第２号土壙（第11図）

本土壙は，第７号石棺の南へ約６m離れたところから検出された。軟弱な岩盤を長さ194㎝，幅82㎝，深さ42㎝の規模に掘り下げてつくられたもので，その主軸はS42°Wと北東一南西に近い向きを示す。土壙内からの出土遺物はないが，北西側の地山面からは須恵器片が検出されており，埋葬施設として利用されたものと思われる。土壙の規模，形状からみて，成人を直接埋葬したものと考えられるが，頭位は不明である。



第11図　第1号土壙（上），第2号土壙（下）実測図

溝状遺構

発掘区域の中央部を，尾根と直交するように北西－南東にのびる溝状遺構が検出され，この西端部は北東－南西に走るもう一つの溝状遺構と接している。北西－南東にのびる溝状遺構は，全長約９m，上部幅50～60㎝，底部幅20～40㎝，深さ25～35㎝を測り，その断面は箱薬研の形を呈している。北東－南西に走る溝状遺構は，北東側が西にわずかに曲がって終息し，南西側は，現状では崖面となって途絶えている。この溝状遺構の長さは６m以上，上部幅100～120㎝，底部幅70～100㎝，深さ25㎝を測る。さらに，本遺跡の東寄りには，工事による撹乱を受けているものの，尾根と並行する向きに沿うて地山を削って形成した傾斜面の痕跡が認められた。この溝状遺構と地山整形面は，共に墓域を区画する性格をもつものと考えられる。

なお，溝状遺構の埋土中や地山整形面からは，弥生土器がわずかに出土しているが，小片であるため器形は判断し得なかった。

また，溝状遺構の北側から南寄りにかけては，その大部分が工事のため掘削されているものの，ほぼ平坦な地山面が広がっており，後世にその上部が削平されたものと推測され，溝状遺構の深さは本来，もっと深かったものと考えられる。

Ⅳ　遺　　物

弥生土器（第12図）

本遺跡から出土した弥生土器のうち，器形全体を推定しうるものは壺形土器のみである。墓域の上部が削平されていたものと考えられ，さらに工事によりその中心部がかなり掘削されていたことから，弥生土器のほとんどは，墓域の外側より，流れ込みの状態で検出されたものに限られた。

o壺形土器（１）

この壺形土器は，工事中に発見されたもので，工事関係者の話によると，発掘区域の北西寄りをややはずれた付近から出土したらしい。ロ縁部と体部下半の一部を欠失しているが，ほぼ完形に近い状態である。器高24㎝，口径11.7㎝，体部最大径16.7㎝を測るこの土器は，頸部から口縁部に向かって外上方に大きく拡がり，口縁端部は下方へわずかに拡張しており，３条の凹線が施されている。頸部は上方に向かってゆるやかに狭っており，凹線が11条めぐらされている。体部中央のやや上位に最大径を有し，その張りは著しい。肩部には４本を単位とする櫛歯状工具を用いた刺突文が回り，体部上半には同じく４本単位の櫛描波状文が３段にわたってめぐらされている。外面は，体部中央から上部にかけては横ナデ，体部下半には横方向の丹念なヘラ磨き，底部にもヘラ磨きを施している。内面は，体部下半に原体幅約1.5㎝のハケ目調整を横又は斜め方向に施したあと，体部最大径を有する付近に，さらに原体幅約2.0㎝の横方向のハケ目調整を行っている。底部には指の圧痕，体部上半の頸部寄りに顕著なしぼり目，その下には粘土帯の接合痕跡が認められる。また，土器の表面には，きめ細かい素地を泥状にして覆っている。胎土は３㎜以内の砂粒を比較的多く含み，焼成は良好で，色調は全体的には淡黄褐色を呈しているが，体部の内面全域及び外面の一部は黒色に転じている。

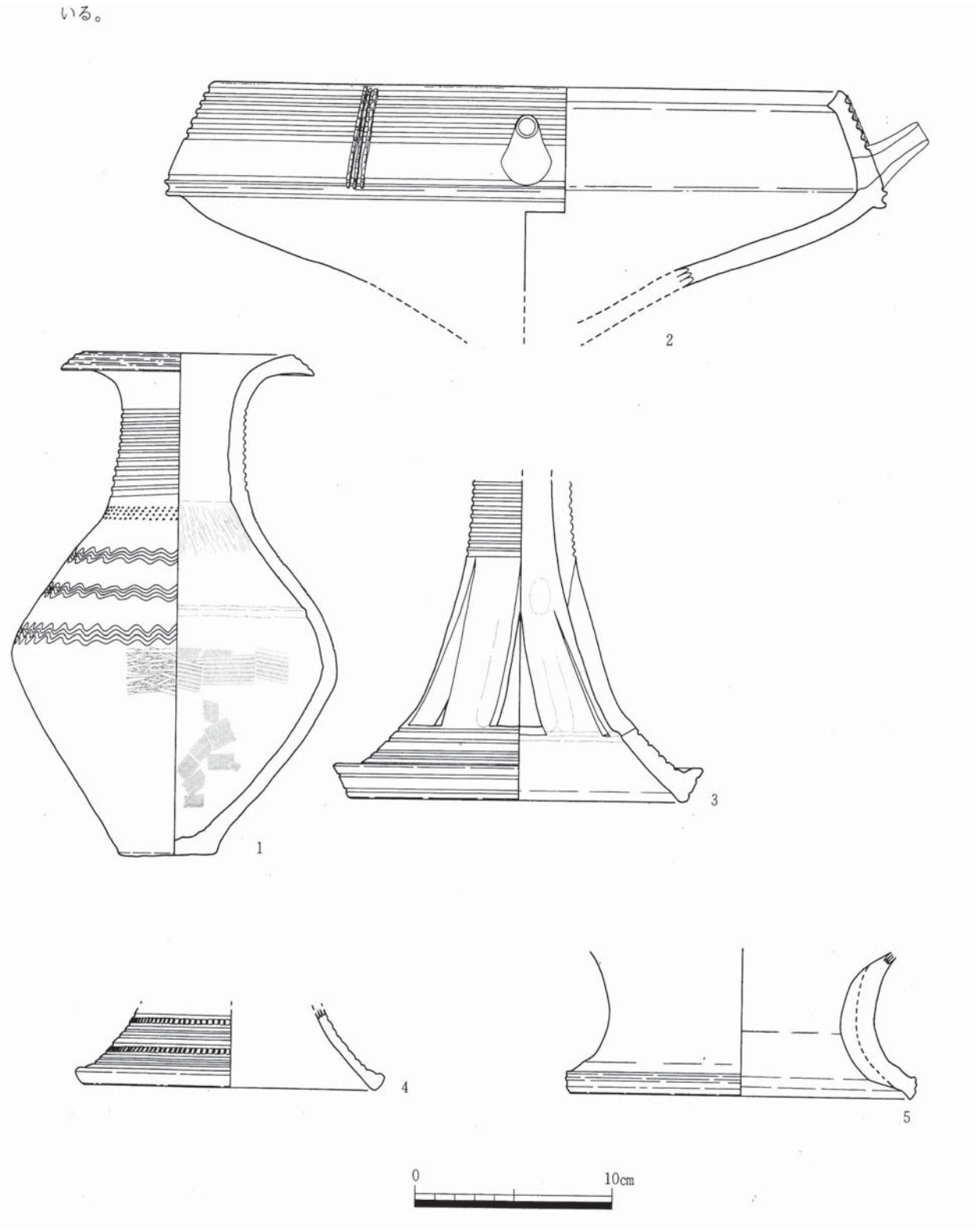
o高杯形土器（２）

この高杯形土器は，発掘区域の北側斜面より検出されたもので，流れ込みの出土状況を示していた。身部からほぼ直角に折れてやや内傾ぎみに立ち上がり，その端部はわずかに肥厚し，口唇部は少し内湾している。復元口径は31.8㎝を測る。立ち上がり部の外面上半には５条の凹線をめぐらし，その下端には２本の突帯が周回している。この上面に３本１組の紐状突帯を３ヶ所ないしそれ以上押し付けており，立ち上がり部の下側には長さ2.9㎝を測る先細りの短い注口を一ヶ所貼り付けている。内外面とも横ナデ調整を施し，器表には素地を泥状にして覆っている。胎土は４㎜以内の砂粒を比較的多く含み，焼成は良好で，色調は全体的に黄褐色を呈している。

o脚部（３～５）

３は，脚柱部以下が外反ぎみにゆるやかに拡がり，端部は上方に大きく拡張している。復元底径は17.2㎝を測る。三角形の透しを６ヶ所に施し，脚柱部に９条以上，脚裾部に５条，端部に２条の凹線をめぐらしている。透し部分の内外に縦方向のナデを施すほかは，横ナデ調整を行っている。胎土は３㎜以内の砂粒を比較印多く含み，焼成は良好で，色調は黄褐色を呈している。この脚部は，その出土状況及びその胎土，焼成，色調，大きさから２と同一個体となる可能性が強い。４は，復元底径14.8㎝を測る。ゆるやかに拡がり，端部は上方に少し拡張する。下から４条の凹線を施したあと，その上部にヘラ状工具による刻目をめぐらしている。内外面とも横ナデ調整を行っている。胎土は，砂粒をわずかに含み，焼成は軟調で，色調は淡黄褐色を呈している。５は，内側へ湾曲した形態を呈し，端部に２条の凹線をめぐらしている。復

元底径は17.3㎝を測る。内面には，さらに粘土を張り付けて厚く仕上げているのがわかる。内外面とも横ナデによる調整を施している。胎土は４㎜以内の砂粒を多く含み，焼成は良好で，色調は黄褐色を呈している。



第12図　弥生土器実測図

須恵器（第13図）

ここで述べる須恵器は，第２号土壙に伴うものと，遺跡西方の法面から発見された坩蓋である。

o坏（１，４）

１は復元口径16.7㎝を測り，外上方にまっすぐのびる体部をもち，口縁端部は丸く仕上げている。底部は底とんど欠失しているが，現存形態からみて平底と考えられる。調整は，ヘラ削りのあと横ナデを施している。胎土は砂粒を比較的多く含み，焼成はややあまく，色調は白灰色を呈する。

４は復元口径12㎝，器高3.7㎝を測る。底部はほぼ平坦で，下方にまっすぐ張り出す高さ0.5㎝，径8.4㎝の高台を貼り付け，その端部には浅い凹みを有している。体部は，まっすぐに外上方にのびて口縁端部は丸く仕上げており，底部との境は肥厚し明瞭な稜線が認められる。体部の調整はヘラ削りのあと横ナデ，底部内面には回転ナデのあと乱ナデが施されている。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は堅緻，色調は外面が暗灰色，内面が灰色を呈している。

o長頸壺（２）

ゆるやかに拡がる様相を有する頸部から，小さく鋭角な段をもって肩部に移る。内側は，頸部と肩部の境が大きく肥厚し，明瞭な稜線を有している。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は堅緻，色調は灰色を呈するが，頸部外面は黒色に転じている。現存形態からみて，長頸壺のものと考えられる。

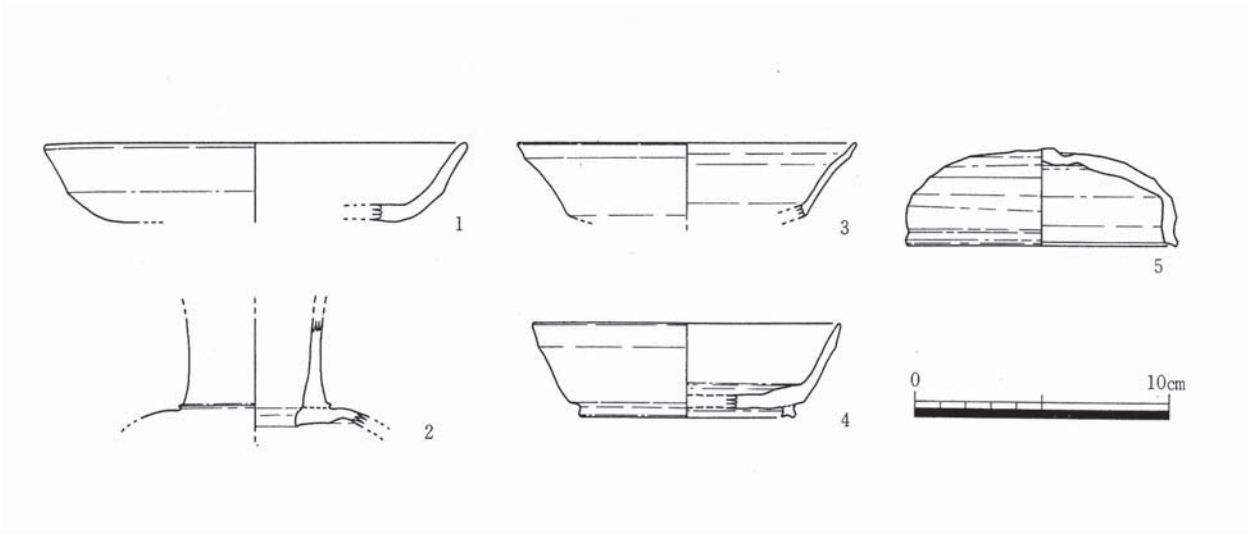
o （３）

口縁部は，外上方にほぼまっすぐにのびて，上位で外へわずかに屈曲したあと，再びまっすぐのびて口縁端部は薄く仕上げている。復元口径は13.4㎝を測り，調整は内外面ともヘラ削りのあと横ナデを施している。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は堅緻，色調は灰色を呈する。現存形態からみると，その下部が内傾しており， のものと考えられる。

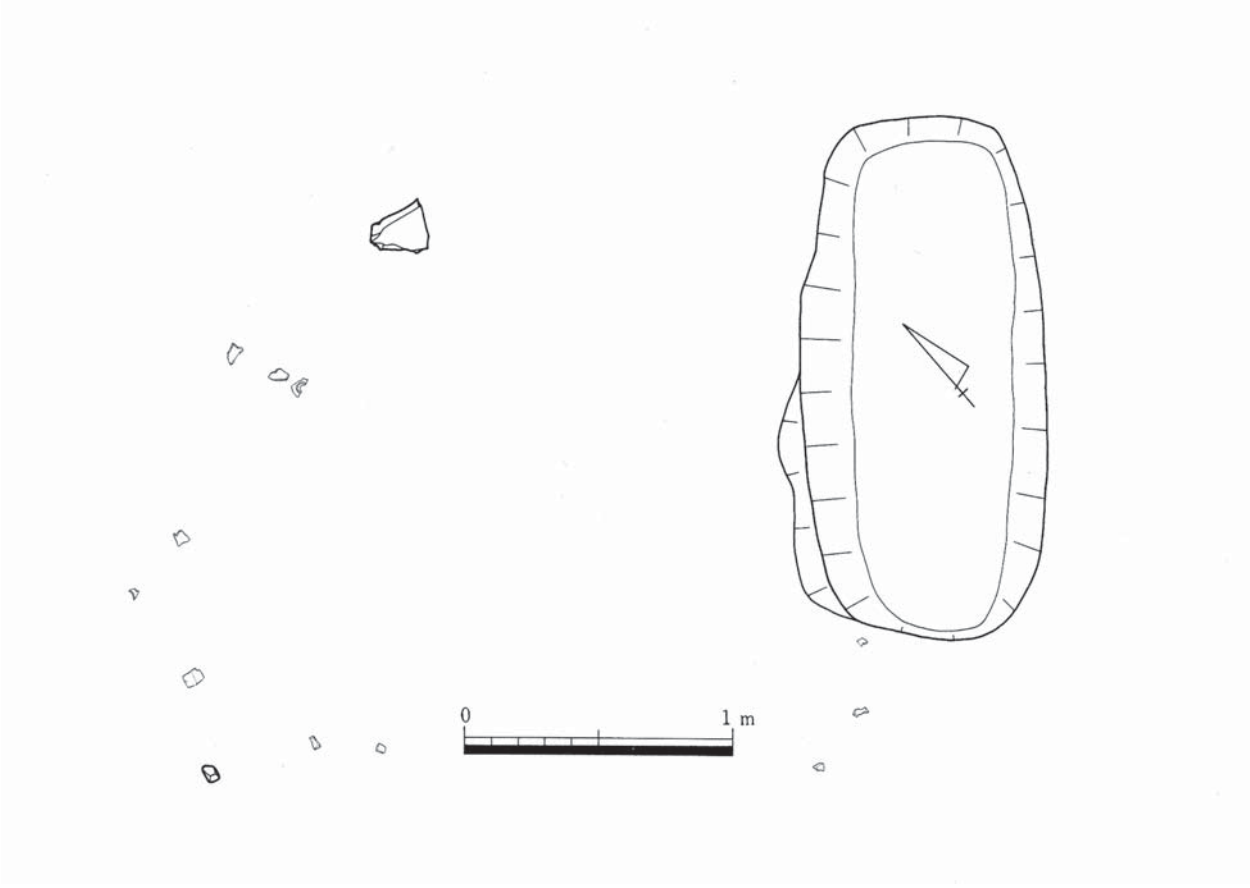
o坩蓋（５）

口径10.6㎝，器高3.8㎝を測るこの坩蓋は，天井部が平坦に近く，口縁部は外面がわずかに内湾するが，全体的にはほぼ直立する形態を呈している。口唇部は内傾し，平らに仕上げている。天井部には，外面に幅８㎜前後のヘラ削りを左回りに施し，内面は回転ナデのあと乱ナデ調整を行っている。口縁部は，内外面とも左回りのヘラ削りのあと横ナデ調整を施している。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は堅緻，色調は白灰色を呈する。

なお，この坩蓋が出土した法面の上には，ボーリングステッキによる探査の結果，上下に重複しているものを含めて，３～４基の石棺の存在が予想される。



第13図　須恵器実測図



第14図　須恵器出土状態実測図

遺跡周辺出土土器

土師器（第15図）

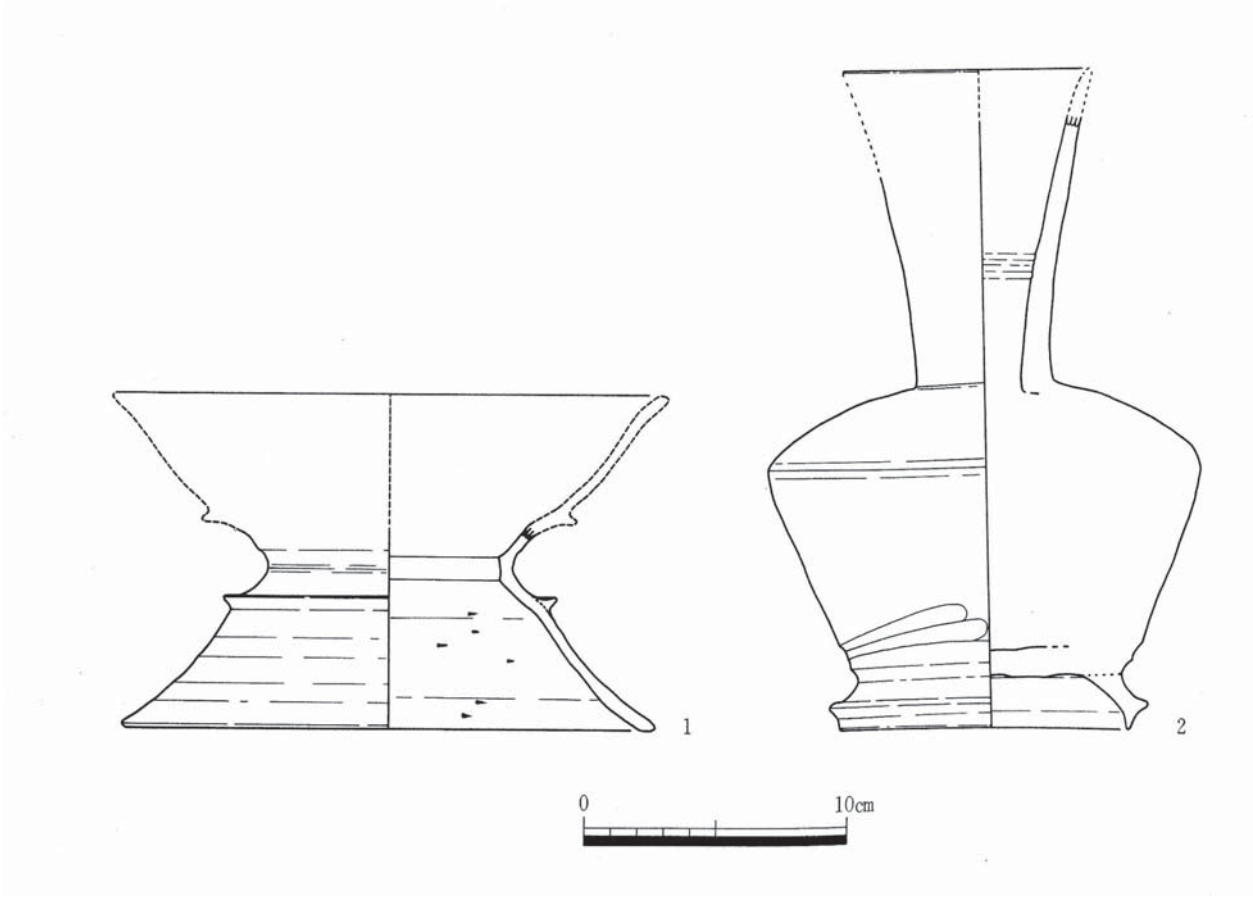
o鼓形器台（1）

この器台は，本遺跡の北側にある土取り現場から採集されたものである。比較的狭いくびれ部の下に突帯を貼り付け，ゆるく外反しながらやや肥厚ぎみの端部へのびる。復元底径は20.3㎝を測る。内面は，右回りのヘラ削りのあと横ナデを施し，くびれ部に2本の明瞭な稜線を有し，外面は，全面に横ナデによる調整をしており，きわめてていねいなつくりである。胎土は砂粒を比較的多く含み，焼成は良好で，色調は暗黄褐色を呈している。

須恵器（第15図）

o長頸壺（2）

この壺も，本遺跡の北側にある土取り現場から採集されたものである。ロ縁端部を欠失するもののほぼ完形に近い状態である。ゆるやかに外反しながらのびる頸部をもち，肩部と体部の境に16.5㎝を測る体部最大径を有し，明瞭な稜が認められる。底部はほぼ平坦に近く，外に張り出す高さ1.9㎝，径U.l㎝の高台を貼り付けている。推定器高は23.3㎝，'推定口径は9.3㎝ぐらいと思われる。外面は，左回りのヘラ削りのあと横ナデ，高台には横ナデによる調整を施している。脚部は，焼成時の歪みが顕著で，底部中央にわずかながら布目痕が認められる。全体にわたり，緑色の自然紬がかかっている。胎土は3㎜以内の砂粒を比較的多く含み，焼成は堅緻，色調は灰色を呈し，ほぼ全体に黒斑が認められる。



第15図　鼓形器台，長頸壺実測図

Ⅴ　ま　と　め

佐久良遺跡は，工事中に発見されたため，遺跡の大半がすでに破壊されており，その遺存状態はあまり良くない。しかし，今回の調査では，箱式石棺を中心とする埋葬遺構が検出され，当地域の原始・古代の様相を知る上で良好な資料の７端を提供しえたのでＬここに記してまとめにかえたい。

調査によって検出された埋葬遺構は，比較的狭い範囲に集中しているが，お互いに切り合っている状聾のものはほとんどなく，このため，これらの壙墓が築造された時期の前後関係を明らかにすることはできなかった。しかし，これらの中には，第５号石棺と第６号石棺のように墓壙同士が切り合い関係をもち，明らかに時期差が認められるものがある。このことから，本遺赫では，前の石棺の存在を知りながら一定期間に連続して埋葬が営まれていたと推測される。

さらに，これらの埋葬遺構は，全体的に発掘区域の南西寄り，農道建設工事の結果生じた崖面付近に片寄っており，その周辺には，工事によって壊されたとみられる石棺の棺材多数が散乱していた。このことから，調査時ではすでに消滅していたが，本来西方にも広がっていたものと想定され，散乱していた棺材の数量から，おそらく箱式石棺だけでも20基程度の数にのぼるものと思われる。

今回の調査の結果，本遺跡は，溝状遺構及び地山整形面によって区画設定された集団墓地と考えることができよう。尾根筋と直交するように横切る溝状遺構と，発掘区域の東寄りから検出された地山整形面は，その位置及び範囲からみて，現存する墓域を区画したものと考えられる。しかし，崖面近くを北東一南西に延びている溝状遺構は，尾根筋を横切る溝状遺構と接する地点からさらに北側へ３m余り莚びており，その西方には比較的なだらかな小尾根が派生している。このことからみて，東側に現存している墓域と同時に西方にも存在していたと想定される埋葬遺構をも区画していた可能性が考えられるが，調査時では，このことは確認できず，断定するには至らなかった。ま仁，墓域の南辺を区画する遺構は検出されなかったが，これは工事又は後世の撹乱によって削平された可能性が強い。このように，本遺跡からは南辺を除く３辺から墓域を区画する遺構が検出されており，本遺跡は周溝墓的な色あいを濃くもつものと推定されよう。

溝状遺構等で区画する墓制が，この遺跡全般に用いられたものか，あるいは発掘調査で検出された範囲のみにみられるものかは不明である。しかし，検出された壙墓の中には，出土人骨からみて，一つの石棺に複数体を埋葬する特徴的な葬制をもつものがみられ（第２号石棺に３体分，第３号石棺に２体分），さらに，赤色顔料の付着したものとしないものがある。

次に築造時期についてみると，本遺跡から見つかった箱式石棺，石蓋土壙に伴う遺物が人骨（すべて箱式石棺から検出）を除いて皆無であるため明らかにしがたい。一般的に，弥生時代の埋葬の特色には，①埋葬施設の規模に身分や階級による大きな格差を示すような状態はほとんどみられないこと，②埋葬地は，住居跡から多少離れた高燥な場所が選ばれて集団墓地を形成している，という点が上げられる。(注1) 本遺跡においても，個々の埋葬施設のほとんどが箱式石棺であること，副葬品を全く持たないこと，これらの壙墓と関連を持つと考えられる住居跡は確認されていないが，その立地場所からみて，生活面を望む丘稜上に形成されていると考えられることなどから，弥生時代の埋葬の特色を具備しているものと思われる。あわせて，遺跡の北側斜面からは，流れ込みの出土状況を呈している弥生土器が検出されている。これらの土器のうち，壺形土器や高杯形土器は，全体的につくりが精良で，とくに後者は注口をもつ特異な形態を

呈しており，この壙墓に供献された可能性が強いものと思われる。これらは，その形態からみて，塩町式並行期のものと考えられることから，弥生時代中期後半頃を中心にこの壙墓群が形成されたものと位置づけたい。ただし，第２号土壙は，須恵器を伴っており，高台を付した坏などから奈良時代頃と推定され，第１号土壙からは遺物が全く検出されていないためその築造時期は明らかにし得ないが，溝状遺構と重複しており，その埋没後につくられたと考えられることから，本壙墓群が営まれた時期よりもある程度の年代幅をもって後出するものと思われる。（注2）

石棺の築造にあたっては，側壁の棺材を横長に用いて，その大きさを左右対称にそろえる傾向がみられ，その配置にあたって一定の規格性が認められる。また，それぞれの主体部は，主軸方向にまとまりがみられないものの，そのほとんどが頭部を東側に向けるという点で共通しており，埋葬にあたっては何らかの規制が働いたことが示唆される。

発掘区域の西方にある法面からは６世紀後半頃のものと考えられる須恵器の増蓋が出土しており，その付近には石棺３～４基の存在が確認され，中には上下に重複しているものがある。本来の遺跡の鞄囲は，このあたりまで広がっていたとも考えられ，箱式石棺の中には，古墳時代に属するものも存在していた可能性がある。

白木町においては，現在のところ住居跡などの生活関連遺跡は全く確認されておらず，本遺跡に埋葬された人々がどのような場所に住んでいたかということが一つの課題として残されている。検出された壙墓群は，北へ派生する尾根の中心線より西側に立地しており，このことは，その眼下にある平地周辺に，生活遺跡があったことを想起させる。具体的には，今後の調査によってしだいに明らかにされていくものと思われる。

さて，本遺跳の所在する白木町の北側は，中国山地の南部でありながら，江川水系の水源地帯が広がり，隣接する高田郡八千代町上根や同郡向原町戸島は，瀬戸内海へ注ぐ太田川水系と，三次を経由して日本海へ流れる江川水系との分水嶺に位置する地理的環境にある。今回の調査では，発掘区域の北側斜面から出土した塩町式並行とみられる壺形土器や高杯形土器，さらに本遺跡の北側からは鍵尾Ⅱ式並行とみられる鼓形器台が発見されている。（注3）農耕が普遍的に営まれるようになる弥生時代以降は，その生活基盤は，水系とより密接な関係をもつものと考えられ，遺跡の分布もこの傾向がみられるようである。（注4）佐久良遺跡が所在する白木町志路は，今回の調査による出土遺物や当地域の地理的環境をみるかぎりでは，弥生－古墳時代において備北系あるいは山陰系の文化がこの地域まで波及していたことをうかがわせるものであり，今後の資料の蓄積を待ちたい。

なお，詳細は人骨の考察に詳しいが，第２号石棺，第３号石棺からは，それぞれ３体，２体分の人骨が出土しており，箱式石棺としては複葬という特異な埋葬方法を示している。しかし，両者とも工事による撹乱が著しいため詳細については不明な点が多い。ただし，墓壙や残存している石棺の規模から，旧態の石棺の規模が他のものと差がないと考えられることから，速断は慎しまねばならないが，同時的合葬よりも追葬の可能性が強いことをあげておきたい。

（注1）森貞次郎「埋葬」『新版考古学講座』4　原史文化（上）1969

（注2）潮見浩「山陽地方Ⅰ」『弥生式土器集成－本編－』1964

（注3）杉原荘介・大塚初重「島根県鍵尾遺跡出土の土器」『土師式土器集成－本編－」1971

（注4）前島己基「島根県下の弥生遺跡」『八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅰ』1977

付　　編

広鼻市佐久良遺跡出土の弥生時代人骨

松　下　孝　幸

広島市佐久良遺跡出土の幼小児骨

分　部　哲　秋

広島市佐久良遺跡出土の弥生時代人骨

松　下　孝　幸*

は　じ　め　に

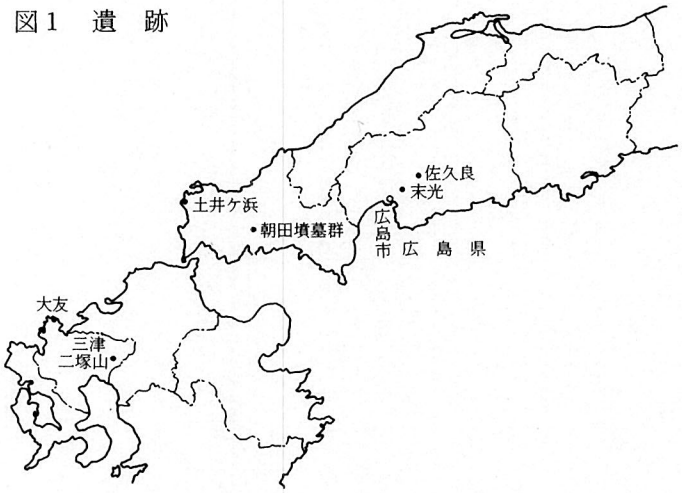
佐久良遺跡は広島市安佐北区白木町大字志路字佐久良・橋谷に所在する埋葬遺跡で，1982年（昭和57年）に工事中に石棺が発見され，人骨が出土した。発掘調査は1982年と翌1983年とに行なわれ，合計９体の人骨が発掘された。

弥生時代人骨の出土例は西日本に多く，特に九州と山口県の西部に集中しており，しかもその保存状態も良好なものである。従って，この地域での研究は他地域に比べて，比較的進展している。資料は必ずしも十分なものではないが，現在のところ，北部九州と山口県の西海岸には，高顔，高身長を特徴とする弥生人が，西北九州には低・広顔で，低身長の弥生人が認められ，しかも後者の鼻根部には縄文人的な特徴が認められる。また南九州の離島の弥生人は短頭型で身長も低いようである。この高顔，高身長の弥生人については，金関（1959，1960，1966）は土井ケ浜，三津弥生人と縄文人とを比較することによって，大陸からの渡来民との混血の可能性を指摘している。

筆者はこの高顔，高身長の弥生人の由来を明らかにするため，各地での古人骨の収集とその形質の特徴の解明を急いでいる。とりわけ高顔，高身長タイプの弥生人の東部への拡がりを明らかにするため，山口県中，東部および中国地方中部地域での人骨出土に期待していたところ，広島市での弥生時代人骨の出土を伝え聞き，幸い広島市教育委員会よりこの人骨について研究する機会を与えていただいた。本人骨の保存状態は良好なものであり，人類学的観察および計測を行ない，本県の弥生時代人の形質の特徴の一部を明らかにすることができたので，その結果を報告したい。

なお，幼小児骨については，分部が別稿で詳細に報告しているので，本稿では成人骨についてのみ報告する。

図１　遺　跡



＊　Takayuki Matsushita　（長崎大学医学部解剖学第二教室）
（Deparment of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University）

資　　料

調査された石棺のうち，6基の石棺に人骨が残存していた。第1号石棺，第4号石棺，第5号石棺および第9号石棺からは1体分の人骨が，第2号石棺からは3体分が，第3号石棺からは2体分の人骨が検出されたので，合計9体分の人骨が出土したことになる。表1に示すとおり，9体のうち7体が成人骨で，残りの2体は小児骨である。7体の成人骨のうち男性骨は3体，女性骨は3体で，性別を明らかにできなかったものが1体ある。また各人骨の性別，年令は表2に示すとおりである。

表1　資料数

成人			幼小児	合計
男性	女性	不明		
3	3	1	2	9

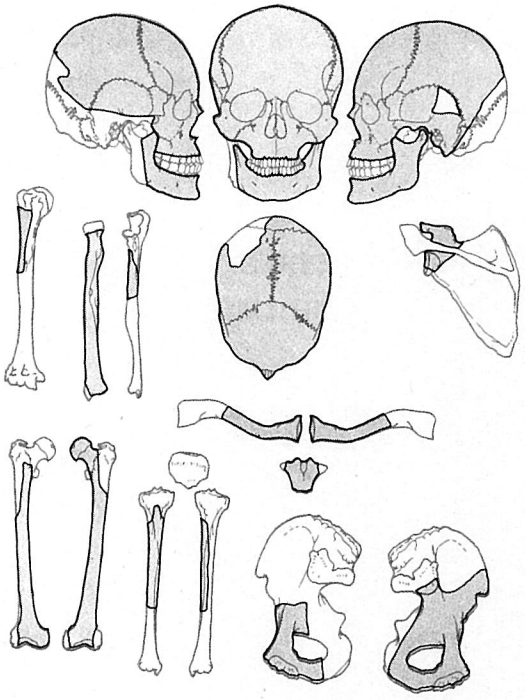
表2　資　料

人骨番号	性別	年令	備考
第1号石棺人骨	男性	熟年	頭蓋朱
第2号石棺1号人骨	男性	熟年	顔面朱
第2号石棺2号人骨	女性	熟年	顔面朱（少）
第2号石棺3号人骨	―	小児	
第3号石棺1号人骨	男性	熟年	顔面朱
第3号石棺2号人骨	女性	熟年	
第4号石棺人骨	―	小児	頭蓋朱
第5号石棺人骨	不明	壮年	
第9号石棺人骨	女性	熟年	顔面朱（少）

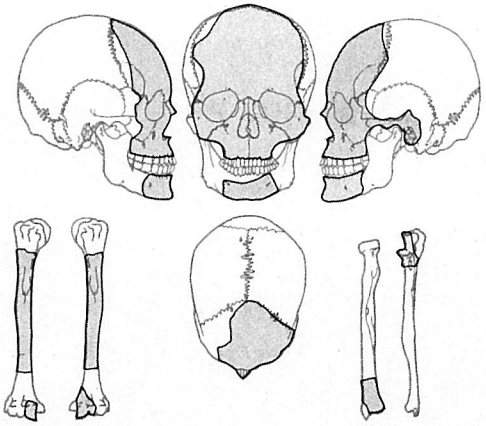
なお，この人骨の所属時代は，別稿で述べられているとおり，考古学的所見より弥生時代中期である。

計測方法は，Martin-Saller（1957）によったが，一部はHowells（1973）の方法で計測した。また鼻根部については鈴木（1963）の方法と松下（1983）の方法で計測を行なった。

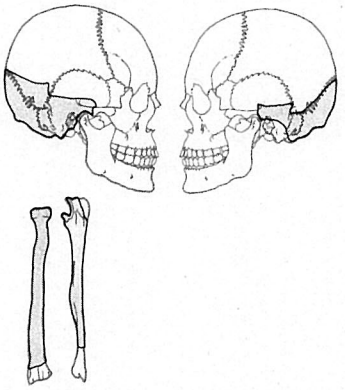
比較資料としては，広島県の弥生時代人骨の例として，末光遺跡群B地点出土の弥生時代人骨（以下「末光弥生人」，松下，1984），その他に土井ケ浜（金関，他，1960，松下，他，1983），西北九州（内藤，1971），三津（牛島，1954），二塚山（松下，1979），および大友（松下，1981）の各弥生人を，縄文人の例としては，太田（今道，1934），津雲（清野，他，1926，1928），帝釈寄倉（鈴木，1976），帝釈猿神（永井，他，1979）の各縄文人を用いた。



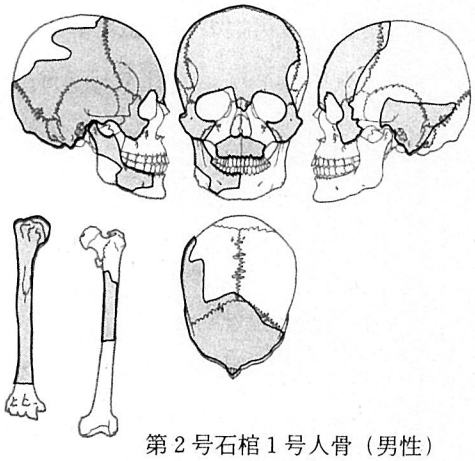
第１号石棺人骨（男性）



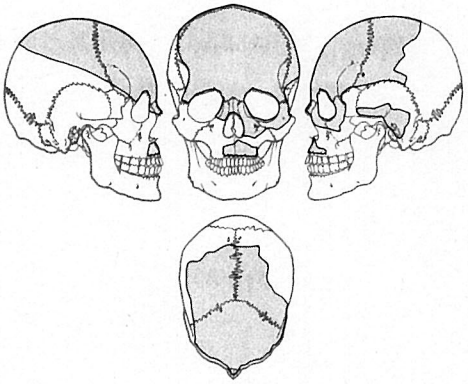
第３号石棺１号人骨（男性）



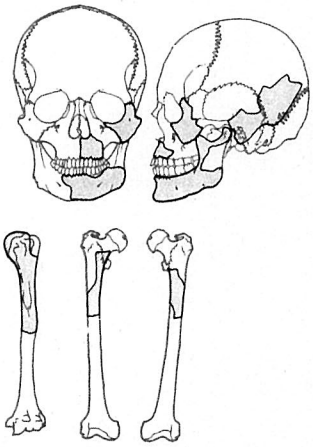
第３号石棺２号人骨（女性）



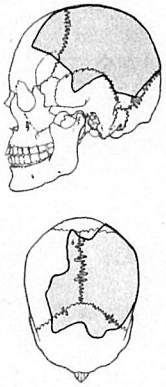
第２号石棺１号人骨（男性）



第10号石棺人骨（女性）



第２号石棺２号人骨（女性）



第５号石棺人骨
（性別不明）

※アミ目は残存部

所　　見

第１号石棺人骨（男性，熟年）

(1)　頭蓋

１．脳頭蓋

後頭骨の大部分と右側頭頂骨の一部および乳様突起を欠損している。三主縫合のうち矢状縫合は内外両板とも癒合閉鎖している。冠状縫合も内板は癒合しているが，外板の大部分は開離している。外耳道は左側のみが観察可能であるが，外耳道骨腫は認められない。

頭蓋最大長は計測できないが，頭蓋最大幅は147mm，バジオン・ブレグマ高は138mmで，頭蓋の幅は広く，頭高もやや高い。頭蓋長幅示数は算出できないが，復元して頭蓋最大長を求めてみると（179mm）となり，この値を用いて頭蓋長幅示数を算出してみると，（82.12）となり，頭型としては短頭型に属しているが，これは観察所見と一致する。また頭蓋水平周は（520mm）である。

２．顔面頭蓋

顔面頭蓋は右側の頬骨弓を欠く以外は完全である。眉上弓の隆起は著しく強く，前頭鱗も後方へ傾斜している。鼻根部はやや狭いが，鼻骨の隆起はあまり強くないので，鼻根部は比較的扁平である。また頬骨は強く外側へ張り出している。

顔長は94mm，中顔幅は107mm，顔高は122mm，上顔高は70mmである。頬骨弓幅は計測できないが，左側半分が完全なので，正中矢状面までの距離を２倍することによって，頬骨弓幅の推定値を算出してみると（143mm）となり，顔面の幅径は広い。顔示数は（85.31）（Ｋ），114.02（Ｖ），上顔示数は（48.95）（Ｋ），65.42（Ｖ）となり，顔面の高径のわりに幅径が広い。

眼窩幅は46mm（右），45mm（左），眼窩高は35mm（右），35mm（左）で，眼窩示数は76.09（右），77.78（左）となり，両側とも Mesokonch（中眼窩）に属している。

鼻幅は27mm，鼻高は53mmで，鼻示数は50.94となり，mesorrhin（中鼻）に属している。

鼻根部の計測値は，前眼窩幅が18mm，鼻根横孤長は20mm，鼻根彎曲示数は90.91となり，鼻骨の鼻骨間縫合へ向かう隆起は弱い。鼻骨最小幅は７mm，前頭突起上幅は９mm（右），９mm（左）である。前頭突起水平傾斜角111度でやや大きく，前頭突起は水平方向を向いており，鼻根角は145度で，大きく，鼻根陥凹示数は16.67で小さく，鼻骨の隆起が弱いことがうかがえる。

側面角は，全側面角が89度，鼻側面角が92度，歯槽側面角は83度で，歯槽性の突顎の傾向は認められない。

３．下顎骨

右側の下顎枝の後部を欠いている以外はほぼ完全である。顔面の径に比較すれば，下顎骨の径は小さい。筋突起は外反しており，下顎枝および下顎体の高径はともに低く，下顎切痕は著しく浅い。また両側とも第二小臼歯の後面下位に弱い下顎隆起が認められる。

４．歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

○	●	●	P_2	○	○	○	○	I_1	I_2	○	P_1	○	M_1	M_2	●
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	●	●	

／：不明（破損）
○：歯槽開存
●：歯槽閉鎖　以下同じ

咬耗度はBrocaの2度である。下顎左第三大臼歯は未萌出である。

(2) **四肢骨**

1）上肢骨

肩甲骨の一部，鎖骨，上腕骨，撓骨，手根骨，中手骨および指骨が残存していた。

1．鎖骨

両側とも肩峰端を欠損していた。中部の径はやや細く，助鎖靭帯圧痕は著明である。

2．上腕骨

右側骨体の近位半の外側部が残存していたにすぎない。大結節稜の発達はきわめて良好である。

3．撓骨

右側のみが残存していた。撓骨頭を欠損していたが，それ以外は完全である。径はあまり大きいものではない。骨間縁は鋭いが，内側へ突出することはなく，また，前縁が近位部で著しく発達して，稜を形成している。長さはあまり長くはないようである。

2）下肢骨

寛骨，大腿骨，脛骨が残存していた。

1．寛骨

左側は恥骨と腸骨体が，右側は恥骨が残存していた。寛骨臼は中程度で，男性としてはあまり大きいものではない。また恥骨下角は小さい。

2．大腿骨

右側は内外両顆の一部と近位部を欠いている。左側は大転子と内外両顆の一部を欠損している以外は良く残っている。長さはあまり長くはなく，骨体の径はやや小さく，粗線や骨体の後方への発達も悪い。

計測は左側のみが可能で，骨体中央矢状径は25mm（左），骨体中央横径は26mm（左）で，骨体断面示数は96.15（左）となり，骨体は矢状径よりも横径の方がわずかに大きいが，骨体の断面形は横広の楕円形ではない。骨体中央周は82mm（左）である。最大長は内側顆の内側端が欠損しているので計測できないが，現状で最大長を計測してみると410mm（左）となり，現代人骨を基にして推定値を求めてみると，412～415mmぐらいになると考えられ，長さはあまり長いものではないようである。

3．脛骨

両側とも骨体の中央部が残存していたが，保存状態が悪く計測はできない。しかし，観察したところでは，矢状径が大きく，骨体は著しく扁平である。

(3) **躯幹骨**

胸骨柄，肋骨，椎骨が残存していた。

(4) **推定身長値**

大腿骨最大長は計測できないが，試みに推定最大長から，Pearsonの公式を用いて推定身長値を算出してみると，158.76cm～159.33cmぐらいで，身長はあまり高くはないようである。

(5) **性別・年令**

性別は，眉上弓が強く隆起し，恥骨下角も小さいことから，男性と考えられ，年令は矢状縫合と冠状縫合の内板がともに癒合しており，矢状縫合は外板も癒合閉鎖していることから熟年と推定される。

第２号石棺１号人骨（男性，熟年）

(1) 頭蓋

１．脳頭蓋

左側頭頂骨の大部分を欠損しており，また左側側頭骨および右側頭頂骨の一部も残存していない。乳様突起は大きく，乳突上稜や外後頭隆起の発達も良好である。縫合は三主縫合のうち冠状縫合，矢状縫合，ラムダ縫合のそれぞれ一部が観察可能であるが，これらの内板はすべて閉鎖しており，外板にも部分的に閉鎖しているところがある。外耳道は両側の観察が可能であるが，両側とも外耳道骨腫は認められない。

後頭部の大部分を欠損しているので，頭蓋最大長や頭蓋最大幅の計測はできない。従って，頭蓋長幅示数は算出できないが，残存部分から推測すれば，頭型は短頭に傾いているようである。バジオン・ブレグマ高は144㎜で，頭高は高い。

２．顔面頭蓋

顔面骨は大部分が残存していたが，上顎骨を頬骨などと接合できない。眉上弓の隆起は著しく強い。鼻根部はやや狭そうであるが，鼻骨の隆起はあまり強くない。また頬骨は第１号石棺人骨のようには外側へ張り出していない。

中顔幅は98㎜で，顔長，顔高，上顔高は計測できない。左側頬骨弓の一部は欠損しているが，最突出部が残存しているので頬骨弓幅の計測は可能で，この計測値は138㎜であり，顔面の幅径は狭い。

眼窩幅は42㎜（左），眼窩高は36㎜（右），34㎜（左）で，眼窩示数は80.95（左）となり，左側はmesokonch（中眼窩）に属しており，眼窩の高径はやや高い。

鼻部および側面角は計測できない。

鼻根部の計測値は，ナジオン－グラベラ距離のみが計測可能で，これは２㎜である。

３．下顎骨

右側半分が残存していた。第１号石棺人骨同様，下顎骨の径は小さく，下顎枝および下顎体の高径はともに低く，下顎切痕は著しく浅い。また下顎枝の後方への傾斜はやや大きい。

４．歯

上顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと次のとおりである。

／	●	M_1	●	P_1	○	○	○	○	○	●	P_1	P_2	●	●	／
M_3	●	●	●	○	●	○	／	／	／	●	●	●	●	●	／

咬耗度はBrocaの３度である。上顎左側犬歯と下顎の両犬歯は存在せず，歯槽は閉鎖している。下顎骨の歯槽部には歯周疾患を疑わせる所見が認められ，歯槽の状態が悪いので，抜歯と断定するには疑問がある。上顎骨の遠心側の歯槽突起にも骨の吸収が認められ，釘植歯の歯根はかなり露出している。確かに左側第１小臼歯の歯根もかなり露出はしているが，歯槽突起の近心部の状態が比較的良好なことや側切歯と第１小臼歯がまだ釘植していたことを考えれば，上顎左側犬歯が抜去された可能性は捨てきれない。また正中口蓋縫合部に異常な骨隆起が認められる。

(2) 四肢骨

上腕骨と大腿骨とが残存していたにすぎない。

１）上肢骨

１．上腕骨

遠位端を欠く右側上腕骨が残存していた。骨体の径はそれほど大きいものではないが，大結節稜の発達はきわめて良好で，骨体は著しく扁平である。

中央最大径は23㎜（右），中央最小径は16㎜（右）で，骨体断面示数は69.57（右）である。また骨体最小周は62㎜（右），中央周は67㎜（右）である。

2）下肢骨

1．大腿骨

左側骨体の近位半が残存していたにすぎない。骨体の径は小さく，粗線の幅は狭いが，骨体の両側面は著しく後方へ突出し，いわゆる柱状を呈している。

計測値は骨体中央矢状径が31㎜（左），骨体中央横径は24㎜（左）で，骨体断面示数は129.17（左）となり，強い柱状形成が認められ，形態的には，同じ広島市の末光弥生人の大腿骨に酷似している。骨体中央周は86㎜（左）であり，また上骨体断面示数は82.76となり，骨体上部の扁平性は弱い。

(3) 特殊所見

環椎と後頭顆とが癒合していた。環椎は左側の大部分を欠いているが，両側とも癒合していたものと考えられる。

(4) 性別・年令

性別は，乳様突起が大きく，乳突上稜や外後頭隆起の発達も良好であることから，男性と考えられ，年令は，三主縫合の観察できた部分の内板がすべて閉鎖しており，外板も部分的に閉鎖しているところがあるので熟年と推定される。

第2号石棺2号人骨（女性，熟年）

(1) 頭蓋

左側頭頂骨の乳突角部，左側側頭骨岩様部，左側頬骨，上顎骨歯槽突起および下顎骨が残存していた。頭蓋の骨壁はやや薄い。外耳道は左側のみが観察可能であったが，外耳道骨腫は認められない。

下顎骨は左側半分が残存していた。径は小さく，歯槽は大部分が閉鎖しており，骨吸収が認められる。下顎枝はやや後方へ傾斜しており，また下顎切痕は浅い。

歯は残存していなかったが，歯槽の観察が可能であった。歯槽の状態を歯式で示すと次のとおりである。

／	／	／	／	／	／	／	／	○	●	●	○	●	●	／	／
／	／	／	／	／	○	○	●	／	／	●	●	●	●	●	●

(2) 四肢骨

鎖骨が残存していたにすぎない。

1．鎖骨

左側の中部が残存していた。径は著しく小さい。

(3) 性別・年令

性別は，頭蓋骨壁がやや薄いこと，下顎骨の径が小さく，鎖骨の径も著しく小さいことから，女性と考えられ，年令は歯槽の状態から熟年と推定される。

第３号石棺１号人骨（男性，熟年）

(1) 頭蓋

１．脳頭蓋

前頭骨と左側側頭骨が残存していたにすぎない。縫合は冠状縫合の左側部が観察可能で，この部分の内板は癒合しており，外板にも癒合が始まっているようである。外耳道は左側のみが観察できたが，外耳道骨腫は認められない。また，乳突上稜は良く発達している。

２．顔面頭蓋

右側頬骨弓を欠損している以外はほぼ完全である。眉上弓の隆起は強い。鼻根部はやや狭いが，鼻骨の隆起はあまり強くないので，鼻根部は比較的扁平である。また頬骨は１号人骨ほどは張っていない。

中顔幅は94mm，上顔高は61mmで，頬骨弓幅および顔高は計測できないが，頬骨弓幅については，左側半分が完全なので，正中矢状面までの距離を２倍することによって，頬骨弓幅の推定値を算出してみると（130mm）となり，顔面の幅径は狭い。上顔示数は（47.69）（K），65.96（V）である。

眼窩幅は43mm（右），43mm（左），眼窩高は33mm（右），32mm（左）で，眼窩示数は76.74（右），74.42（左）となり，右側は mesokonch（中眼窩）に，左側は chamaekonch（低眼窩）に属している。

鼻幅は25mm，鼻高は46mmで，鼻示数は54.35となり，chamaerrhin（低鼻）に属している。

側面角は，全側面角が86度，鼻側面角が90度，歯槽側面角は73度で，歯槽性の突顎の傾向が認められる。

鼻根部の計測値は，前眼窩幅が18mm，鼻根横孤長は19mm，鼻根彎曲示数は94.74となり，鼻骨の鼻骨間縫合へ向かう隆起はきわめて弱い。鼻骨最小幅は７mm，前頭突起上幅は10mm（右），９mm（左）である。前頭突起水平傾斜角は計測できないが，観察したところではこの角度は大きく，前頭突起は水平方向を向いている。鼻根角は144度で，大きく，鼻根陥凹示数は16.67で小さく，鼻骨の隆起が弱いことがうかがえ，鼻根部は第１号石棺人骨にきわめて酷似している。

３．下顎骨

下顎体が残存していた。第１号石棺人骨同様，高径はやや小さい。

４．歯

上顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと次のとおりである。

M_2 M_1 P_2 P_1 C I_2 I_1	I_1 I_2 C P_1 P_2 ● ／ M_3
／ M_2 M_1 P_2 ／ C ／ ／	／ I_2 C P_1 P_2 ● M_2 ／

咬耗度は Broca の２度である。また，上顎右第三大臼歯は未萌出で，歯槽突起には第三大臼歯が萌出できるスペースは全くない。なお風習的抜歯の痕跡は認められない。

(2) 四肢骨

上腕骨，撓骨および尺骨が残存していた。撓骨は遠位端が，尺骨は近位端が残存していたにすぎない。

１）上肢骨

１．上腕骨

両側とも骨体と上腕骨滑車が残存していた。骨体の径はやや小さいが，三角筋粗面の発達は良好である。

中央最大径は21mm（右），20mm（左），中央最小径は16mm（右，左）で，骨体断面示数は76.19（右），80.00（左）で，扁平性は強くない。また骨体最小周は59mm（右），中央周は62mm（右），60mm（左）である。

(3) **性別，年令**

性別は，乳突上稜が良く発達しており，眉上弓の隆起も強いことから，男性と考えられ，年令は，観察できた冠状縫合の左側部の内板が癒合しており，外板にも癒合が始まっているようなので，熟年と推定される。

第3号石棺2号人骨（女性，熟年）

(1) **頭蓋**

後頭部のみが残存していた。すなわち，後頭骨，左右の側頭骨の岩様部および右側頭頂骨の乳突角部が残存していたにすぎない。乳様突起は小さく，縫合はラムダ縫合の観察が可能で，内板は完全に癒合閉鎖しており，外板も部分的に癒合している。外耳道は両側とも観察可能であったが，外耳道骨腫は両側とも認められない。

計測はできないが，残存部から推測すれば，頭蓋の径は小さいようである。

(2) **四肢骨**

撓骨および尺骨が残存していた。

1．撓骨

左側のみが残存していた。遠位端を欠損している以外はほぼ完全である。長さはやや長く，骨体は細い。骨間縁は中央部よりやや近位部で最も突出している。

2．尺骨

左側のみが残存していた。肘頭の一部と遠位端を欠損している以外はほぼ完全である。撓骨と同様に長さはやや長く，骨体は細い。

(3) **性別・年令**

性別は，乳様突起や頭蓋の径が小さいことや前腕の骨が細いことから，女性と考えられ，年令は，観察できたラムダ縫合の内板が完全に癒合閉鎖しており，外板も部分的に癒合していることから，熟年と推定される。

第5号石棺人骨（性別不明，壮年）

頭蓋と腰椎および肋骨片が残存していた。

(1) **頭蓋**

頭蓋冠が残存していたにすぎない。径はあまり大きいものではないようである。縫合は冠状縫合および矢状縫合が観察できたが，両者とも内外両板は開離している。

また遊離歯が4本残存していた。これを歯式で示すと次のとおりである。

／ ／ ／ ／ P_1 ／ ／ ／	／ ／ ／ P_1 ／ ／ ／ ／
／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／	／ ／ ／ P_1 P_2 ／ ／ ／

咬耗度はBrocaの1度である。

(2) **性別・年令**

性別は不明であるが，年令は縫合が内外両板とも開離していることや歯の咬耗が弱いことから，壮年と推定される。

第9号石棺人骨（女性，熟年）

(1) 頭蓋

1．脳頭蓋

前頭骨と左右の頭頂骨が残存していた。縫合は冠状縫合と矢状縫合が観察可能であったが，両縫合とも内外両板は癒合している。外耳道は左側のみが観察可能であるが，外耳道骨腫は認められない。

2．顔面頭蓋

上顎骨の大部分と右側頬骨を欠損している。眉上弓の隆起はやや弱いが，前頭鱗はやや後方へ傾斜している。鼻根部はやや狭いが，鼻骨の隆起は弱く，鼻根部はきわめて扁平である。

眼窩幅は44mm（左），眼窩高は33mm（左）で，眼窩示数は75.00（左）となり，左側は chamaekonch（低眼窩）に属している。

鼻根部の計測値は，前眼窩幅が15mm，鼻根横孤長は16mm，鼻根彎曲示数は93.75となり，鼻骨の鼻骨間縫合へ向かう隆起はきわめて弱い。鼻骨最小幅は3mm，前頭突起上幅は12mm（右），10mm（左）である。前頭突起水平傾斜角は計測できないが，観察したところではこの角度は著しく大きく，前頭突起は水平方向を向いている。鼻根角は154度で，大きく，鼻根陥凹示数は10.53で小さく，鼻骨の隆起はきわめて弱く，鼻根部は全く扁平である。

3．歯

上顎には歯が釘植しており，また下顎歯も遊離して残存していた。その残存歯を歯式で示すと，次のとおりである。

／ ／ M_1 P_2 P_1 C I_2 I_1	I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 ／ ／
／ ／ ／ P_2 P_1 C I_2 I_1	I_1 I_2 C ／ P_2 ／ ／ ／

咬耗度は Broca の2度である。また歯の径はやや小さい。

(2) 性別・年令

性別は，前頭部の膨隆は認められないが，眉上弓の隆起が弱いこと，歯の径がやや小さいことなどから一応女性と考えておきたい。年令は冠状縫合と矢状縫合の内外両板がともに閉鎖していることから熟年と推定される。

考　察　1

まず出土人骨相互間の検討を行なってみたい。

(1) **頭蓋**

頭蓋の保存状態が良かったのは，第1号石棺人骨（男性），第2号石棺1号人骨（男性），第3号石棺1号人骨（男性），第9号石棺人骨（女性）の合計4体であった。このうち脳頭蓋の観察が可能なものは第1号石棺人骨と第2号石棺1号人骨だけで，この男性2体の脳頭蓋の諸径は大きく，また頭型は両者とも短頭型に傾いているようである。

顔面頭蓋の観察や計測ができたのは上記の4体である。第1号石棺人骨（男性）と第2号石棺1号人骨（男性）は眉上弓の隆起が著しく強く，顔面の諸径も大きい。しかし第3号石棺1号人骨（男性）はこの2体ほど眉上弓の隆起は強いものではなく，また顔面の諸径もこの2体ほど大きいものではない。第1号石棺人骨の顔面の高径は高いが，同時に幅径も大きい。第2号石棺1号人骨の顔面の高径は計測できないが，幅径は狭く，また眼窩の高径が高いので，あるいは顔面の高径も高いのかもしれない。この2体に比べて，第3号石棺1号人骨の顔面の径はやや小さく，とくに上顔高は62㎜しかなく，低上顔である。

眼窩の高径は第2号石棺1号人骨が高く，その他は低く，特に第3号石棺1号人骨は低いが，眼窩の形態は一様に四角い。鼻部の高径については，第1号石棺人骨は高く，第3号石棺1号人骨，第9号石棺人骨は低い。

第1号石棺人骨には歯槽性の突顎傾向は認められないが，第2号石棺1号人骨および第3号石棺1号人骨には歯槽性の突顎傾向が認められる。

鼻根部の幅は4体とも狭いが，鼻骨の鼻骨間縫合へ向かう隆起は著しく弱く，前頭突起の向きも矢状方向ではなく，水平方向であり，また鼻骨の顔の前面に向かう隆起も弱く，鼻根部は扁平である。しかしその程度は第9号石棺人骨が最も強く，この人骨の鼻根部は中世人骨を思わせる。

また，頭蓋の径が大きいわりには，下顎骨が一様に小さいのも本人骨群の特徴である。

(2) **四肢骨**

四肢骨の保存が最も良かったのも第1号石棺人骨である。頭蓋の径が大きい第2号石棺1号人骨の上腕骨は，頭蓋の大きさのわりにはそれほど大きいものではないが，骨体は著しく扁平である。また3号石棺1号人骨の上腕骨は小さいものであり，女性の上腕骨も著しく小さい。大腿骨は男性の2体分のみが残存していた。頭蓋の径がともに大きかった第1号石棺人骨と第2号石棺1号人骨の大腿骨であるが，両者はきわめて対照的である。両者とも骨体の径は頭蓋の径の大きさに比べれば小さいが，第2号石棺1号人骨の大腿骨の両側面は後方へ突出しており，いわゆる柱状を呈しており，その程度は著しい。末光弥生人の男性大腿骨にもこの特徴が認められていることは，特に注意しておきたい。ところが第1号石棺人骨にはこの柱状性は全く認められず，むしろ骨体の径は矢状径よりも横径のほうが大きく，骨体はややきゃしゃである。このように頭蓋の径が大きいわりに，四肢骨は一様に小さく，また上腕骨が著しく扁平であり，同時に大腿骨には強い柱状性が認められるものとそうでないものが存在する。すなわち第1号石棺人骨の頭蓋は高径も幅径も大きく，四肢骨は一様に小さく，大腿骨には柱状性は認められないが，頸骨は扁平である。一方，第2号石棺1号人骨の頭蓋の径も大きく，四肢骨はやはり小さいが，上腕骨には扁平性が認められ，大腿骨にも強い柱状性が認められるのである。また第3号石棺1号人骨は頭蓋の径もあまり大きいものではなく，また上腕骨は著しく小さいものである。

考　察　2

次に，各地の弥生時代人骨および縄文時代人骨との比較を行なってみた。また参考までに，山口市の朝田古墳人との比較も行なった。

(1) 頭蓋

1．脳頭蓋

脳頭蓋の計測ができたのはわずか1例のみであった。表3に示すとおり，頭蓋最大幅はどの比較群の平均値よりも大きく，バジオン・ブレグマ高は土井ケ浜，西北九州，三津，大友弥生人よりも大きく，二塚山弥生人の平均値にきわめて近い。頭蓋長幅示数は正確には算出できないが，観察したところでは，頭型は短頭に傾いているようであり，比較群の中では西北九州弥生人に近いようである。また距離的に近いところでは，土井ケ浜701号や，宇部市の大須賀古墳（前期）人も短頭であった。頭蓋幅高示数は二塚山弥生人よりは小さいが，その他の資料とは大差ない。

次いで，縄文時代との比較を行なってみると（表4），頭蓋最大幅はどの比較群の平均値よりも大きく，バジオン・ブレグマ高は津雲縄文人よりは大きいが，その他の資料とは大差ない。比較資料のうち短頭に傾いているのは，太田，寄倉縄文人なので，頭型については同じ広島市の太田，寄倉縄文人に近いようである。しかし頭蓋幅高示数は太田，寄倉縄文人よりは小さく，津雲縄文人に近い。

表3　脳頭蓋計測値（男性、mm）

		佐久良弥生人		土井ヶ浜弥生人（金関、他）		西北九州弥人（内藤）		三　津弥生人（牛島）		二塚山弥生人（松下）		大　友弥生人（松下）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	1	(179)	52	182.8	21	182.81	15	184.73	13	183.00	24	183.71
8.	頭蓋最大幅	1	147	54	142.6	20	144.95	10	145.60	14	143.50	24	143.29
17.	バジオン・ブレグマ高	1	138	43	134.7	15	134.60	12	136.83	12	138.67	20	135.55
8/1	頭蓋長幅示数	1	(82.12)	48	78.1	20	79.17	10	78.45	12	78.05	21	77.93
17/1	頭蓋長高示数	1	(77.09)	42	73.7	15	74.15	11	74.18	11	76.02	16	74.52
17/8	頭蓋幅高示数	1	93.88	43	94.3	14	93.11	9	94.89	11	97.42	18	94.38
5.	頭蓋底長	1	105	43	101.7		—	11	102.68	13	106.15		—
11.	両耳幅	1	128	54	127.0		—	12	130.08	13	128.23	26	127.96
23.	頭蓋水平周	1	(520)	44	526.8	19	530.42	10	536.70	13	526.00	18	531.44
24.	横弧長	1	(321)	50	315.2	15	324.67	11	321.27	15	314.07	22	317.27
25.	正中矢状弧長		—	47	375.3	17	376.47	12	378.00	11	368.45	13	382.62

表4　脳頭蓋計測値（男性、mm）

		佐久良弥生人		太　田縄文人（今道）		寄　倉縄文人（鈴木）		津　雲縄文人（清野、他）	
		n	M	n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	1	(179)	9	183.7	9	181.8	16	186.4
8.	頭蓋最大幅	1	147	9	144.3	10	144.3	18	144.4
17.	バジオン・ブレグマ高	1	138	9	139.4	4	137.5	13	134.0
8/1	頭蓋長幅示数	1	(82.12)	6	79.3	7	79.8	16	77.7
17/1	頭蓋長高示数	1	(77.09)	5	75.8		—	13	71.6
17/8	頭蓋幅高示数	1	93.88	6	96.3	4	97.0	13	92.2
5.	頭蓋底長	1	105	5	102.2	3	104.0	13	103.4
11.	両耳幅	1	128		—	10	127.1		—
23.	頭蓋水平周	1	(520)	7	532.1	9	533.4	15	532.3
24.	横弧長	1	(321)	8	322.1	9	328.6	16	310.3
25.	正中矢状弧長		—	5	371.8	4	377.8	13	375.0

2．顔面頭蓋

表5に示すとおり，第1号石棺人骨の頬骨弓幅は土井ケ浜，西北九州，大友弥生人よりも大きく，比較的三津，二塚山弥生人に近く，第2号石棺1号人骨の頬骨弓幅は土井ケ浜，西北九州弥生人に近い。第1号石棺人骨の中顔幅は土井ケ浜，西北九州，三津，大友弥生人よりも大きく，二塚山弥生人に近く，第2号石棺1号人骨および第3号石棺1号人骨の中顔幅はどの比較資料よりも小さい。第1号石棺人骨の顔高は三津弥生人よりはわずかに小さいが，西北九州，大友弥生人よりも大きく，土井ケ浜，二塚山弥生人に近い。また，第1号石棺人骨の上顔高も三津，土井ケ浜弥生人よりは小さいが，西北九州，大友弥生人よりも大きく，二塚山弥生人に近い。しかし，第3号石棺1号人骨の上顔高はどの比較資料よりも小さい。第1号石棺人骨の顔高や上顔高は大きいが，それ以上に頬骨弓幅や中顔幅が大きいので，顔示数や上顔示数は小さくなり，コルマンの顔示数は土井ケ浜，三津弥生人よりは小さいが，大友弥生人よりも大きく，西北九州，二塚山弥生人に近い。ウィルヒョーの顔示数は土井ケ浜，三津，二塚山弥生人よりは小さいが，西北九州弥生人よりも大きく，比較的大友弥生人に近い。コルマンおよびウィルヒョーの上顔示数はともに土井ケ浜，三津，二塚山弥生人よりは小さく，西北九州，大友弥生人に近い。また第3号石棺1号人骨の上顔示数も小さく，西北九州および大友弥生人の平均値に一致している。すなわち第1号石棺人骨は広顔傾向が強く，第3号石棺1号人骨は低顔傾向が強い。

眼窩は，第1号石棺人骨の高径はやや高いが，それ以上に幅径が広いので，眼窩示数は小さく，西北九州，大友弥生人に近い。第3号石棺1号人骨については幅径が広く，高径が低いので，眼窩示数は著しく小さくなり，どの比較資料よりも小さい。ところが第2号石棺1号人骨は，幅径のわりに高径がやや高く，眼窩示数はやや大きくなり，二塚山，土井ケ浜弥生人に近い。

第1号石棺人骨の鼻幅はやや広いが，鼻高も高いので，鼻示数は小さくなり，土井ケ浜弥生人に最も近いが，第3号石棺1号人骨の鼻高は著しく低く，鼻示数は西北九州，大友弥生人にきわめて近い。

全側面角，鼻側面角は第1号石棺人骨も第3号石棺1号人骨もどの比較資料よりも大きい。第1号石棺人骨の歯槽側面角はどの比較資料よりも大きい。第3号石棺1号人骨の歯槽側面角は三津弥生人よりは大きいが，二塚山弥生人よりは小さく，土井ケ浜弥生人に比較的近い。

次に，鼻根部について比較を行なってみた。鼻根部の形態は第1号石棺人骨と第3号石棺1号人骨とはきわめて良く近似しているので，両者の平均値を算出し，これを比較してみた（表6）。

前眼窩間幅は，宇久松原弥生人，大須賀古墳人，朝田古墳人よりも小さいが，土井ケ浜弥生人（701，702）よりも大きい。鼻根横孤長は宇久松原弥生人，大須賀古墳人，朝田古墳人よりも小さいが，土井ケ浜702よりも大きく，土井ケ浜701に近い。鼻根彎曲示数はどの比較資料よりも大きく，鼻骨の鼻骨間縫合へ向かう隆起は朝田古墳人よりも弱く，鼻根部における鼻骨の隆起はきわめて弱いことがうかがえる。両眼窩間幅は土井ケ浜702，朝田古墳人よりも小さく，土井ケ浜701に近い。眼窩間示数は土井ケ浜弥生人（701，702）よりも大きく，朝田古墳人の平均値に近い。前頭突起水平傾斜角は土井ケ浜弥生人（701，702），宇久松原弥生人，大須賀古墳人よりも大きく，朝田古墳人の平均値に近い。鼻根角は土井ケ浜701，大須賀古墳人よりも大きく，土井ケ浜702，朝田古墳人の平均値にきわめて近く，鼻骨の隆起はきわめて弱い。また鼻根陥凹示数は土井ケ浜701，大須賀古墳人よりも小さく，土井ケ浜702，朝田古墳人よりもやや大きい。

次いで，縄文人と比較してみると（表7），第1号石棺人骨の頬骨弓幅は津雲縄文人の平均値に一致し，第3号石棺1号人骨の頬骨弓幅はどの縄文人よりも小さい。第1号石棺人骨の中顔幅は太田縄文人に近く，

表5　顔面頭蓋計測値（男性、mm）

		佐久良 1号石棺人骨	佐久良 2号石棺1号人骨	佐久良 3号石棺1号人骨	土井ヶ浜弥生人（金関、他） n	M	西北九州弥生人（内藤） n	M	三津弥生人（牛島） n	M	二塚山弥生人（松下） n	M	大友弥生人（松下） n	M
40.	顔長	94	—	—	33	99.9		—	10	101.10	11	101.45	13	102.00
42.	下顔長	100	—	—	35	109.8		—	7	110.57	9	111.11	13	116.23
45.	頬骨弓幅	(143)	138	—	27	139.4	12	138.42	6	142.41	5	144.20	9	140.67
46.	中顔幅	107	98	94	37	103.4	17	105.00	10	104.30	6	106.00	24	101.83
47.	顔高	122	—	—	36	123.4	14	117.07	10	125.00	9	122.56	18	118.67
48.	上顔高	70	—	62	35	72.4	17	68.06	13	74.54	10	71.60	16	66.63
47/45	顔示数(K)	(85.31)	—	—	24	88.5	12	84.60	4	89.95	4	84.97	7	83.85
48/46	上顔示数(K)	(48.95)	—	—	21	51.9	12	49.31	5	53.05	5	51.34	7	47.55
47/46	顔示数(V)	114.02	—	—	34	119.3	14	111.78	8	121.58	5	117.47	17	116.55
48/46	上顔示数(V)	65.42	—	64.89	31	70.0	17	64.84	10	71.65	6	69.58	15	64.46
51.	眼窩幅(左)	45	42	43	38	42.7	15	43.07	14	42.93	9	44.67	23	43.96
52.	眼窩高(左)	35	34	32	40	34.2	15	32.80	13	35.25	12	36.08	24	33.54
52/51	眼窩示数(左)	77.78	80.95	74.42	38	80.1	15	76.18	13	82.45	9	81.43	22	76.49
54.	鼻幅	27	—	25	38	27.1	16	27.75	13	27.15	11	26.27	25	27.36
55.	鼻高	53	—	46	39	53.1	16	51.00	14	53.00	11	55.18	23	50.74
54/55	鼻示数	50.95	—	54.35	37	51.0	16	54.41	13	51.38	11	47.80	22	54.49
72.	全側面角	89	—	86	34	83.6	15	82.00	11	82.55	9	84.44		—
73.	鼻側面角	92	—	90	38	88.0		—	11	87.73	10	87.20		—
74.	歯槽側面角	83	—	73	35	71.0		—	11	67.27	9	78.22		—

表6　鼻根部計測値（男性、mm、度）

	佐久良弥生人 n	M	土井ヶ浜弥生人（松下、他） 701	702	宇久松原弥生人（松下） n	M	大須賀古墳人（松下） n	M	朝田横穴墓古墳人（松下、他） n	M
前眼窩間幅	2	18.00	16	16	1	20	1	20	5	19.60
鼻根横弧長	2	19.50	20	18	1	25	1	23	5	22.00
鼻根彎曲示数	2	92.37	80.00	88.89	1	80.00	1	86.96	5	88.98
鼻骨最小幅	2	7.00	6	7	1	13	1	6	5	8.80
両眼窩間幅	2	99.00	98	106		—		—	2	106.00
眼窩間示数	2	18.20	16.33	15.09		—		—	2	18.88
前頭突起上幅(右)	2	9.50	11	11	1	6	1	11	5	9.60
(左)	2	9.00	11	10	1	6	1	13	5	9.60
前頭突起水平傾斜角	1	111	100	85	1	100	1	94	4	113.75
G－N投影距離	2	3.00	5	2	1	1	1	3	1	2
鼻根角	2	144.50	112	142	1	164	1	137	4	144.75
鼻根陥凹示数	2	16.67	30.43	14.71	1	5.00	1	20.00	4	13.08

第2号石棺1号人骨および第3号石棺1号人骨の中顔幅はどの縄文人よりも小さい。第1号石棺人骨の顔高と上顔高はともにどの縄文人よりも大きいが，第3号石棺1号人骨の上顔高はどの縄文人よりも小さい。第1号石棺人骨のコルマンの顔示数は太田，津雲縄文人よりも大きいが，コルマンおよびウィルヒョーの上顔示数については，ともに太田，津雲縄文人と大差ない。

第1号石棺人骨の眼窩示数は津雲縄文人に，第3号石棺1号人骨の眼窩示数は太田縄文人に近いが，第2号石棺1号人骨の眼窩示数は両縄文人よりも大きい。第1号石棺人骨の鼻幅はやや広いが，鼻高も高いので，鼻示数は小さく，太田，津雲縄文人よりも小さいが，第3号石棺1号人骨の鼻高は低いので，鼻示数は大きくなり，太田縄文人よりも大きく，寄倉，津雲縄文人の示数値に一致している。

また，側面角はすべて太田，寄倉，津雲縄文人よりも大きい。

鼻根部については，縄文人の資料がないので，比較できないが，本例の鼻根部の形態は明らかに縄文人と異なるもので，鼻根部には縄文人的特徴は全く認められない。ただし，眉上弓の隆起はきわめて強いものである。

女性については，脳頭蓋や顔面頭蓋の保存状態が悪いので，他の資料との比較は省略し，鼻根部について朝田古墳人との検討を行なってみることにしたい。表８に示すとおり，前眼窩間幅と鼻根横孤長はともに朝田古墳人よりも小さいが，鼻根彎曲示数は朝田古墳人よりも大きく，鼻骨の鼻骨間縫合へ向かう隆起は朝田古墳人よりも弱く，鼻根部における鼻骨の隆起はきわめて弱いことがうかがえる。前頭突起水平傾斜角は計測できないが，この角度はきわめて大きく，朝田古墳人と大差ないものと考えられる。また鼻根角と鼻根陥凹示数も朝田古墳人の平均値にきわめて近く，鼻骨の隆起はきわめて弱いことがうかがえる。すなわち，鼻根部の形態は朝田古墳人にきわめて酷似しており，扁平である。

表７　顔面頭蓋計測値（男性、mm）

		佐久良			太田		寄倉		津雲	
		1号石棺人骨	2号石棺1号人骨	3号石棺1号人骨	縄文人（今道）		縄文人（鈴木）		縄文人（清野、他）	
					n	M	n	M	n	M
40.	顔長	94	—	—	5	98.6	2	102.5	12	102.7
42.	下顔長	100	—	—		—		—		—
45.	頬骨弓幅	(143)	138	—	1	140		—	6	143.2
46.	中顔幅	107	98	94	3	107.7		—	9	103.6
47.	顔高	122	—	—	7	113.4		—	11	115.8
48.	上顔高	70	—	62	6	68.7		—	13	67.0
47/45	顔示数(K)	(83.31)	—	—	1	77.9		—	4	79.6
48/45	上顔示数(K)	(48.95)	—	—	1	47.2		—	6	48.3
47/46	顔示数(V)	114.02	—	—		—		—		—
48/46	上顔示数(V)	65.42	—	64.89	3	64.0		—	8	67.7
51.	眼窩幅(左)	45	42	43	4	43.0		—	14	43.5
52.	眼窩高(左)	35	34	32	4	31.3		—	12	33.5
52/51	眼窩示数(左)	77.78	80.95	74.42	4	73.0		—	12	76.5
54.	鼻幅	27	—	25	6	25.5	5	26.9	13	26.6
55.	鼻高	53	—	46	6	50.0	2	50.0	14	48.6
54/55	鼻示数	50.95	—	54.35	4	51.3	2	54.1	12	54.5
72.	全側面角	89	—	86	3	81.0		—	13	81.9
73.	鼻側面角	92	—	90	3	82.7		—	14	85.8
74.	歯槽側面角	83	—	73		—	2	76.5	13	70.9

表８　鼻根部計測値（女性、mm、度）

	佐久良弥生人		朝田横穴墓古墳人（松下、他）	
	n	M	n	M
前眼窩間幅	1	15	7	17.29
鼻根横弧長	1	16	7	20.57
鼻根彎曲示数	1	93.75	7	85.35
鼻骨最小幅	1	3	7	8.14
両眼窩間幅		—	3	96.00
眼窩間示数		—	3	19.83
前頭突起上幅(右)	2	12	7	9.57
(左)	2	10	7	9.14
前頭突起水平傾斜角		—	6	101.50
G－N投影距離		—	6	1.00
鼻根角	1	154	6	153.83
鼻根陥凹示数	1	10.53	6	11.42

(2) 四肢骨

1．上腕骨

男性上腕骨について，弥生人，縄文人および朝田古墳人と比較してみると，表9，10に示すとおり，中央最大径および中央最小径はともに，縄文人，三津，二塚山，大友弥生人および朝田古墳人よりも小さく，比較的土井ケ浜弥生人に近い。骨体最小周は朝田古墳人も含めて全ての比較資料よりも小さい。また骨体断面示数は朝田古墳人，土井ケ浜，三津弥生人よりも小さく，二塚山，大友弥生人，太田，津雲縄文人に近い。

女性上腕骨は，表11，12に示すとおり，男性と同様に，中央最大径および中央最小径はともに，縄文人はもとより，土井ケ浜，三津，二塚山，大友弥生人および朝田古墳人よりも小さく，骨体断面示数は太田，津雲縄文人，二塚山，大友弥生人よりは大きく，三津弥生人，朝田古墳人に近い。

表9　上腕骨計測値（男性、右、mm）

		佐久良弥生人		土井ヶ浜弥生人（財津）		三津弥生人（牛島）		二塚山弥生人（松下）		大友弥生人（松下）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
5.	中央最大径	2	22.00	55	22.9	13	23.85	12	24.08	37	24.46
6.	中央最小径	2	16.00	55	16.4	13	18.12	12	17.92	37	17.97
7.	骨体最小周	2	60.50	56	64.7	13	67.15	9	65.89	37	64.57
7(a).	中央周	2	64.50		—		—	12	69.92	35	71.00
6/5	骨体断面示数	2	73.68	54	76.1	13	76.45	12	74.53	37	73.60

表10　上腕骨計測値（男性、右、mm）

		佐久良弥生人		太田縄文人（今道）		津雲縄文人（清野、他）		朝田古墳人（松下）	
		n	M	n	M	n	M	n	M
5.	中央最大径	2	22.00	22	25.6	20	23.9	3	23.00
6.	中央最小径	2	16.00	22	18.6	20	17.5	3	17.67
7.	骨体最小周	2	60.50	22	69.6	20	65.2	1	62
7(a).	中央周	2	64.50		—		—	3	68.00
6/5	骨体断面示数	2	73.68	22	72.6	20	72.7	3	76.84

表11　上腕骨計測値（女性，右，mm）

		佐久良弥生人		土井ケ浜弥生人（財津）		三津弥生人（牛島）		二塚山弥生人（松下）		大友弥生人（松下）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
5.	中央最大径	1	18(左)	28	20.6	6	20.33	6	22.00	25	21.68
6.	中央最小径	1	14(左)	29	15.5	6	15.50	6	16.17	25	15.48
7.	骨体最小周		—	30	59.1	6	57.17	5	60.20	20	57.65
7(a).	中央周	1	55(左)		—		—	6	64.00	23	61.96
6/5	骨体断面示数	1	77.78(左)	29	75.9	6	77.12	6	73.57	25	71.53

表12　上腕骨計測値（女性，右，mm）

		佐久良弥生人		太田縄文人（今道）		津雲縄文人（清野，他）		朝田古墳人（松下）	
		n	M	n	M	n	M	n	M
5.	中央最大径	1	18(左)	8	21.3	25	20.4	2	19.50
6.	中央最小径	1	14(左)	8	15.5	25	14.3	2	15.00
7.	骨体最小周		—	8	59.6	23	55.3	2	53.00
7(a).	中央周	1	55(左)		—		—	2	57.50
6/5	骨体断面示数	1	77.78(左)	8	73.0	20	72.7	2	76.84

2．大腿骨

前述しているように，男性大腿骨には二つのタイプが認められるので，平均値を出すことはしないで，それぞれを比較してみた。(表13，14)

第1号石棺人骨の骨体中央矢状径は土井ケ浜，三津，二塚山，大友弥生人，太田，津雲縄文人よりも小さく，帝釈猿神縄文人に近く，第2号石棺1号人骨の骨体中央矢状径は土井ケ浜，三津，大友弥生人，津雲，帝釈猿神縄文人よりも大きく，二塚山弥生人，太田縄文人に近い。骨体中央横径については，第1号石棺人骨は土井ケ浜，大友弥生人，太田，津雲，帝釈猿神縄文人に近く，第2号石棺1号人骨はいずれの資料よりも小さい。骨体中央断面示数については，第1号石棺人骨は帝釈猿神縄文人の1例に一致し，第2号石棺1号人骨はいずれの比較資料よりも大きいものである。また骨体中央周については，第1号石棺人骨は帝釈猿神縄文人よりは大きく，その他の資料よりは小さい。第2号石棺1号人骨は帝釈猿神縄文人よりは大きいが，三津，二塚山弥生人，太田縄文人よりは小さく，土井ケ浜，大友弥生人，津雲縄文人と大差ない。すなわち，第1号石棺人骨の大腿骨は帝釈猿神縄文人に最も近く，第2号石棺1号人骨の大腿骨は比較群の中では津雲縄文人に最も近いようである。

表13　大腿骨計測値（男性，右，mm）

		佐久良 1号石棺人骨	佐久良 2号石棺1号人骨	土井ケ浜 弥生人（財津）		三津 弥生人（牛島）		二塚山 弥生人（松下）		大友 弥生人（松下）	
		左	左	n	M	n	M	n	M	n	M
6．	骨体中央矢状径	25	31	56	28.6	13	29.86	25	30.40	41	28.85
7．	骨体中央横径	26	24	56	26.1	13	27.62	26	28.12	41	26.07
8．	骨体中央周	82	86	56	86.6	13	91.00	25	91.84	41	87.22
6/7	骨体中央断面示数	96.15	129.17	55	109.8	13	105.91	25	108.71	41	111.72

表14　大腿骨計測値（男性，右，mm）

		佐久良 1号石棺人骨	佐久良 2号石棺1号人骨	太田 縄文人（今道）		津雲 縄文人（清野，他）		帝釈猿神 縄文人（永井，他）	
		左	左	n	M	n	M	n	M
6．	骨体中央矢状径	25	31	31	30.6	19	29.3	1	24
7．	骨体中央横径	26	24	31	26.6	19	25.5	1	25
8．	骨体中央周	82	86	31	91.8	19	86.8	1	76
6/7	骨体中央断面示数	96.15	129.17	25	116.1	19	114.6	1	96.00

(3)　**特殊所見**

1．環椎後頭癒合

第2号石棺1号人骨（男性，熟年）の環椎と後頭骨の後頭顆とが癒合していた。環椎は右側半分が残存していたが，残存状態から推測すると両側とも癒合していたと考えられる。

2．抜歯

第2号石棺1号人骨（男性，熟年）には，上顎左側犬歯と下顎の両犬歯は存在せず，この部分の歯槽は閉鎖している。下顎骨には歯周疾患を疑わせる所見が認められ，大部分の歯槽が閉鎖している。しかし右側は，犬歯の前後にある第一小臼歯と側切歯の歯槽が開存しており，この両歯はまだ脱落していなかったと考えられ，歯根が最も長い犬歯が歯周疾患によって先に脱落したとは考えにくい。また上顎の遠心の歯槽突起にも歯周疾患を疑わせる所見が認められるが，近心側の歯槽部の状態は比較的良好なものであり，歯も釘植しており，歯槽も開存している。上顎左側部の歯槽突起の近心側は犬歯の歯槽のみが閉鎖しており，隣接歯が釘植していたと考えられることから，抜歯の可能性が強いが，歯周疾患の存在を考慮にいれれば，現状では抜歯と断定しがたい。

3．下顎隆起

第1号石棺人骨（男性，熟年）の下顎体後面には骨隆起が認められる。両側とも第二小臼歯の下位に存在する。

総　　括

広島市安佐北区白木町大字志路字佐久良・橋谷にある佐久良遺跡の発掘調査が1982年と1983年に行なわれ，石棺から合計9体の弥生時代人骨が出土した。保存状態は比較的良好なものであり，また広島県の弥生時代人骨の特徴は全く不明であることから，この人骨はきわめて貴重なものである。できるだけ詳しく人類学的観察と計測を行ない，弥生時代人骨および縄文時代人骨との比較検討を行なった。その結果を要約すれば次のとおりである。

1．出土総数9体のうち7体が成人骨で，残りの2体は小児骨であった。成人骨7体のうち男性骨は3体，女性骨も3体で，性別を明らかにできないものが1体あった。

2．この人骨は弥生時代中期に属する人骨である。

3．男性の頭蓋は著しく大きいものと，中程度のものが存在した。頭型は頭蓋の径が大きいものだけが推測可能で，短頭に傾いたものであった。女性の頭型は推測もできなかった。またバジオン・ブレグマ高は高い。

4．男性の顔面頭蓋については，高径も幅径も大きいが，高径に比べて，幅径がより広いものと，幅径は狭く，高径もより低いものとが認められた。女性については保存不良で顔面の特徴は不明である。

5．男性の眼窩には，高径の割にはやや幅径が広いものと，幅径は狭く，高径がやや高いものと，高径が著しく低いものとが認められた。

6．男性の鼻部については，高径が高いものと，低いものとが認められた。

7．男性3例について，上顎骨歯槽突起の観察が可能であり，2例には歯槽性の突顎の傾向が認められたが，1例には突顎傾向は認められない。

8．鼻根部は男女とも一様に扁平で，鼻骨の隆起も低く，その程度は，女性の方が強い。

9．顔面の諸径が大きいわりには，下顎骨の径は小さい。

10．頭蓋の大きさのわりに，四肢骨は男性でも小さい。男性については，上腕骨と脛骨には強い扁平性が認められるが，大腿骨は柱状形成が著しいものとそうでないものが認められた。女性の上腕骨は著しく小さく，また前腕が細長いものも認められた。

11．残存していた大腿骨から推定すれば，男性の推定身長値は高いものではないようである。

12．特殊所見として，抜歯の疑いのあるもの，環椎後頭癒合の例および下顎隆起が認められた。

13．以上のように，本例の男性については，頭蓋の径が大きいものと中程度のものが認められ，顔面については，高径も幅径も大きいがどちらかといえば高径のわりに幅径がやや大きいものと，幅径も小さいが高径がより小さいものとが認められた。すなわち広顔な例と低顔な例が存在する。その他に眼窩の高径が大きいものがあり，あるいはこの個体の顔高は高いのかもしれない。このように顔面の計測値には変異が認められるが，鼻根部は一様に扁平で，鼻骨の隆起は弱い。また男性の四肢骨は一様に小さいが，扁平性や柱状形成が認められるものと認められないものとが存在し，九州や山口県西部地域とはやや異なった様相が認められるようである。

広島県での古人骨の出土例は必ずしも少なくないが，他地域との関連や日本人の由来とその形質変化といった観点から考察したものはほとんどない。特に高顔，高身長を特徴とする弥生人の由来を解明するために，本県の弥生人の形質を明らかにしておくことはきわめて重要である。本例の形質の特徴はやや複雑で，単純なものではなかった。現在広島市の丸子山遺跡から出土した弥生時代人骨の整理と研究を急いでいる。この弥生人にも興味ある所見が認められるようなので，この人骨を検討するさいに，改めて，佐久良弥生人にも言及したい。

表15　脳頭蓋計測値（mm）

人骨番号		1号石棺 人骨 男性	2号石棺 1号人骨 男性	3号石棺 1号人骨 男性	平均 男性 n	平均 男性 M
1.	頭蓋最大長	(179)	—	—	1	(179)
8.	頭蓋最大幅	147	—	—	1	147
17.	バジオン・ブレグマ高	138	(144)	—	1	138
8/1	頭蓋長幅示数	(82.12)	—	—	1	(82.12)
17/1	頭蓋長高示数	(77.09)	—	—	1	(77.09)
17/8	頭蓋高幅示数	93.88	—	—	1	93.88
5.	頭蓋底長	105	(104)	—	1	105
9.	最小前頭幅	96	82	94	3	90.67
10.	最大前頭幅	118	—	—	1	118
11.	両　耳　幅	—	128	—	1	128
12.	最大後頭幅	—	130	—	1	130
13.	乳　突　幅	—	112	—	1	112
23.	頭蓋水平周	(520)	—	—	1	(520)
24.	横　孤　長	—	(321)	—	1	(321)
25.	正中矢状孤長	—	—	—		—
	Vertex Rad	123	—	—	1	123
	Nasion Rad	98	94	—	2	96.00
	Subsp. Rad	93	—	—	1	93
	Prosth. Rad	98	—	—	1	98

表16　顔面頭蓋計測値（mm）

人骨番号		1号石棺 人骨 男性	2号石棺 1号人骨 男性	3号石棺 1号人骨 男性	平均 男性 n	平均 男性 M	10号石棺 人骨 女性
40.	顔　長	94	—	—	1	94	—
41.	側顔長	74	69	69	3	70.67	—
42.	下顔長	100	—	—	1	100	—
43.	上顔幅	107	107	103	3	105.67	—
45.	頬骨弓幅	(143)	138	—	1	(143)	—
46.	中顔幅	107	98	94	3	99.67	—
47.	顔　高	122	—	—	1	123	—
48.	上顔高	70	—	62	2	65.50	—
47/45	顔示数(K)	(85.31)	—	—	1	(86.01)	—
48/45	上顔示数(K)	(48.95)	—	—	1	(48.95)	—
47/46	顔示数(V)	114.02	—	—	1	114.95	—
48/46	上顔示数(V)	65.42	—	64.89	2	65.16	—
51.	眼窩幅(右)	46	—	43	2	44.50	—
	(左)	45	42	43	3	43.33	44
52.	眼窩高(右)	35	36	33	3	34.67	—
	(左)	35	34	32	3	33.67	33
52/51	眼窩示数(右)	76.09	—	76.74	2	76.42	—
	(左)	77.78	80.95	74.42	3	77.72	75.00
54.	鼻　幅	27	—	25	2	26.00	—
55.	鼻　高	53	—	46	2	49.50	—
54/55	鼻示数	50.94	—	54.35	2	52.65	—
55(1).	梨状口高	32	—	28	2	30.00	—
56.	鼻骨長	24	—	18	2	21.00	23
57.	鼻骨最小幅	7	—	7	2	7.00	3
57(1).	鼻骨最大幅	19	—	15	2	17.00	17
60.	上顎歯槽長	54	—	—	1	54	—
61.	上顎歯槽幅	68	—	—	1	68	—
62.	口蓋長	44	—	—	1	44	—
61/60	上顎歯槽示数	125.93	—	—	1	125.93	—
72.	全側面角	89	—	86	2	87.50	—
73.	鼻側面角	92	—	90	2	91.00	—
74.	歯槽側面角	83	—	73	2	78.00	—

表17　鼻根部計測値（男性、mm、度）

	人骨番号	1号石棺人骨男性	2号石棺1号人骨男性	3号石棺1号人骨男性	平均 男性 n	平均 男性 M	10号石棺人骨女性
50.	前眼窩間幅	18	—	18	2	18.00	15
	鼻根横弧長	20	—	19	2	19.50	16
	鼻根彎曲示数	90.00	—	94.74	2	92.37	93.75
57.	鼻骨最小幅	7	—	7	2	7.00	3
44.	両眼窩幅	102	—	96	2	99.00	—
50/44	眼窩間示数	17.65	—	18.75	2	18.20	—
	前頭突起上幅(右)	9	—	10	2	9.50	12
	(左)	9	—	9	2	9.00	10
	前頭突起水平傾斜角	111	—	—	1	111	—
	G－N投影距離	4	2	—	2	3.00	—
	鼻根角	145	—	144	2	144.50	154
	鼻根陥凹示数	16.67	—	16.67	2	16.67	10.53

表18　下顎骨計測値（mm、度）

	人骨番号	1号石棺人骨男性	2号石棺2号人骨女性
70(3).	下顎切痕高(右)	—	—
	(左)	13	13
71.	枝　幅(右)	—	—
	(左)	34	—
71a.	最小枝幅(右)	—	—
	(左)	34	—
71(1).	下顎切痕幅(右)	—	—
	(左)	35	38
79.	下顎枝角(右)	—	—
	(左)	116	—
70(3)/71(1)	下顎切痕示数(右)	—	—
	(左)	37.14	34.21

表19　鎖骨計測値（mm）

		1号石棺人骨男性 右	1号石棺人骨男性 左	2号石棺2号人骨女性 左
4.	中央垂直径	11	11	8
5.	中央矢状径	12	13	9
6.	中央周	39	42	30
4/5	鎖骨断面示数	91.67	84.62	88.89

表20　尺骨計測値（mm）

		3号石棺2号人骨女性 左
3.	最小周	32
11.	尺骨矢状径	12
12.	尺骨横径	16
S	中央最小径	11
L	中央最大径	16
C	中央周	45
11/12	骨体断面示数	75.00
S/L	中央断面示数	68.75

表21　上腕骨計測値（mm）

		2号石棺1号人骨男性 右	2号石棺2号人骨女性 左	3号石棺1号人骨男性 右	3号石棺1号人骨男性 左
3.	上端幅	49	—	—	—
3(1).	横上径	52	—	—	—
5.	中央最大径	23	18	21	20
6.	中央最小径	16	14	16	16
7.	骨体最小周	62	—	59	—
7(a).	中央周	67	55	62	60
8.	頭　周	132	—	—	—
9.	頭最大横径	42	—	—	—
10.	頭最大矢状径	43	36	—	—
6/5.	骨体断面示数	69.57	77.78	79.19	80.00
9/10	頭断面示数	97.67	—	—	—

表22　橈骨計測値（mm）

	人骨番号	1号石棺人骨男性 右	3号石棺2号人骨女性 左
3.	最小周	45	35
4.	骨体横径	17	15
4a.	骨体中央横径	17	13
4(2).	顎横径	13	11
5.	骨体矢状径	12	11
5a.	骨体中央矢状径	12	11
5(1).	小頭矢状径	—	22
5(2).	顎矢状径	15	15
5(4).	顎　周	47	43
5(5).	骨体中央周	47	39
5/4	骨体断面示数	70.59	73.33
5a/4a	中央断面示数	70.59	84.62

表23　大腿骨計測値（mm）

人骨番号		1号石棺 人骨 男性	2号石棺 1号人骨 男性
		左	左
6.	骨体中央矢状径	25	31
7.	骨体中央横径	26	24
8.	骨体中央周	82	86
9.	骨体上横径	—	29
10.	骨体上矢状径	—	24
	上骨体断面示数	—	82.76
18.	頭垂直径	46	—
6/7	骨体中央断面示数	96.15	129.17

表24　膝　蓋　骨（mm）

人骨番号		1号石棺 人骨 男性
		左
1.	最大高	41
2.	最大幅	43
3.	最大厚	22
4.	関節面高	29
5.	内切面幅	22
6.	外切面幅	26
1/2	膝蓋骨高幅示数	95.35

〈擱筆するにあたり，本研究と発表の機会を与えていただいた広島市教育委員会社会教育課の諸先生方，人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授ならびに人骨の整理復元にご協力いただいた教室員諸兄に感謝致します。〉

参　考　文　献

1．Howells. W. W，1974：Cranial Variation in Man. Peabody Museun Papwes, vol. 67.
2．金関丈夫，1955：弥生人種の問題。日本考古学講座，4：238－252.
3．金関丈夫，1959：弥生時代の日本人。日本の医学－第15回日本医学会総会学術集会記録－，1：167－174.
4．金関丈夫，永井昌文，佐野　一，1960：山口県豊浦郡豊北町土井ケ浜遺跡出土弥生式時代人頭骨について。人類学研究，7：1－36.
5．金関丈夫，1966：弥生時代人。日本の考古学，3：460－471.
6．清野謙次，宮本博人，1925：津雲貝塚人の頭骨の人類学的研究。人類学雑誌，40（第3，4付録）
7．清野謙次，平井隆，1928：津雲貝塚人の上肢骨の人類学的研究。人類学雑誌，43（第3付録）
8．清野謙次，平井隆，1928：津雲貝塚人の下肢骨の人類学的研究。人類学雑誌，43（第4付録）
9．今道四方爾，1933：太田貝塚人人骨の人類学的研究。第一部　頭蓋骨の研究。人類学雑誌，48（第2付録）
10．今道四方爾，1934：太田貝塚人人骨の人類学的研究。第二部　下肢骨の研究。人類学雑誌，49（第1付録）
11．今道四方爾，1935：太田貝塚人人骨の人類学的研究。第三部　上肢骨の研究。人類学雑誌，50（第1付録）
12．松下孝幸，1979：二塚山遺跡出土の弥生時代人骨。二塚山（佐賀県文化財調査報告書第46集）：242－255.
13．松下孝幸，1979：宇宿貝塚出土の人骨。宇宿貝塚，鹿児島考古，13：210－220.
14．松下孝幸，1980：佐賀市六本黒木遺跡出土の弥生時代人骨。大門西遺跡（九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(1)：265－269.
15．松下孝幸，1981：佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書第1集）：223－253.
16．松下孝幸，1981：宮の本遺跡出土の人骨。宮の本遺跡（佐世保市埋蔵文化財調査報告書）：93－109，114－118，145－146.
17．松下孝幸，1982：山口県朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨。朝田墳墓群Ⅴ（山口県埋蔵文化財調査報告第64集）：179－206.
18．松下孝幸，分部哲秋，1982：佐賀県鳥栖市梅坂炭化米遺跡出土の弥生時代人骨。梅坂炭化米遺跡（鳥栖市文化財調査報告書10）：65：69.
19．松下孝幸，他，1982：山口県豊浦郡豊北町土井ケ浜遺跡出土の人骨。土井ケ浜遺跡第7次発掘調査概報（豊北町埋蔵文化財調査報告第2集）：19－30.
20．松下孝幸，1983：山口県山口市朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨－総括編－。朝田墳墓群Ⅵ（山口県埋蔵文化財調査報告第69集）：219－242.
21．松下孝幸，伊丹陽，1983：長崎県宇久松原遺跡出土の弥生時代人骨。長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅵ（長崎県文化

財調査報告66）：97－134.
22. 松下孝幸，石田肇，1983：鹿児島県伊仙町面縄第１貝塚出土の弥生時代人骨。面縄第１・第２貝塚（伊仙町埋蔵文化財調査報告書１）：51－64.
23. 松下孝幸，1983：佐賀県鳥栖市安永田遺跡出土の弥生時代人骨。安永田遺跡（鳥栖市文化財調査報告書16）：92－111.
24. 松下孝幸，1984：広島市末光遺跡群Ｂ地点出土の弥生時代人骨。
25. Martin-Saller，1957：Lehrbuch der Anthropologie.　Bd. l. Gustay Fisher Verlag, Stuttugart：429－597.
26. 内藤芳篤，栄田和行，1967：人骨。深掘遺跡（人類学考古学研究報告１）：87－94.
27. 内藤芳篤，松下孝幸，1975：対島・住吉平貝塚出土の弥生時代人骨例。対島の遺跡（長崎県文化財調査報告書20）：139－147.
28. 内藤芳篤，1978：サウチ遺跡出土の人骨所見。サウチ遺跡：63－64.
29. 内藤芳篤，分部哲秋，1979：延岡市熊野江積石塚箱式石棺の弥生時代人骨について。宮崎県文化財調査報告書22：８－16.
30. 内藤芳篤，1981：弥生時代人骨。人類学講座５，日本人Ⅰ，雄山閣，東京，57－99.
31. 永井昌文，中橋孝博，1979：帝釈猿神岩陰遺跡出土の人骨。帝釈峡遺跡群発掘調査室年報Ⅱ：56－68.
32. 内藤芳篤，松下孝幸，1981：弥生時代人骨。季刊人類学，12(1)：27－37.
33. Suzuki, H., 1969：Microevolution Chnges in the Japanese Population from the Prehistric Age to the Present-Day. J. Fac. Sci., Univ. Tokyo, Sec. V,　3：279－309.
34. 鈴木　尚，福島靖夫，1976：帝釈寄倉岩陰遺跡の人骨。帝釈峡遺跡群：180－192.
35. 牛島陽一，1954：佐賀県脊振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究。人類学研究，１：273－303.
36. 財津博之，1956：山口県土井ケ浜弥生前期人骨の四肢長骨に就いて。人類学研究，３：320－349.

広島市佐久良遺跡出土の弥生時代小児骨

分　部　哲　秋*

はじめに

広島市安佐北区白木町に所在する佐久良遺跡は，石棺群を主体とする遺跡で，1982年と翌1983年の発掘調査により，総数9体の人骨が出土し，そのうち2体が小児骨であった。

筆者は，これまでに九州各地から出土した幼小児骨について，骨の大きさ，化骨あるいは歯の萌出などを調査し，報告を行なってきた。また近年，全国の各大学に保管されている近代（明治）幼小児骨についても調査する機会を得たので，近々，報告する予定で，従来からあまり取扱われてこなかった，幼小児骨の死亡年令や形質は次第に明らかになりつつある。

ここで報告しようとする佐久良遺跡出土の小児骨についても，詳細な観察および計測を行なったので，その結果を記述したい。

資　　料

佐久良遺跡からは，合計9体の人骨が出土し，そのうちの2体が小児骨であった。2例の小児骨の年令および年令区分は表1に示すとおりである。ただし，年令は，後記するように歯の萌出状態および歯根の形成程度により推定したもので，性別に関しては，種々の研究が成されているが，現状では同定することが難しく，本例についても不明である。

なお，これらの人骨は，別稿で述べられているように考古学的所見より，弥生時代中期に属するものである。

計測は，Martin-Saller（1957）の方法に従い，比較資料としては，同じ弥生時代の例として大友遺跡出土の小児骨（分部，1981）を用いた。

表1　小児骨資料

人骨番号	年令	年令区分
第2号石棺3号人骨	不明	小児
第4号石棺人骨	10才	小児Ⅰ期

所　　見

第2号石棺3号人骨（小児Ⅰ期）

頭蓋の一部のみが残存していた。

(1)　頭蓋

脳頭蓋では，前頭骨の正中部と左側頭頂骨の蝶形骨角部が残存し，その壁は薄いものである。顔面頭蓋では，側頭突起を欠く左側の頬骨が残存しており，この頬骨の大きさは，成人のそれに比べてかなり小さいものである。

---

*　Tetsuaki Wakebe（長崎大学医学部解剖学第二教室）
（Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University）

(2) 年令

本人骨の年令は，歯が残存していないために，骨の大きさや骨壁の厚さから推測したものである。前頭骨の骨壁の厚さや，左側頭頂骨および左側頬骨の大きさは，後述する4号石棺人骨（10才）のそれらとほぼ同じである。従って，歯が残存しておらず，詳細な年令は不明であるが，小児Ⅰ期（7才～12才）程度の年令であると推定される。

第4号石棺人骨（10才，小児Ⅰ期）

(1) **頭蓋**

1．脳頭蓋

脳頭蓋はうしろ約1/3を欠いている。前頭結節は膨隆しており，眉上弓の隆起は全く認められない。

頭蓋最大長，頭蓋最大幅，バジオン・ブレグマ高は，欠損のため計測できないが，観察によれば，頭型は中頭型に属しているものと推測される。その他の計測項目では，最小前頭幅90mm，最大前頭幅97mm，正中矢状前頭孤長125mm，正中矢状前頭弦長108mmである。

2．顔面頭蓋は，左右の頬骨弓および左右の鼻骨を欠く以外は完全である。

頬骨弓幅は計測できないが，中顔幅は89mm，顔高は99mm，上顔高は60mmで，顔示数（V）は111.24，上顔示数（V）は67.42となり，それぞれ，chamaeprosop（低顔），chamaeprosop（低上顔）に属している。

前眼窩間幅は17mm，両眼窩幅は88mmで，眼窩間示数は19.32となり，鼻根部はやや広い。

眼窩では，眼窩幅が36mm（右，左）で，眼窩高が31mm（右），30mm（左）で，眼窩示数は86.11（右），83.11（左）となり，右側がhypsikonch（高眼窩），左側がmesokonch（中眼窩）に属している。

鼻部では，鼻幅が22mm，鼻高が45mmで，鼻示数は48.89となり，mesorrhin（中鼻）に属している。

下顎骨は，下顎体および左側下顎枝の前部が残存していた。下顎角部が欠損しているため，下顎枝角は不明であるが，下顎体はこの年令にしてはやや頑丈なものである。

3．歯

残存していた歯を歯式で示すと次のとおりである。

(M_3)	(M_2)	M_1	m_2	P_1	〔C〕	○	○	I_1	○	〔C〕	P_1	m_2	M_1	(M_2)	(M_3)
M_3	(M_2)	M_1	m_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	m_2	(M_1)	M_2	／

／：不明（破損）
（ ）：歯槽内埋伏
〔 〕：萌出途中
○：歯槽開存
•：遊離歯

萌出状態は，永久歯では上下両顎のI_1，I_2，P_1，M_1および下顎のCが萌出を完了しており，上顎のCは萌出途中で，上下両顎P_2，M_2，M_3は歯槽内に埋伏し未萌出である。

咬耗度は，乳歯では，上下両顎のm_2がBrocaの2度で，永久歯で萌出している歯はすべてBrocaの1度であるが，その中でも上下両顎のP_1と下顎のCの咬耗は非常に弱いものである。

歯根の形成度は，上下両顎I_1および下顎I_2の歯根が完成し，それ以外の歯の歯根は形成途中である。

(2) **四肢骨**

残存していたのは，右側寛骨の恥骨，左側寛骨の腸骨の一部，左側の膝蓋骨，左側の大腿骨骨体および3個の指骨で，それ以外は，保存状態が悪く，骨種を同定することはできない。左側の大腿骨骨体は，後面を欠損しており，歪みもひどく，計測は不可能である。

(3) 化骨

頭蓋においては，前および後頭内軟骨結合の化骨状態は欠損のため不明であるが，蝶後頭軟骨結合は未癒合である。

四肢骨は，保存状態が悪く，わずかに寛骨臼のみが観察可能で，この部は未癒合である。

(4) 年令

歯の萌出状態および歯根の形成程度から年令の推定を試みると，上下両顎のP_1がすでに萌出し，上顎Cが萌出途中，上下両顎P_2が未萌出であるので，藤田（1965）の歯の萌出時期（現代人）によれば，本人骨の年令は9才後半から10才前半と推定される。一方，金田（1957）の歯根形成時期（現代人）によれば，上顎I_1の歯根は完成しているので，10才以上で，上下両顎のC，P_1の歯根形成程度も現代人の10才に相当する。

したがって，弥生時代の歯の萌出時期や歯根の歯根形成時期が現代のそれと大差ないものと仮定すれば，本人骨の年令は，ほぼ10才と推定される。

(5) 比較

観察ならびに計測の結果を，同様の方法により10才と推定した大友27号人骨と比較してみた（表2，3）。

脳頭蓋では，最小前頭幅と最大前頭幅は大友27号人骨よりも小さく，正中矢状前頭孤長および弦長はやや大きい。また，観察による頭型は中頭型と推定され，大友27号人骨が短頭型であることと異なっている。

顔面頭蓋においては，中顔幅がやや小さく，顔高および上顔高には差がない。従って，本人骨の顔示数（V），上顔示数（V）は大友27号人骨よりもやや大きい値となるが，低顔の傾向は両者とも共通している。

表2　脳頭蓋主要計測値（mm）

		佐久良4 10才	大友27 10才
9.	最小前頭幅	90	96
10.	最大前頭幅	97	117
26.	正中矢状前頭孤長	125	120
29.	正申矢状前頭弦長	108	105

表3　顔面頭蓋主要計測値（mm）

		佐久良4 10才	大友27 10才
41.	側顔長	68	67
43.	上顔幅	94	97
46.	中顔幅	89	95
47.	顔　高	99	101
48.	上顔高	60	60
47/46	顔示数（V）	111.24	106.32
48/46	上顔示数（V）	67.42	63.16
50.	前眼窩間幅	17	—
44.	両眼窩幅	88	91
50/44	眼窩間示数	19.32	—
51.	眼窩幅(右)	36	—
	(左)	36	—
52.	眼窩高(右)	31	—
	(左)	30	—
52/51	眼窩示数(右)	86.11	—
	(左)	83.11	—
54.	鼻　幅	22	—
55.	鼻　高	45	—
54/55	鼻示数	48.89	—

総　　括

広島市安佐北区白木町にある佐久良遺跡が1982年と1983年に発掘調査され，石棺から総数9体の人骨が出土し，そのうち2体が小児骨であった。この2体の小児骨について，詳細な観察および計測を行なった。その結果を要約すると次のとおりである。

1．出土総数9体のうち，小児骨2体の占める割合は，22.22％となり，この割合は弥生時代の各遺跡と同様に高いものである（表4）。

2．小児骨の年令は，第2号石棺3号人骨が小児I期に相当し，第4号石棺人骨が10才と推定される。

3．第4号石棺人骨の顔面頭蓋の計測値は，中顔幅が89㎜，顔高は99㎜，上顔高は60㎜で，顔示数（V）は111.24，上顔示数（V）は67.42となり，低顔である。眼窩は，右側が高眼窩に，左側は中眼窩に，また鼻部は，中鼻に属している。

〈擱筆するにあたり，本研究の機会を与えていただいた広島市教育委員会社会教育課の諸先生方，および人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。〉

表4　各遺跡における幼小児骨の出土数

遺跡名	時代	出土人骨総数	幼児	小児		不明	合計(%)
				Ⅰ期	Ⅱ期		
宮の本	弥生	39	6	2	0	1	9 (23.08)
宇久松原	弥生	34	11	5	0	1	17 (50.00)
大友（3，4次）	弥生	55	10	3	1	0	14 (25.45)
安永田	弥生	9	2	2	0	0	4 (44.44)
佐久良	弥生	9	0	2	0	0	2 (22.22)
大友（3，4次）	古墳	3	0	1	0	0	1 (33.33)
朝田墳墓群第Ⅱ地区	古墳	25	1	0	1	0	2 (8.00)
日守地下式	古墳	5	1	0	0	0	1 (20.00)
旭台地下式	古墳	36	0	4	1	0	5 (13.89)
大萩地下式	古墳	26	0	3	0	0	3 (11.54)
成川	古墳	103	1	3	0	0	4 (3.88)
松の尾	中・近世	25	1	0	1	0	2 (8.00)
成岡・西ノ平	近世	29	1	1	1	0	3 (10.34)

参　考　文　献

1．金田義夫，1957：日本人の永久歯における歯根完成時期の研究。歯科月報，30：165－172.

2．藤田恒太郎，1965：歯の話。岩波書店。東京：57－98.

3．Martin-Saller，1957：Lerhrbuch der Anthropologie. Bd. Ⅰ. Gustav Fisher Verlarg，Stuttgart：429－504.

4．鈴木重一，1943：四肢化骨核発育に関するレ線学的研究。千葉医学会雑誌，21：349－417.

5．分部哲秋，1981：宮の本遺跡出土の幼小児骨。宮の本遺跡（佐世保市埋蔵文化財調査報告書）：110－113，119，147.

6．分部哲秋，1981：鹿児島県松之尾遺跡出土の乳児・小児骨。松之尾遺跡（枕崎市松之尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書(1)）：229－235.

7．分部哲秋，1981：日守地下式古墳出土の幼小児骨。日守地下式古墳群発掘調査（55－1－4号）（宮崎県文化財調査報告書23）：179－181.

8．分部哲秋，1981：宮崎県上の原地下式古墳出土の成年骨。上の原地下式古墳群発掘調査（宮崎県文化財調査報告書24）：135－140.

9．分部哲秋，1981：佐賀県大友遺跡出土の幼小児骨。大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書1）：254－264.

10．分部哲秋，1982：山口県朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の幼小児・成年骨。朝田墳墓群Ⅴ（山口県埋蔵文化財調査報告64）：207－211.

11．分部哲秋，1983：宮崎県高原町旭台地下式横穴出土の古墳時代小児・成年骨。宮崎県文化財調査報告書，26：112－128.

12．分部哲秋，1983：長崎県宇久松原遺跡出土の弥生時代幼小児骨。長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅵ（長崎県文化財調査報告66）：124－134.

13．分部哲秋，1983：佐賀県鳥栖市安永田遺跡出土の弥生時代幼小児骨。安永田遺跡（鳥栖市文化財調査報告書16）：112－114.

14．分部哲秋，1983：鹿児島県成川遺跡出土の古墳時代幼小児骨。成川遺跡（鹿児島県埋蔵文化財調査報告書24）：262－267.

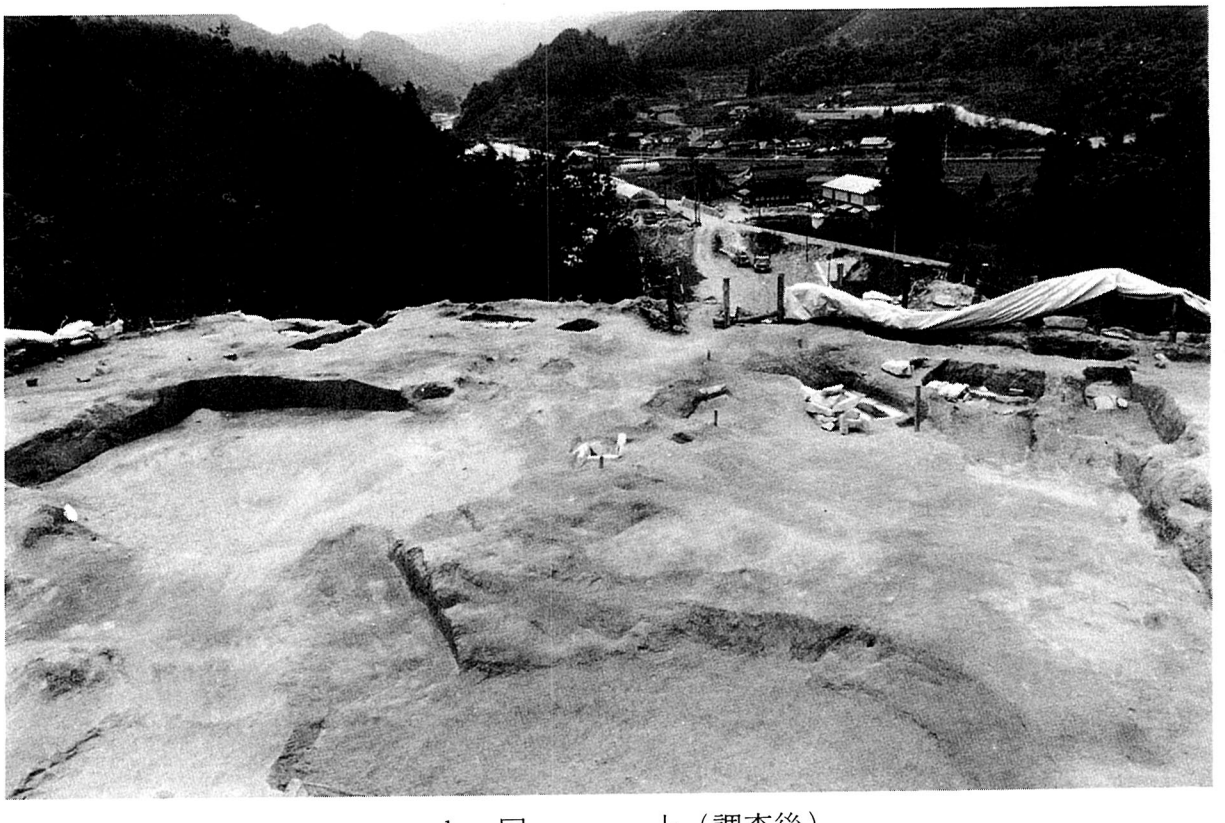
15．分部哲秋，1983：成岡・西ノ平遺跡出土の近世幼小児骨。成岡・西ノ平・上ノ原遺跡（鹿児島県埋蔵文化財調査報告書28）：383－388.

図　　版

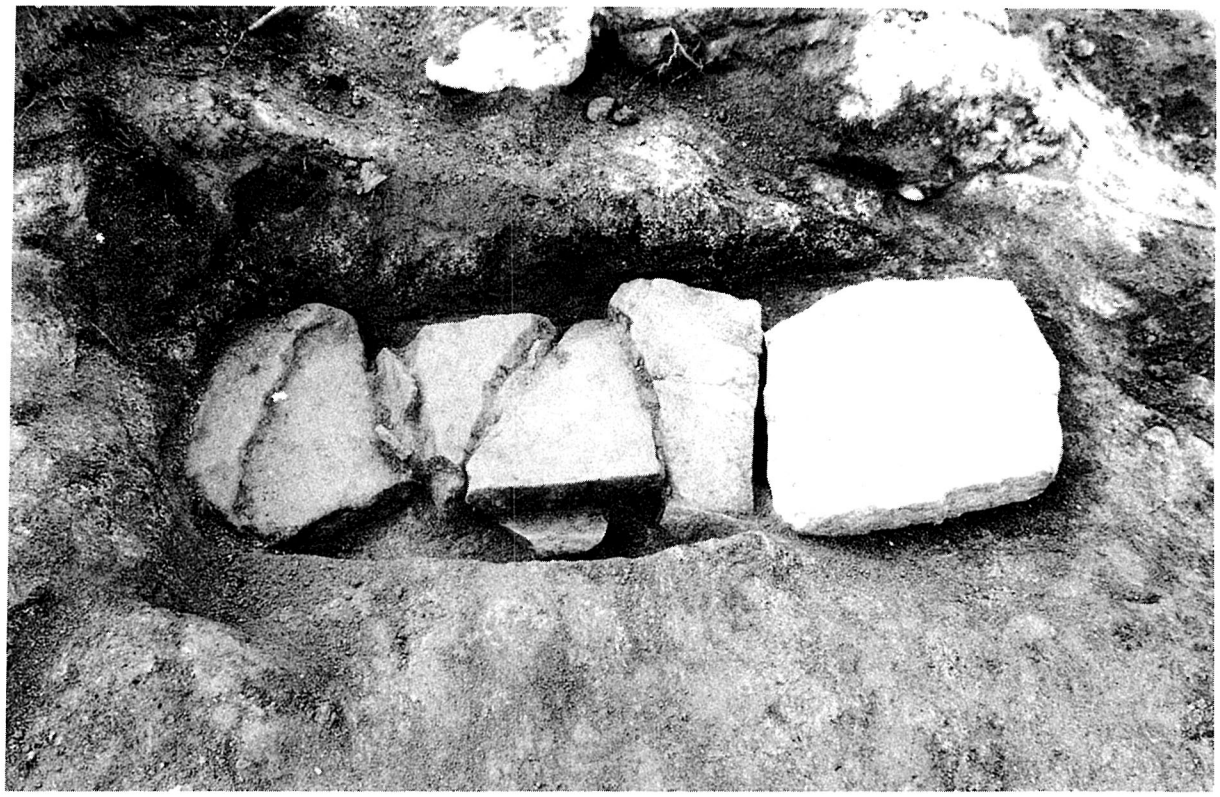
佐久良遺跡全景（航空写真）

Plate 2

a．佐久良遺跡近景（調査前）



b．同　　上（調査後）



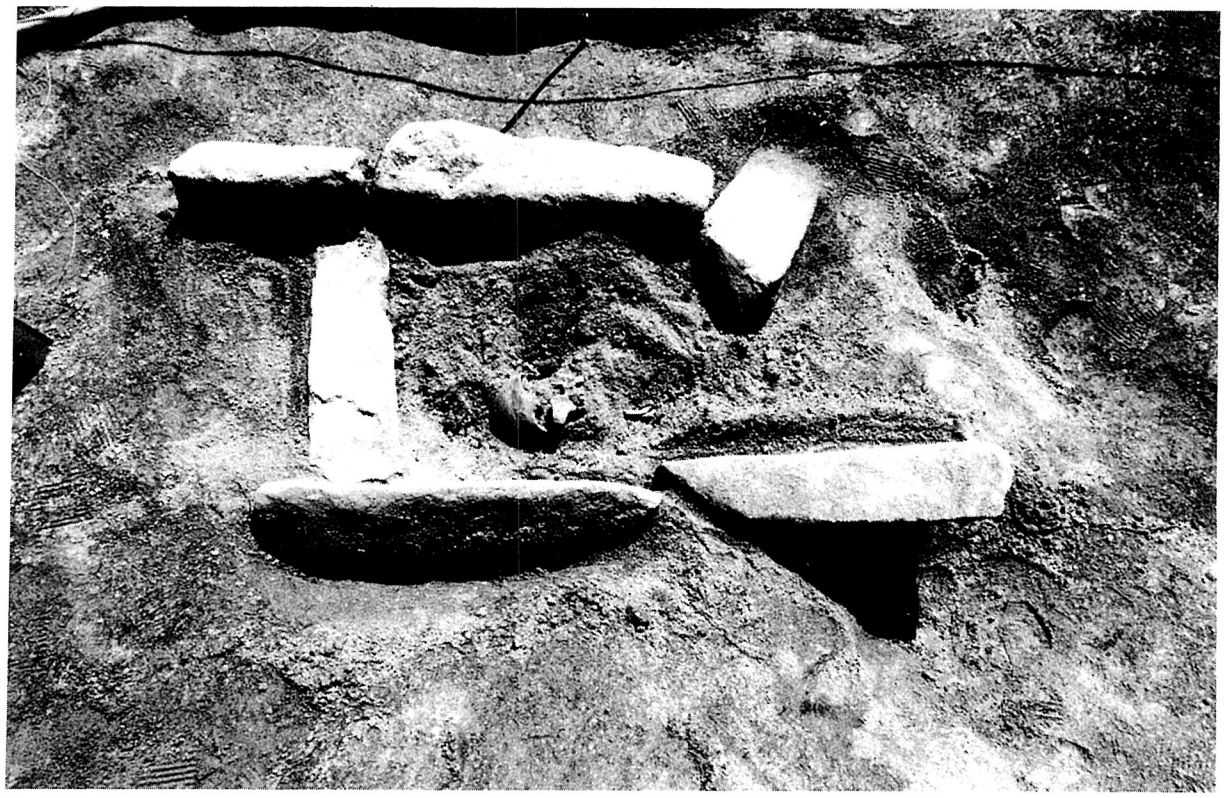
a．第１号石棺（検出時）

b．同　　上（開棺後）

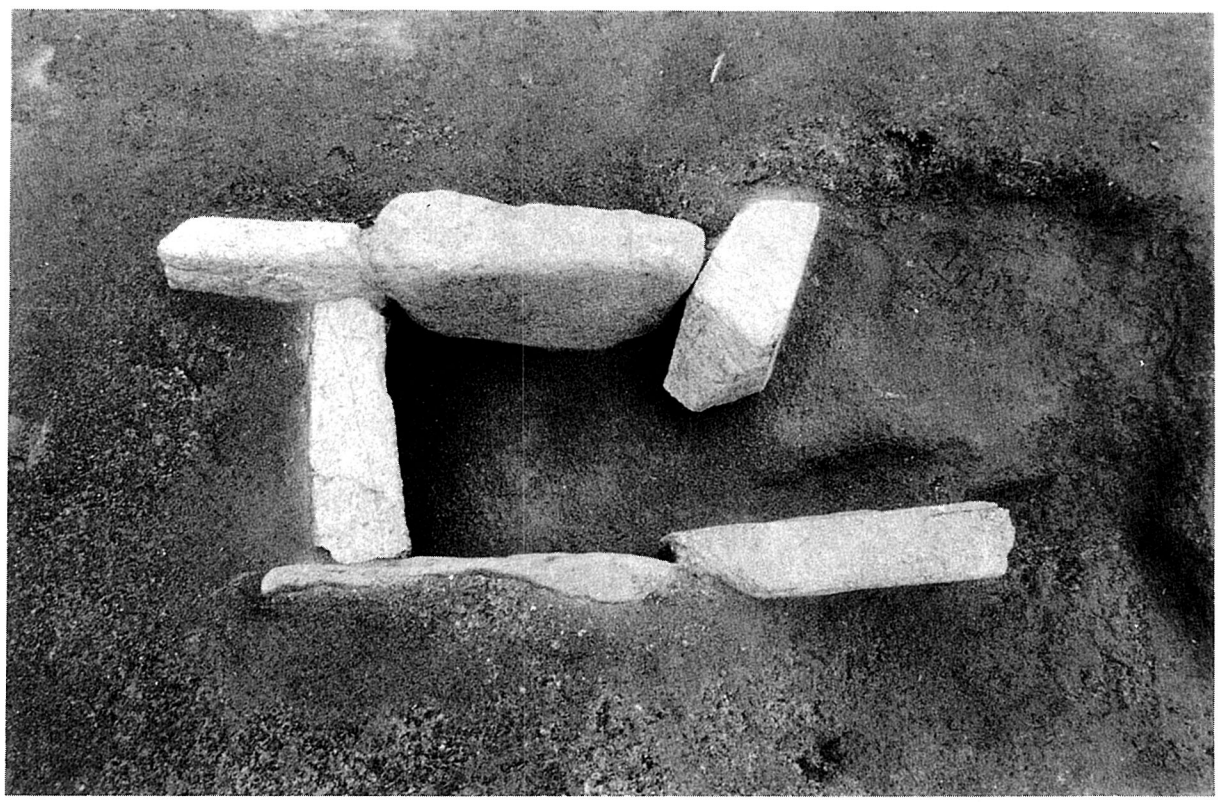
Plate 4

a．第１号石棺（調査後）

b．第２号石棺（検出時）



a．第 3 号石棺（検出時）

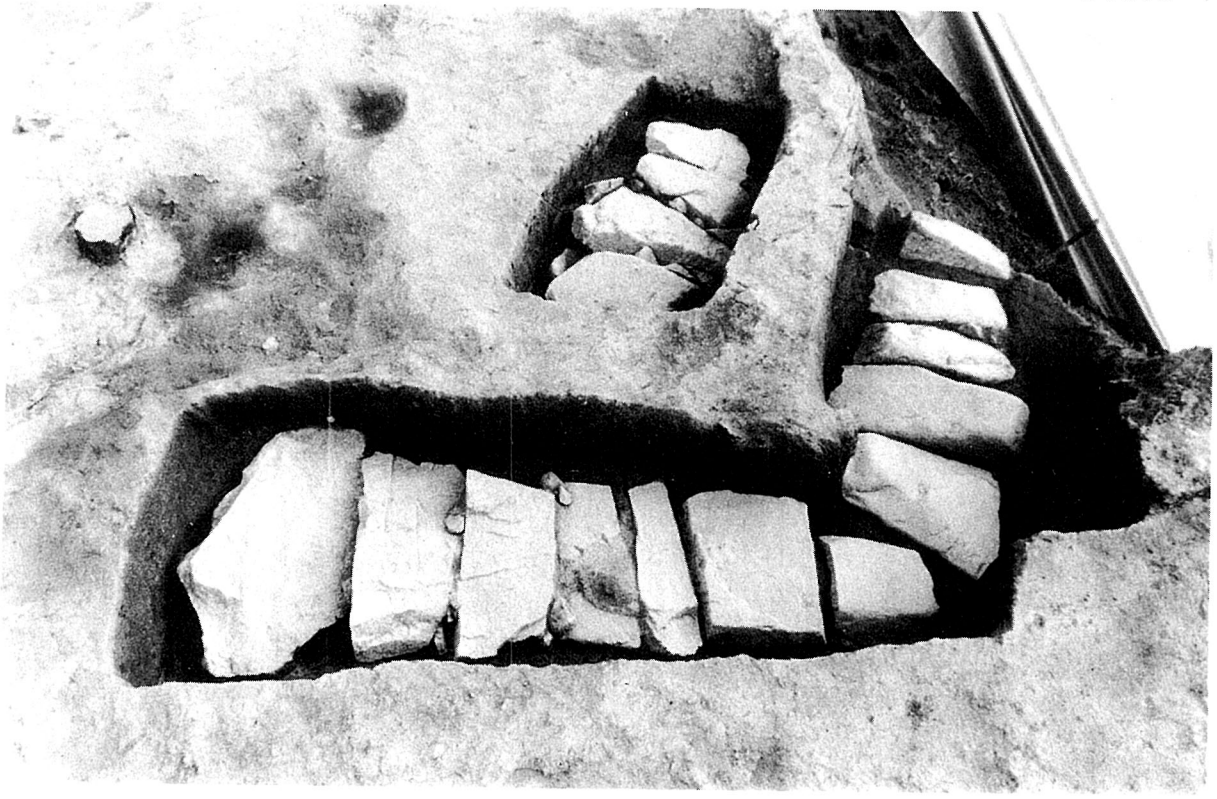


b．同　　上（調査後）

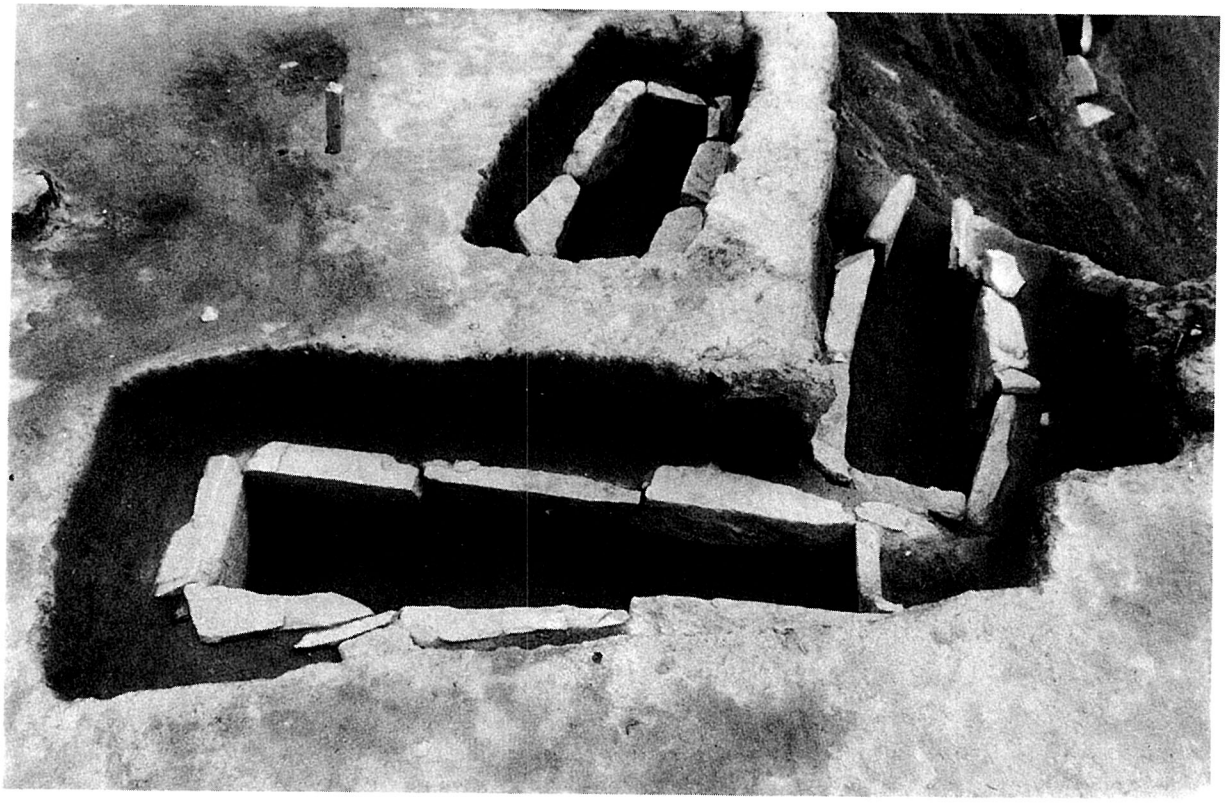
Plate 6

a．第４号石棺（検出時）

b．同　　上（開棺後）



a．第5，6，7号石棺（検出時）

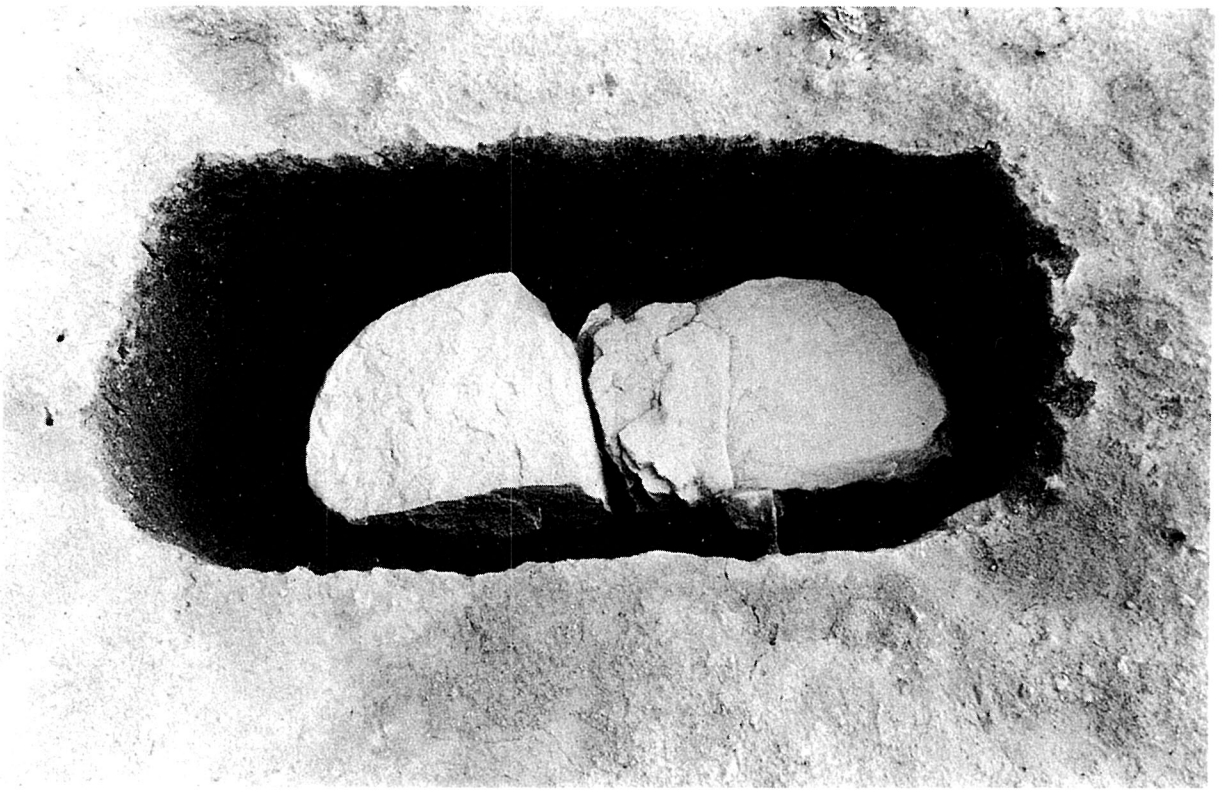


b．同　　上（調査後）

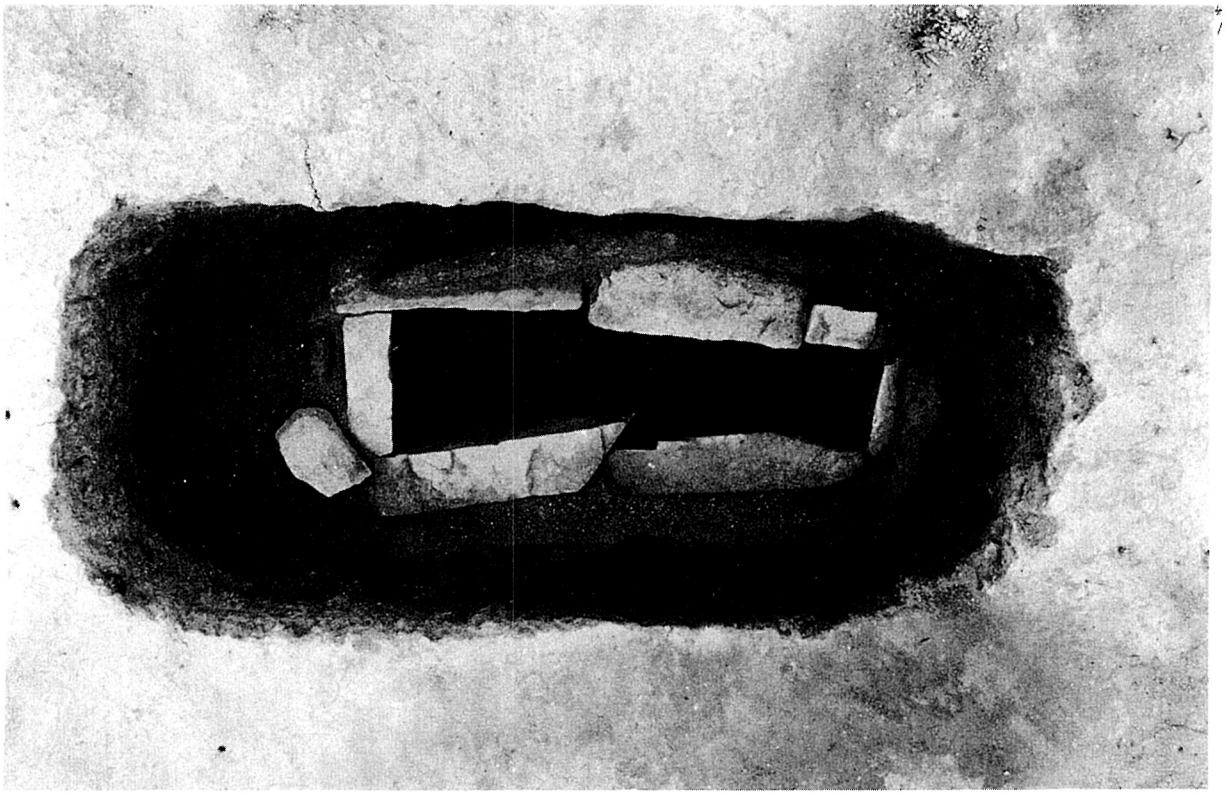
Plate 8

a．第 5 号石棺（検出時）

b．第 8 号石棺，石蓋土壙（検出時）

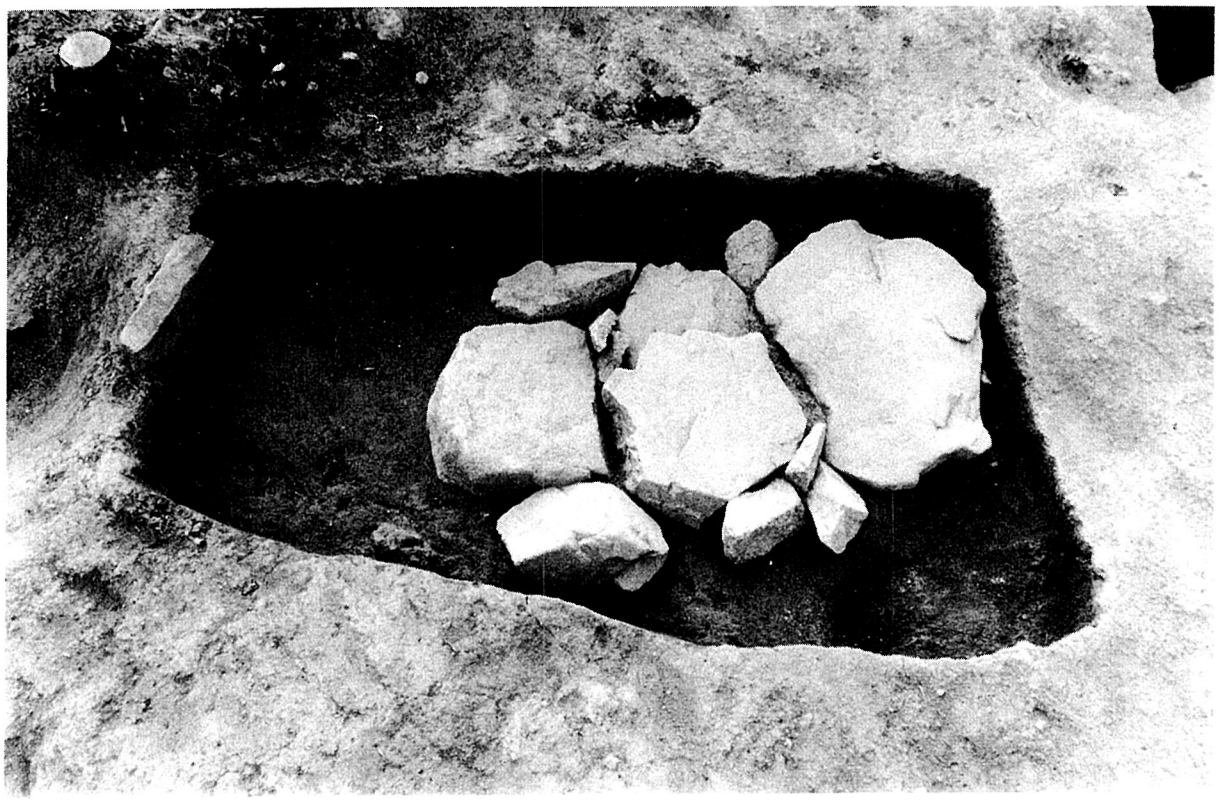


a．第８号石棺（検出時）



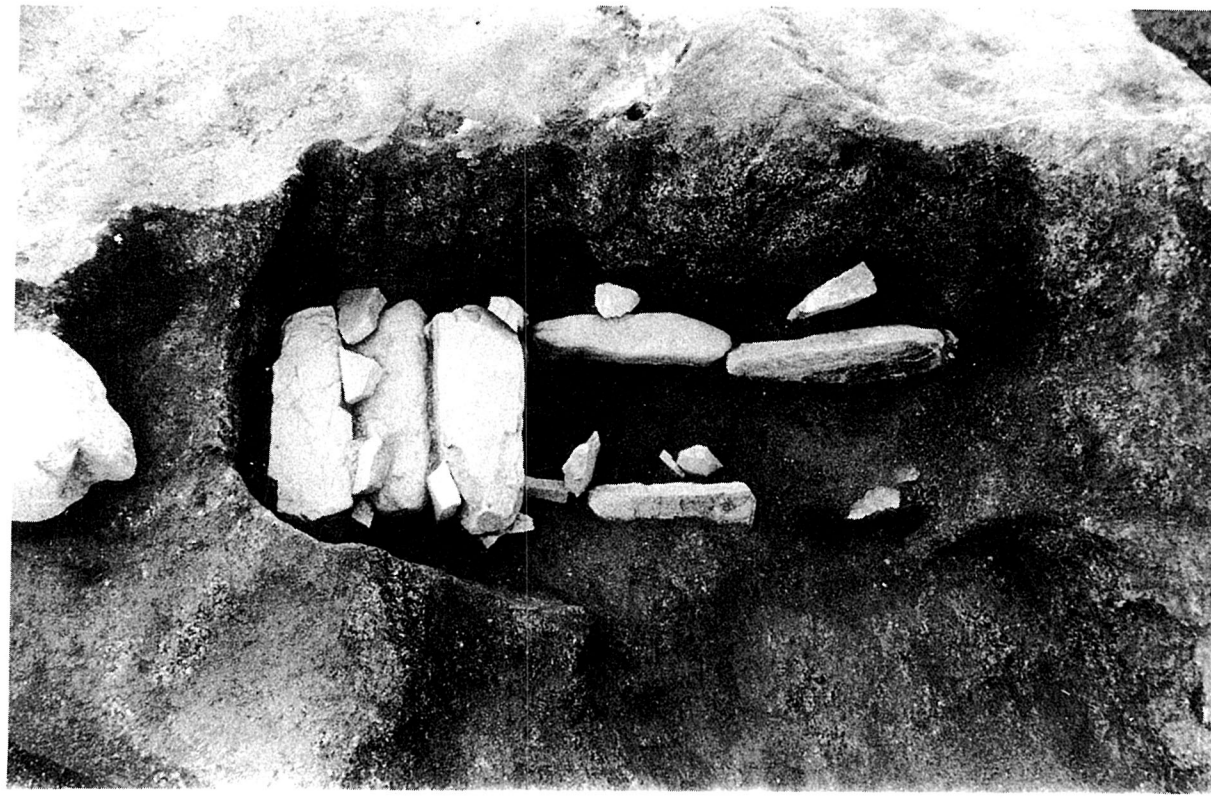
b．同　　上（調査後）

Plate 10

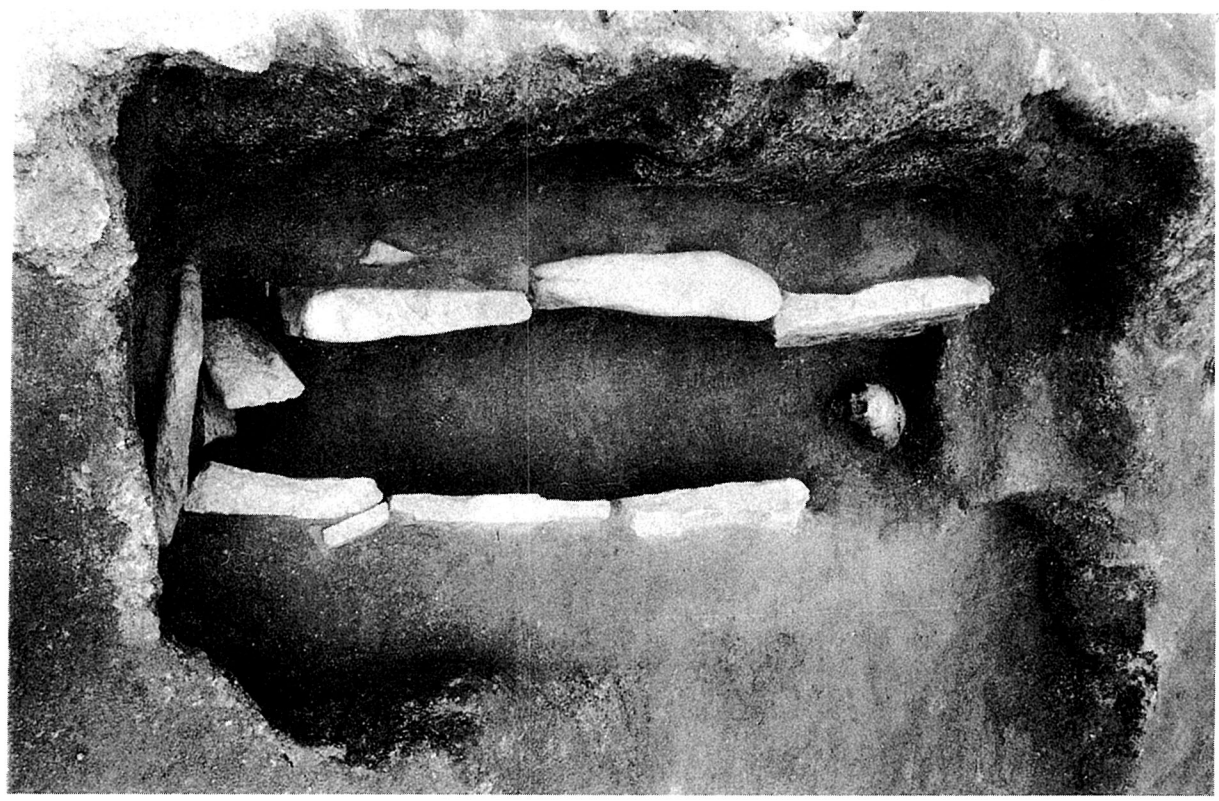


a．石蓋土壙（検出時）

b．同　　上（調査後）



a．第 9 号石棺（検出時）

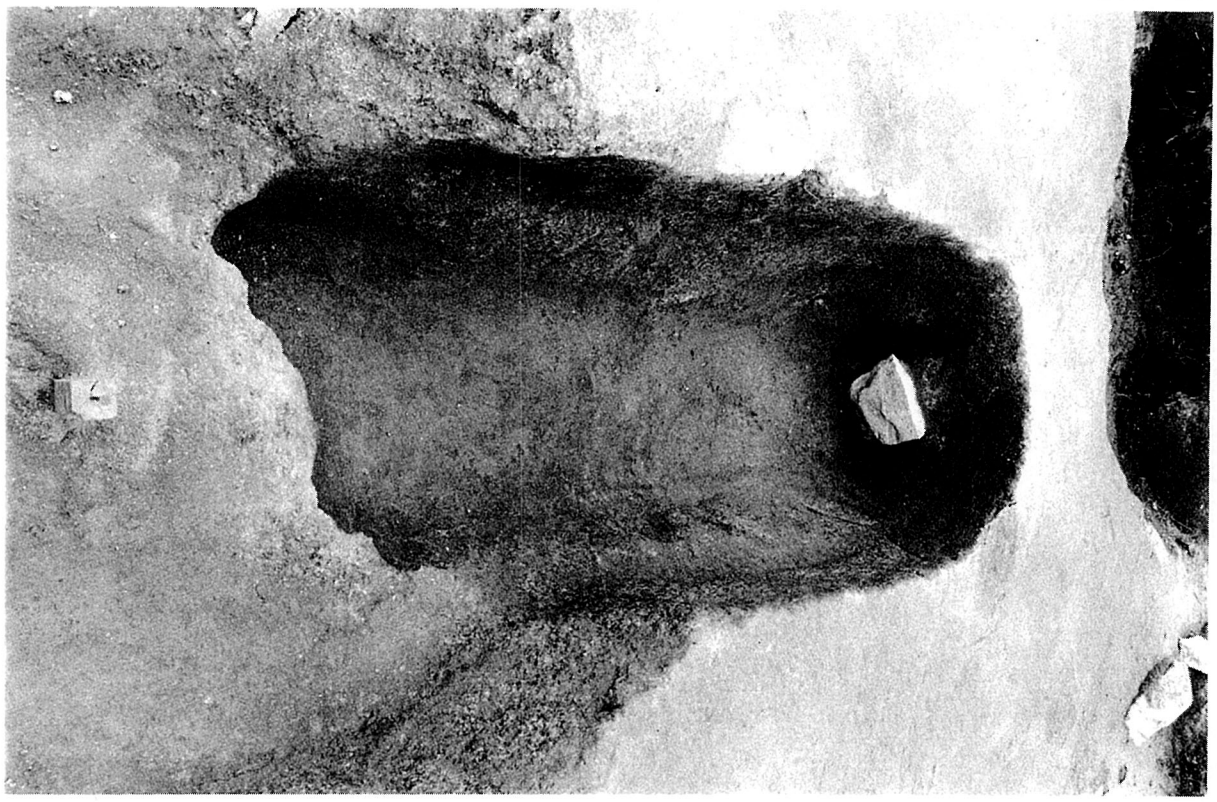


b．同　　上（開棺後）

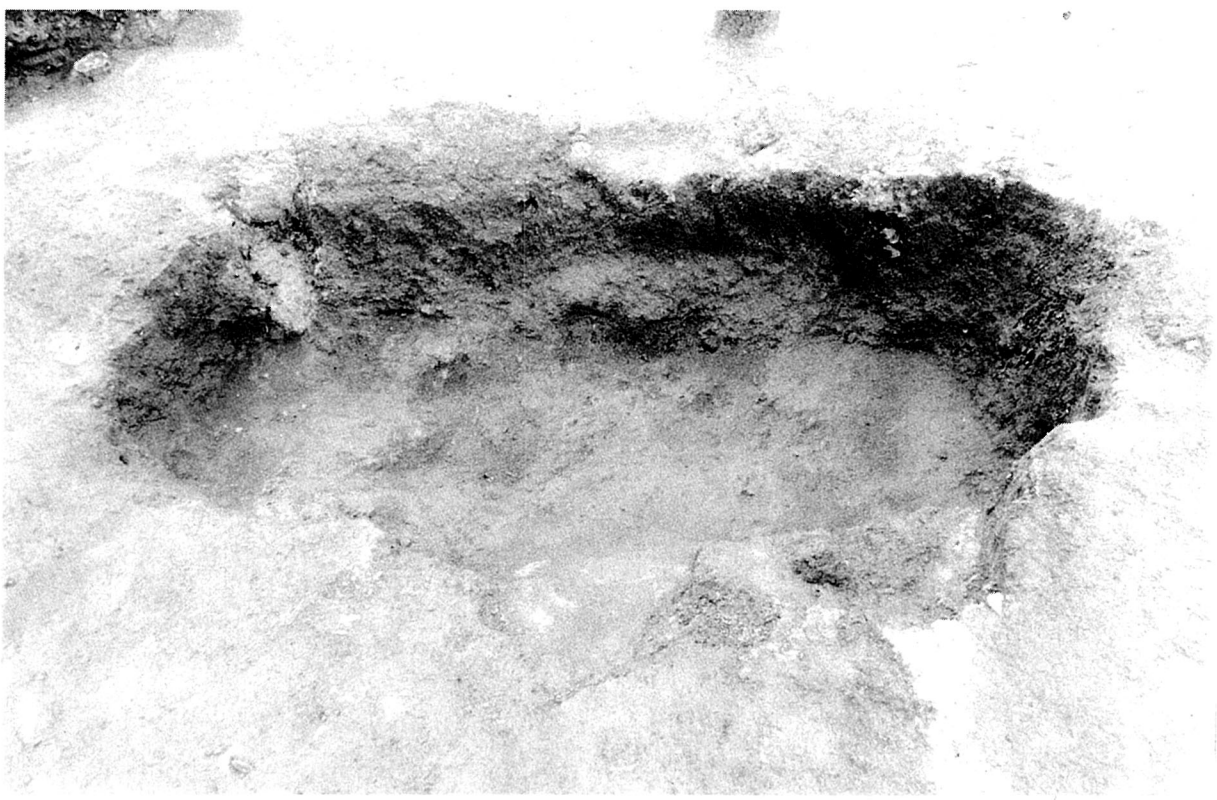
Plate 12

a．第10号石棺（調査後）

b．溝状遺構（調査後）

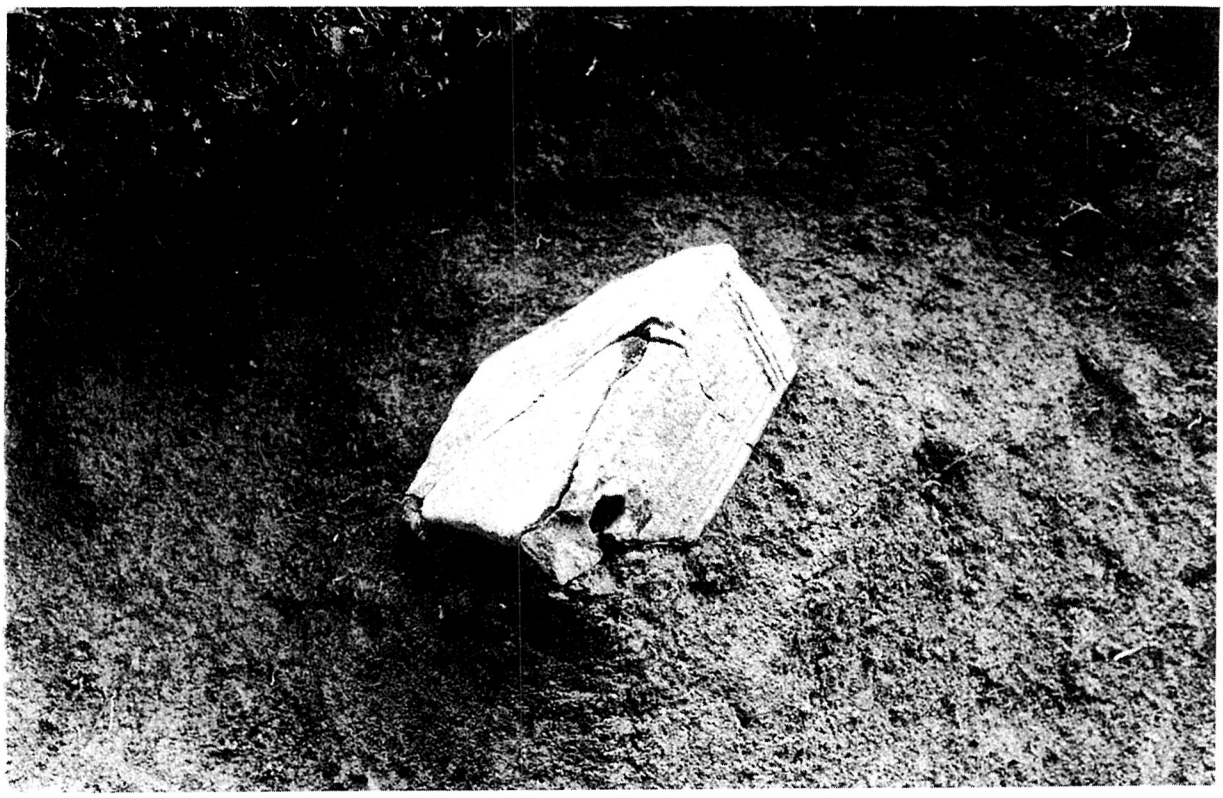


a．第 1 号土壙（検出時）

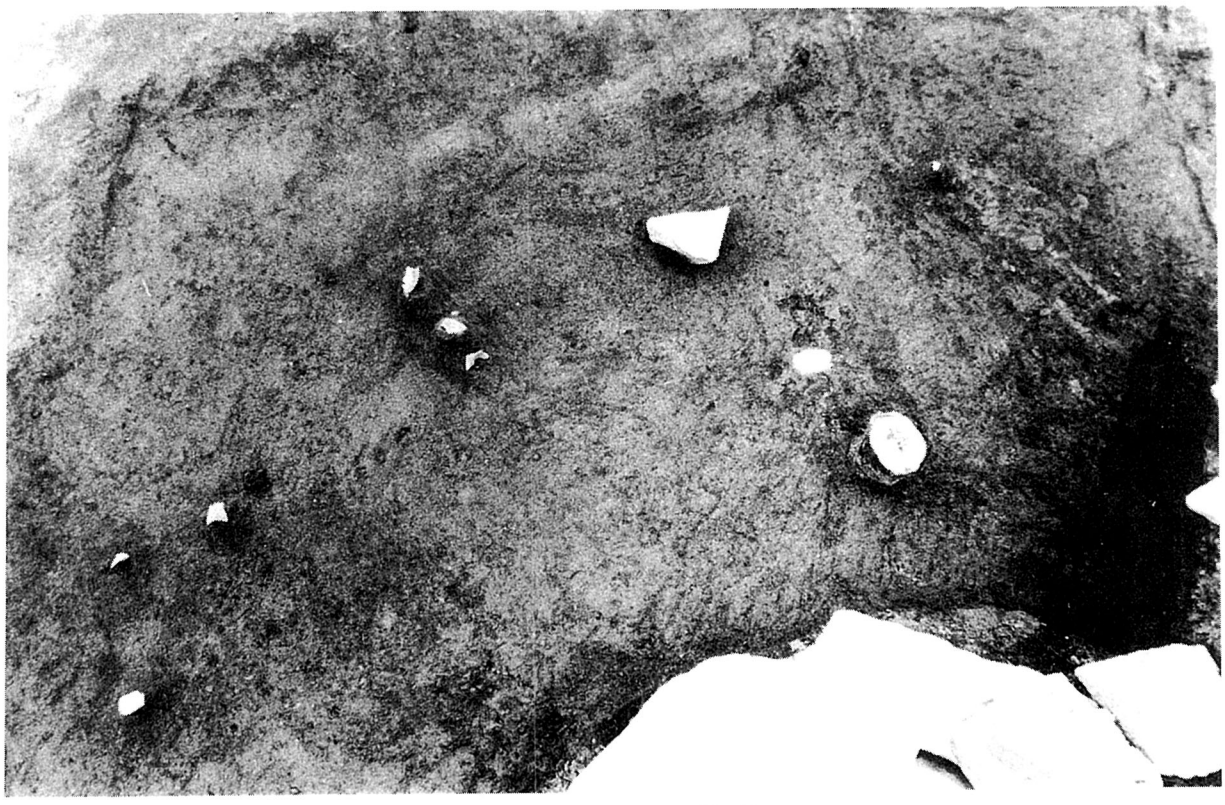


b．第 2 号土壙（検出時）

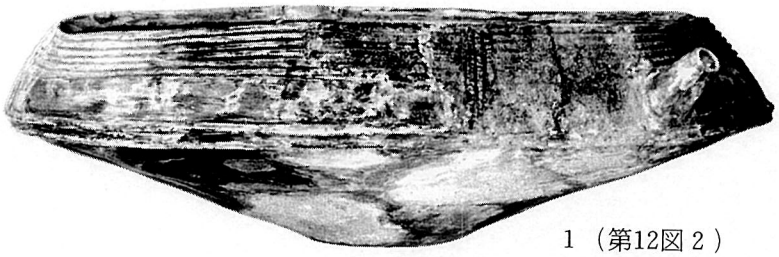
Plate 14



a．高杯形土器出土状態

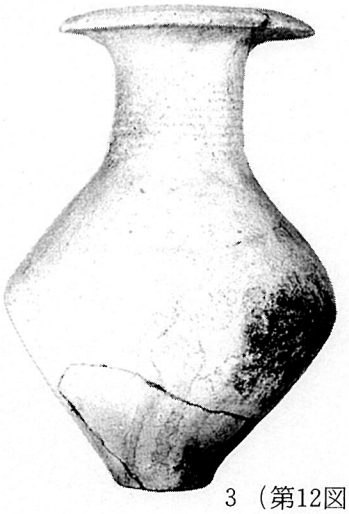


b．須恵器出土状態



1（第12図２）

2（第12図３）



3（第12図１）

4（第12図４）

5（第12図５）

佐久良遺跡出土土器

1（第15図１）

2（第15図２）

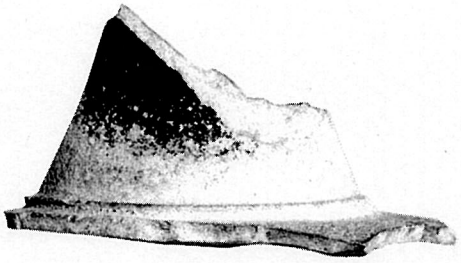
遺跡周辺出土土器

※（ ）内は実測図の番号を示す

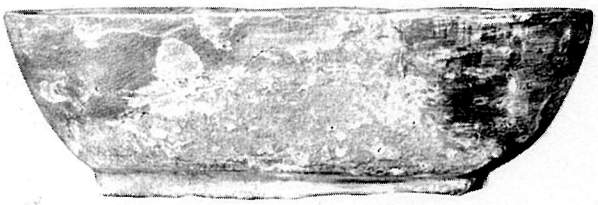
佐久良遺跡出土土器，遺跡周辺出土土器

Plate 16

1（第13図３）

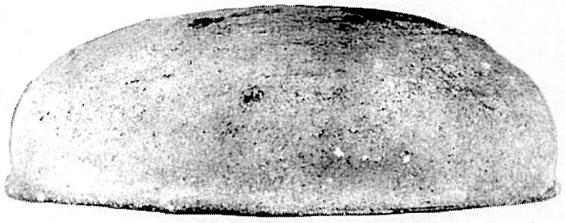


2（第13図２）



3（第13図４）

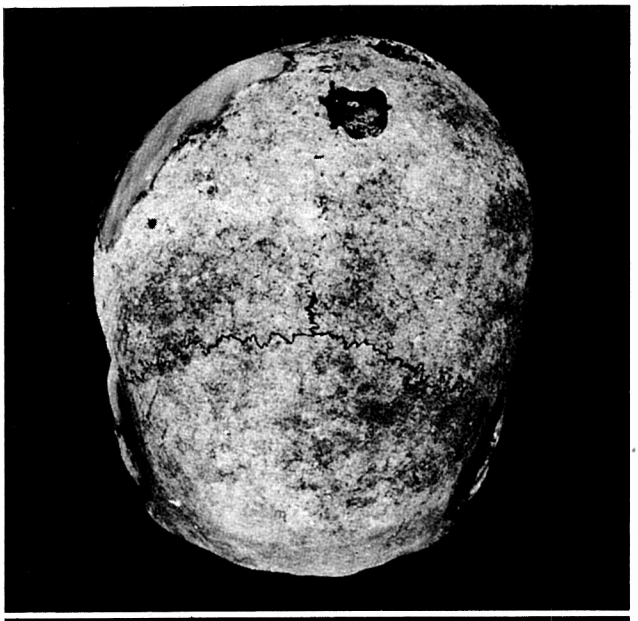
4（第13図１）

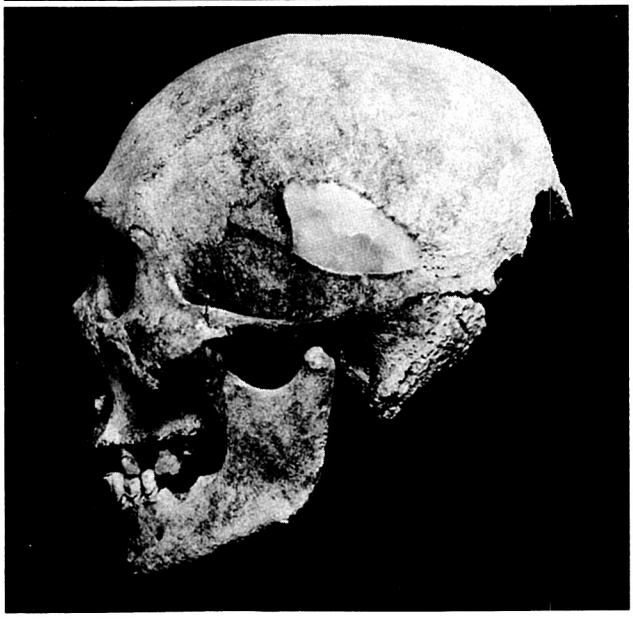


5（第13図５）

佐久良遺跡出土土器

図版（人骨）

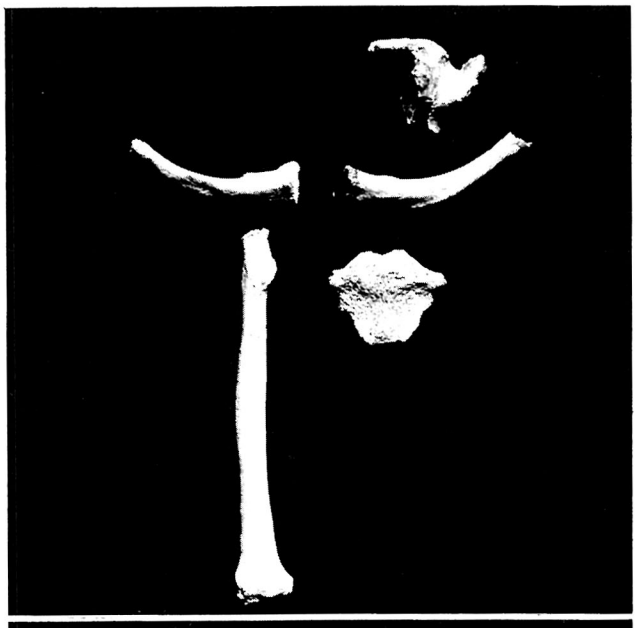


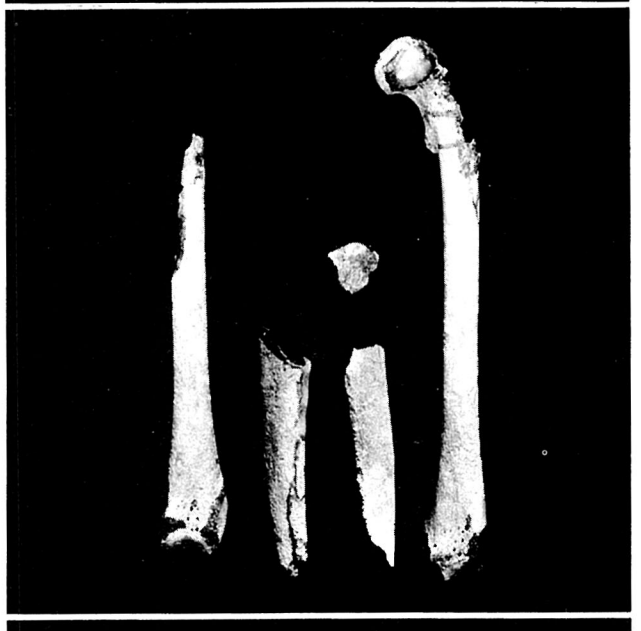


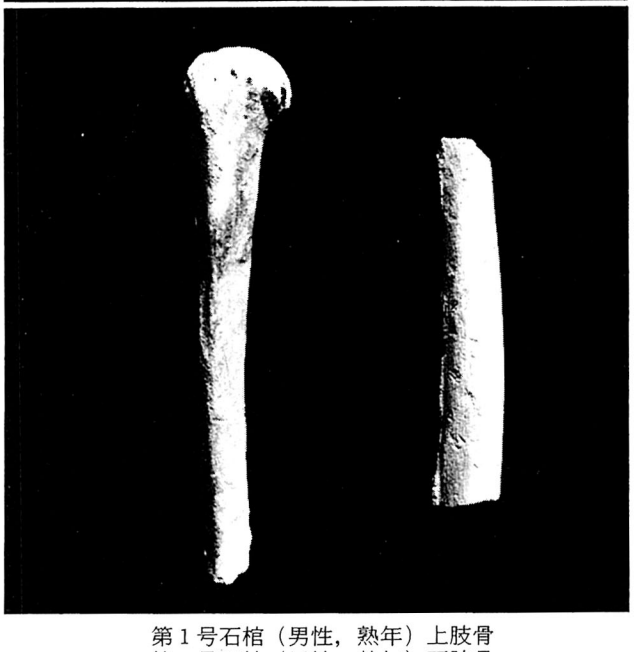
第１号石棺人骨（男性，熟年）
上＝上面，中央＝正面，下＝側面

第２号石棺１号人骨（男性，熟年）
第３号石棺１号人骨（男性，熟年）
第９号石棺人骨（女性，熟年）

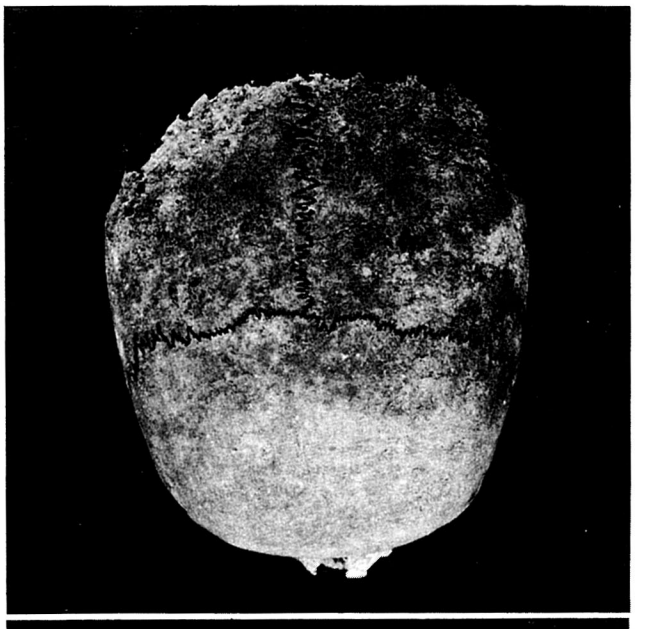
図版（人骨）







第１号石棺（男性，熟年）上肢骨
第１号石棺（男性，熟年）下肢骨
第２号石棺（男性，熟年）四肢骨



第４号石棺人骨（小児，10才）
上＝上面，中央＝正面，下＝側面

広島市の文化財 第 27 集
広島市安佐北区白木町所在
佐久良遺跡発掘調査報告

1984年3月

編集
発行　広島市教育委員会
（社会教育部社会教育課）
広島市中区国泰寺町一丁目4番21号
TEL（082）245-2111(代)

印刷所　㈱ 白鳥社
広島市中区東白島町11-12
TEL（082）228-2966